といふ寺があります、宗旨は日蓮宗で、應永年中に建立の古刹、建築に見るべきものがあります、寺内に俳宗芭蕉の句碑がありますが、是は半時荒淡々が寶暦年中に建たもので、碑文の末に「おほけなく、此文塚を、かへり花」の句が刻してあつて、一片の苔石、自ら雅致があります、次に

神明の社

乃ち神明町にあります、祭神は兩大神宮、天武帝の御宇白鳳年中に勸請されたので、例祭は七月十六日と、十月十六日、本市の舊社のその一です、同東二町に

西本願寺別院

があります、信證院と申して、文明年中に、樫木屋道顯といふ者、己が居宅を割いて當院を建立し、蓮如上人に献じたので、夫故に今尙樫木屋御堂の名が殘つてゐます、本尊の彌陀は十二代准如上人の作、長三尺一寸四分、始めの本尊は聖德太子の作、東京築地の本願寺に移して安置し

てあるといひます、本堂、書院對面所等、いづれも美麗でありまして、鶴の畫は古法眼の筆、黑書院の畫は探幽の筆、其外の間は竹隱齊敬甫の筆、鮎の畫は、筆力殊に妙を極め、畫工の模範とする所です、其隣坊に在る

善長寺

は淨土宗、本尊十一面觀世音、長八寸、永正十三年、三好義長此地に在陣の時、靈夢に依て境内の松樹の下より感得したゆゑ、松の觀音といふ言ひ傳へ、又本堂の前に將軍松といふ古木がありますが、三好義長、大和の筒井を討て凱陣し、此松に敵の首級を懸て勝祝ひの酒宴を催したゝめ、此名があるといふ、夫より、宿屋町に至れば

成就寺

といふが在りて、日蓮宗、應永年中の建立、天文年中に六條本國寺の日助上人、亂を避て此寺に錫を掛け、暫時化度された事があるので、今六條の名を殘し、堂宇古雅愛す可しです

金光寺

は成就寺の南横手にあります、今は堂宇廢頽に屬しておりますが、由緒のある寺で、本尊の藥師佛は、仁明帝の御守、珍努の海より網にて引揚げた靈像、夫故網道場の名があつて、寺内に名高い藤の花がありましたが、今は夫さへ枯果ましたが、有志者が遺憾に思つて、更に藤を植るの計畫があるといふ事です、その東隣

寶珠院

此の寺の堂の裏手に、舊土佐の藩士拾壹人の墓があります、是は明治の、初年、舊土佐藩が堺の警衛をしてゐましたが、港の海岸で佛國人と衝突し、之を殺害した罪に依て、箕浦元章以下十名屠腹を命ぜられた、其遺體を埋めたところですが、其忠憤義膽を感じて參詣の士女多く、香華の絶る間はありません、其摸樣は寫眞版に就て御覽あれ、但石塔の前に新しい卒塔婆が一基づゝ供へてあります、土佐の壯士俳優が當市の卯の日座で、十一士の事を脚色で演じ、大喝采を博した爲め、禮參りに來て供へたのです、當寺の南側、材木町東三町には、彼の蘇鐵で著名の

妙國寺

があります、山號は廣普山、宗旨は日蓮宗、開基は日光、寺地寄附の旦那は三好實休、諸堂の建立は油屋常言、境内三千坪あつて日宗の一本山、本堂には日蓮上人と開基上人の像を安じてあります、堂の前に三重の塔があります、實休の舍弟安宅木冬康、當寺に於て連歌を催し「古沼の淺き方より野となりて」といふ前句の出でしをり、兄實休戰死の報を聞き、當座の人に代り「すゝきに交る芦の一もと」いふ附句をして、そのまゝ吊合戰に討出たる名高い話があります、又天正十年德川家康、堺の浦遊覽の時、當寺を旅館に定め、明智光秀謀叛して織田信長公父子を害せし由を聞き、此寺より直ちに大和伊賀を越へて本國へ歸つたのです、寺内の泉水花木風致があります、彼の名高い蘇鐵の古木は方丈の前にありますが、幹の高さは三間餘、大枝二十三本、小枝七十八本、四方十尺に達してゐます、三百餘年の星霜を經てます〳〵繁茂し、蒼翠滴るが如く、當市の名物の中で第一に數へられ、遠近の旅客の此地に來る者、先づ之

を一覽して賞嘆せぬ者はございません、其大略の姿は寫眞版に就て御覽あれ、當寺には名高い什寶が數多ございますが、其中の優等品を左に申し述ませう

○光り天目の茶碗（紫古金襤袋附）一個

是は天正十年德川家康堺遊覺の日、當寺を旅館に定め光秀が信長父子を害せしと聞て歸國の發途の節、其祝ひとて住持日光上人抹茶を捧ぐ、其茶碗頗る家康の意に適ひ、其名を問ふ、日光灰被きと答ふ、其音が早勝と聞えたので、家康吉兆で當寺の隆榮を祝して秘藏の光り堂

堺妙國寺蘇鐵ノ景
堺停車場ヨリ十二三丁

The Sago-qalm (Cycas revoluta) of Myokokuji (Buddhist temqle), Sakai One mile from Sakai Station.

あると喜悅しその茶碗を請ひ受け、當寺の

天目茶碗に、寶の一字を朱で書、して與へ、且紫地古金襤の袋に入て賜つたが、之を妙國寺切れと稱して他に所藏あるを聞きません、

○小豆形青磁菲瓶

是は當寺の開基三好實休の所藏でありましたが、同人生害の際み、敵手に奪はれん事を吝み、既に破却しやうとしたのを、侍臣某之を止めて保存し、後松永久秀に贈つたのを、日光上人久秀を說いて當寺に寄附させたといふ事です、

○朝鮮古劍（長サ二尺五寸八分、巾一寸二分）一口
（黑塗に蒔繪がしてある）一本
○軍配一口
○長刀袋（皮に金文字の題目が記してある）一口
是は加藤清正の寄附、古劍は朝鮮の役の戰利品

○明畫春日遊山の圖（竪七尺五寸五分、横四尺五寸二分）
天啓癸亥夏仲壽、呂夢芝の畫贊七絕が書てあります、
○潮鳥（雪舟）○惠遠法師の像同筆○八方睨の虎（毛益）○日蓮聖人の像（大藏卿）○釋尊○文殊○普賢、三幅兆殿主）○十六羅漢、十六幅（筆者不詳）○四季耕作の圖屏風一雙長谷川雲谷現住日因敬正寄附當寺の蘇鐵の紀と銘を、本

州の高志養浩が書いたのが本寺にありますが、長文故略します、同寺を南へ行くと

殿馬塲

へ出る、此所は幕府の時代には、本行所屋敷の舊迹で、道路が格別に廣濶うございます、今は官衙學校が軒を併べてゐます、其重なるものは、區裁判所、市役所、收稅署、高等小學校、女學校等ですが、孰も洋風の建築、巍々として美を競ひ、又堺起業會社があつて、日々數多の工女を集めて、盛んに玉簾の製造をしてゐます、その西の森の中に稻荷が祭てありますが、なか〳〵の流行神です、是より南へ一町戎の町に至れば

菅原神社

があります、境內方壹町、神殿巍々として樓門に映じ、此に琴平の社、影向の梅、樓門の傍に小西行長寄附の松、東に辨天の社其他數多の末社があります、又和泉式部の塔があります、東南の隅に連歌所が設けてあります、庭園の結搆面白く、泉水あり築山あり、泉水には蓮を植ゑ魚を

養ひ、築山には四季の花木を栽ゑ、風景愛す可しです、當社は明曆三年の造營、神容は菅公自作、日本七天神の一つ、當津の海濱より上つたとの傳へ、又水鏡の御影として、菅公自影を水に寫して描いたといふ、當社第一の什寶、往古は塩穴の鄕湊村に在たのですが、中古北の庄の今の地に勸請したのです、此地は菅家の始祖天穗日命以來の領地ゆゑとのことです、神祭は七月十五日を夏祭と唱へ九月十五日を秋祭と唱へ、此日に渡御があつて、市中及び近鄕近村より多くの參詣人があります、又例月の廿五日も參詣人があつて賑ひます、其境內の廣く社殿の美なる、日本の天滿宮の中で數へるものでせう、夫より當社の北門東二町ばかりの所に

東本願寺別院

があります、本尊の阿彌陀は聖德太子の作、堂宇の壯麗、西本願寺別院に劣らぬ結搆でしたが、五六年前に火災にかゝり、只今再建最中、殆と落成になん〳〵としてをります。

向泉寺

は市之町の東にあつて、宗旨は眞言宗、山號を三國山と云ふ、天平年中行基僧正三國山、今の方違神社の側に創立し、鞍作鳥佛師をして千手の像を造らせて佛殿に安置されました、今の本尊則ち是です、講堂、寶塔鐘樓など、巍々として建列ねてあつて、方違の社の別當をして、例の方崇除災の神符は此寺から出してゐましたが、永正年中に兵火に罹つて灰燼となり、其後今の地に移されて再建され、尙方崇除災の神符は此寺から出てゐましたが、維新後全く神佛分離して其事は方違社の方へ一任になりました、舊地は掘河泉の境ゆゑ、三國山と號し、掘河に背き、泉陽に向つてゐるゆゑ、向泉寺と稱したので、又行基僧正の堀られた井戸が名井であるゆゑ、向井寺とも云ひます。

如意の神社

は市の町の東五町にあります、元は寶殿庵の寺内にあつたのですが、今は神社のみになりました、祭神は彦炎出見命、彼の滿干の寶珠に依て如意の神號を奉つたので、住吉の末社です、堂社の北通りは大小路、北側に學校があります、是ゞ

熊野小學校

去る明治十年天皇御巡幸の際、當校に駕を枉げられ、生徒の授業を天覽遊ばされた事があります、今に玉座の迹を存しております、近頃再築あつて頗る美麗、是より南甲斐町東一町に至りますと

開口神社

があります、此社は式内であつて、又の名を三村の社、俗に大寺とも云ひます、社地廣大、祠宇壯麗、末社もあまたあります、繪馬堂及び三重の塔は、建築尤も巧妙、當社は住吉の外宮と稱して、古へは朝廷より二十年毎に社殿の修補を仰附けられたので、祭神は伊弉尊の御子、事勝食勝國長狹命、後に生國魂神、塩土老翁の大神をも併祭つたのです、大寺の名のある所因は、昔は兩部で、密乘山念佛寺といふ眞言の佛刹であつたからです、金堂食堂鐘樓などもあつたのですが、維新の始め神佛の區別を明にせられ、寺を廢し諸堂を毀たれましたが、其紀念として今は塔のみ殘つてゐます、又三村神社の名は、此境内は、舊は塩穴の鄕、開口

ふることです、社地の東南にあつて、昔は瑞籬さ

Kaikō Jinja (Shinto Shrine), Sakai. Close to Sakai Station.

堺ノ社　神口明界
丁五リヨ場市俗

水戸村の三ん村の間にありましたから地つた

いふ森があつたのですが、今は僅に古木一二株をとゞむるのみです、境内に茶店軒をつらね、又寄席などがあつて、諸興行間斷ありません、當社は市の中央に位してゐますから、貴賤の詣人他社に勝りその繁昌比ひなく、殊に近年社地の所々に櫻牡丹などを植ゑ、花時には之に火を照しますゆゑ、見物郡集して又一層の賑ひです、祭典は七月十二日と十一月十二日が例祭、九月十二日が大祭、此日渡御があります、本社の造營は明暦元年です、其結構の一班は寫眞版について一覽あれ、當社の南門の前に

名物大寺餅

を賣てゐます、價は廉で味は美――――又西門の前に

海會寺井

一名を金龍井とまうします、海會寺は今南宗寺の境内にありますが、元は此に在たのです、開基龍峯和尚龍神の告に依て此井を堀たといふ傳へ、夫は何うか知れませんが、其味清美、泉南第一の名水です、是より東宿

院町の東一町に至れば、大きな石の華表が見える、是が宿院、華表の側に小祠がある

胄社

即是です、俗傳に住吉神三韓征伐凱陣の時、御兜を脱で藏められた所といひます、其東手の廣い境内、古い松が幾株も生ていて、夫を丹牆が圍繞てゐる、是ゞ

宿院

乃ち住吉の御旅所、家隆卿が「みな月のけふのさかひにみそぎして、千歳をのぶる神の宮人」と詠じられた、名越の岡の舊迹です、毎年八月一日、荒魂の御稜には、住吉の神輿こゝに渡御あつて禊祀を修せられますが、其神幸の賑ひ世上に高く聞え、五畿の士女參詣して市内に充滿します、近頃は大島の神社も、その前一日こゝに神幸があります、雜沓翌日に讓りません、夫故兩社の祠があります、南の隅に穴池があります、之を

飯匙の池

と云ふて、彦炎出見尊が龍宮で得られた干珠を納めた所といふ傳へで、當所の由緒の一つです、境内及び近傍の賑ひ云はんかたなく、青物市場がある、勸商場がある、宿院小學校がある、數多の寄席がある、卯の日座も燒けましたが、目今建築中で、やがて出來上ります、日夜多くの露店物を鬻き、諸人蟻の如く集り、市内熱鬧の第一位を占めてゐます、此祠の前南北の通りを

山の口筋

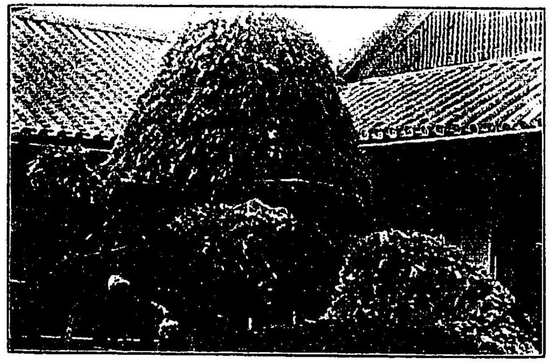
と云ひますが、大阪の心齋橋といふやうな處で、雜貨店左右に軒を連らね、當市中第一の繁華、日夜賑ひます、是より大町東三町に、彼の名高い

祥雲寺

があります、俗に松の寺と云つて、松を以て鳴る、宗旨は禪で、山號は

龍谷、京都紫野大德寺に屬してゐる、本尊は聖觀音の座像、開基は澤菴和尚、檀那は谷正安、寛永五年の建立、照堂、方丈、小方丈、庫裡、鐘樓等完備して、額は和漢諸名家の筆になつて、實に一見の價があります、方丈の庭に名高い五葉の松があります、枝葉左右に流て八九間、高さ一丈五尺に達し、四時若萃を改めず、其形涼笠五蓋を風流に重ねし如く、頗る面白く見られますが、豐公の愛せられた鉢栽の松だといふ傳へ、左もやと想はれます、松は寫眞に寫してありますから、尙その趣を一覽あれ、又庭の南に蘇鐵があります、株の數二十餘、幅十間にあまつて、蒼色常

堺　祥雲寺ノ景
堺停車場ヨリ七八丁



Shōunji (Buddhist temple), Sakai.
Close to Sakai Station.

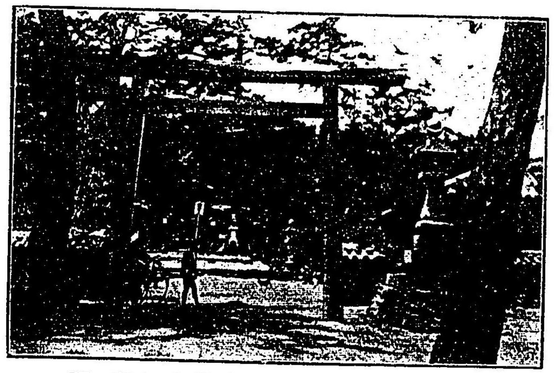
に深く、是亦一奇觀です、方丈の襖は狩野秀信、山水、七賢、花鳥など畫いてありますが、頗る巧美に出來てゐます、當寺に種々の寶物があります、其内殊に優等なものを撰んで、左に御吹聽いたしませう○後醍醐天皇振筆壹幅（紙本和歌一首）○釋迦像壹幅（絹本、中將姫筆）○涅槃像壹幅（絹本、土佐光重筆）○三尊及十六羅漢壹幅（同禪月大師筆）○十六羅漢像十六幅（唐畫、筆者未詳）○六祖像六幅（紙本、雪谷筆、澤庵和尚贊）○荒磯屏風一双（野村宗達）○茄子形硯、紫石、壹個（後水尾帝より澤庵和尚へ賜はる）○堆朱香合貳個（大は徑一尺七寸、小は徑六寸八分）○青貝の卓壹個（高サ貳尺五寸、人物及梅樹摸樣）以上總て澤庵和尚以來持傳へてあるさうですが、中でも宗達の波の屏風殊に名高く、澤庵禪師の恩賜の硯は實に結搆です――是より東郊へ出るを巡路として、先づ北の端にまします

方違神社

世に方違の社といふのは是です、總て此邊を三國が丘又は三國が衢とも申します、攝河泉の堺といふに依て然か名づけたものです、萬葉集に

も三國山の歌があります、則ち其歌を祠の傍に石に刻してあります、本殿拜殿とも壯嚴で西に向つてゐます、祭神は神功皇后、皇后征韓の時天神地祇三千百五十餘座を勸請し、凱旋の後葦の葉に埴を包み、方違の祓をして、今の住居に鎮座あつたのです、後世此に神靈を留められ、方違の祠と尊崇し奉つたのです、夫故に世人家宅を轉する時は當社に參詣して、除厄の神符と葦の粽を受るを例として、日々斷ることがありません、殊に參詣の多いのは節分です、住吉吾彦についての繁昌、近年社地の中に花樹芳草を植え、風景の面白い所に茶店をも設けてありますから、春秋は

堺方違神社ノ景
堺停車場ヨリ十二三丁



Ho Chigai Jinja (Shinto shrine), Sakai.
One mile from Sakai Station.

とりわけ賑ひます、社殿の摸樣は寫眞に就て一覽あれ、當社の南手に接續する丘陵は、則ち

百舌耳原北陵

反正天皇の御陵です、南方に參拜所があります、周圍二百五十間餘、陵上の靑松枝葉相交り、其間に櫻楓を點栽し、繞りの池水は常に淸波を漂へ、鳧鴨數百水藻をかついで得意氣に遊泳ぎ、風色頗る淸雅、且此邊は一帶岡阜を爲せるを以て、堺市の全景と、芽海の半面を一眸に收め、眺望も極めて佳絕です、此を東に距ること一町ばかり、一つの森があります、

天王の森

といふ、神殿又方違に劣らず、俗に東原社といふ、祭神は、中央素盞雄尊、左右は王仁と菟道稚郎子命、境內幽靜、櫻樹數株あれば、花の時雲とかゝり雪と散り、之を見んとて群來る人多く、且は堺市第一の觀花の場所です、大祭は七月の十六日、茲より一町餘西南に瓦葺の家幾棟か見

ますが、是なん

天王山紅谷庵

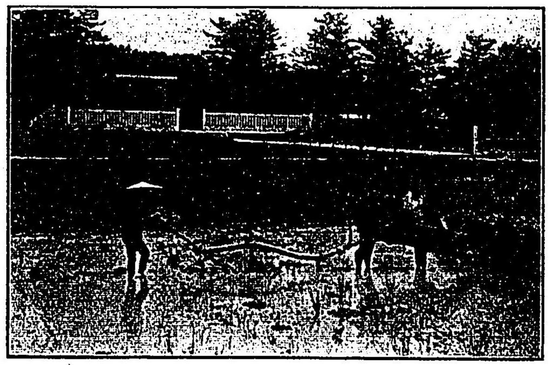
と稱する禪寺です、土地高燥、眺望佳絶、閑靜極まる雅地です、當庵は其昔本市の豪商紅谷某の別莊でしたが、中頃牡丹花肖柏晩年爰に住居して、大永の七年に沒去され、其遺骸を南宗寺に葬り、後肖柏の持佛を佛殿に安置したのが、今の本尊の觀音大士です、當寺に門人下田谷宗柳が畫いた肖柏の像があります、近年有志者堂宇を修補して、今日の觀をなしたのです、堂後に再建の願主環溪禪師の塔があります、當山より南三町を隔てゝ

大仙陵

則ち仁德天皇の御陵があります、兆域の大なること、他に多く其例を見ざる所です、陵外の堤千二百八十間餘、周圍の池は洋々として湖の如く陵上竹樹多く、周圍の堤上には松を栽てありますが其翠色池水と相映じて、清雅幽邃、人をして一見かたじけなさに涙こぼるゝの感を起さしめます南面に御門を設け、外壕の工事も全くなりまして、一層尊嚴を加へました、此邊に御陪塚九ッ、所々に散在して、自ら林丘の趣を爲し、自ら風致を添へてをります、此天皇の御紀畧は大阪高津津のところに述たれば爰には省きます、又此地を百舌耳原とまうす譯は、仁德天皇六十七年冬十月河內國石津原に行幸あつて陵地を定め、始めて陵を築かしめたまふ日、一頭の鹿が野中より走來つて役民の中に中て忽ち仆れ死だので、人皆其卒死を怪みて疾を探つて見ますと、百舌が耳の中から出て飛去りましたゆゑ爰から西南四町あ

仁德天皇御陵ノ景

堺停車場ヨリ廿四五丁



The Sepulchre of the Emperor Nintoku (A.D.313).
About two miles from Sakai Station.

其所ろを百舌耳原と號けたと、日本紀に出てゐます、

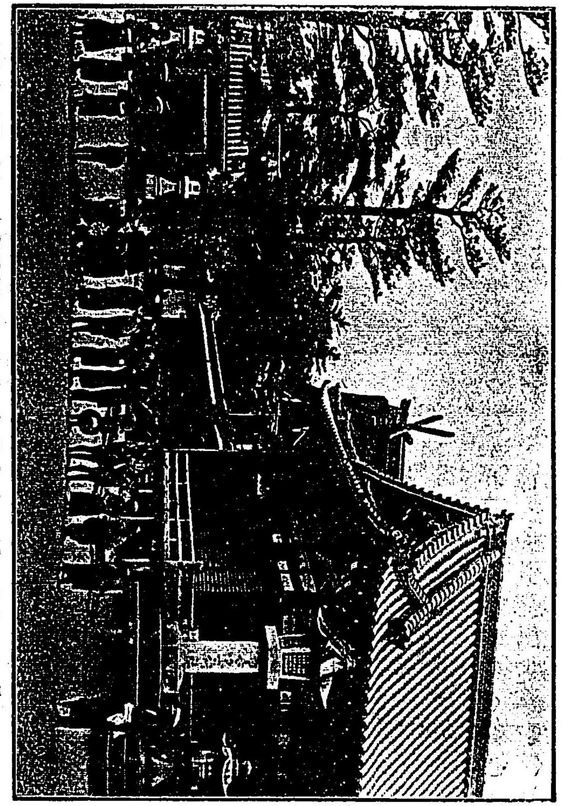
まりの所に

履中天皇陵

があります、周圍の堤八百三十三間、山の根廻り六百三十六間、南の峯の高さ十四間、北の峯の高さ十六間、上に碧松數株ありて周圍は芳草離々、俗に之を摺鉢山と云ひます、是より十町あまり東南に行けば

万代八幡宮

があります、古は此邊を土師の庄と云ひましたが、今は百舌鳥又は万代と云ひます、昔仁德帝酒の君をして始めて應を飼しめた土地だといふことです、祭神は、應神天皇、住吉、春日、神功皇后の四座を併祭つてあります、欽明天皇の創建、當村の生産神として世に名高い神社です、本殿、繪馬堂、御供所等、齊然として、社司の家もあります、又境内に、元神宮寺の塔中で有た光明院が殘つてゐますが、境域も廣く、松杉蓊鬱として晝尙暗く、南方に池を穿つて蓮を栽ゑ、中洲に辨財天を祭つてあります、當社の祭禮は舊曆の八月十五夜を以て行ふ例で、時恰も觀月の



堺ノ宮　萬代八幡宮
丁五四十二リヨ堺市停車場

Moju Hachiman (Shinto shrine) Sakai. About two miles from Sakai Station.

に觀月の宴を開きます、立錐の地もなき繁昌、神殿の形

候ですから、夫を愛で參詣の貴賤老若群集し、松間

容は寫眞に示した通り、是より西南松林綠野の間を二十町行くと家原村へ出ますが、其邊は湊驛より御案内いたすことにして、是よりふたゝび本市に這入りませう、本市の南の端に橋があります、是を

少林寺橋

と云ひます、大道筋に架つてゐます、橋の北詰一町東に回れば

乳守

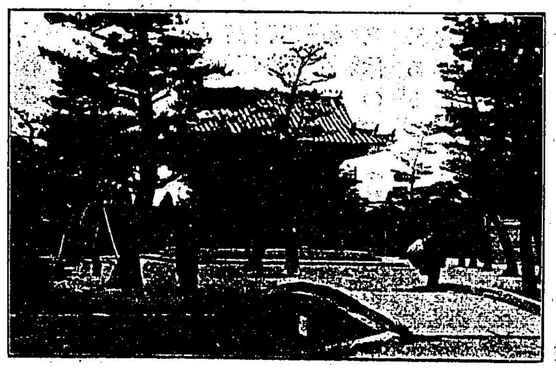
の遊廓です、此廓は其名高く世に聞ゆ、さすが昔の全盛の餘波をのこし、今尙絃歌の聲を絶ず、紅屋青樓軒を併べ、頗る繁昌の地です、此廓の東隣は

臨江庵

と云ふて、元は南宗寺の塔中であつたもの、庵の空地多く萩を栽え、秋の始めは、錦を布くの觀を呈しますゆゑ、之を觀んとて杖を曳く雅客も澤山あります、又境内に乳守明神と云ふを祭り、乳を思ふる婦人が參詣すると利益があるといふことです、其東に一大寺院がある、是ぞ此

堺南宗寺ノ景
湊停車場ヨリ五丁

龍興山南宗寺



Nansoji (Buddist temple). Sakai. Close to Minato Station.

です、本市第一の巨刹、宗旨は禪、京師紫野大徳寺に屬す、弘治二年三好元長の建立、大林和尙の開基ですが、其後數度の兵燹に罹つて荒廢に屬したのを、元和の頃澤庵和尙再建したときの侯伯多く之に助力を與へたので、寺域六千五百餘坪、佛殿を大雄寶殿と申して、額は清殿筆、本尊は中央釋迦左右文殊普賢、左脇檀達磨、右脇檀梵天毘沙門摩利支店、照堂は曹溪の額を掛け、筆は澤庵、左檀は德川將軍代々の位牌を安ず、中央は普通國師、右檀は澤庵和尙、鐘樓は坐雲亭の額を掛け筆は天室、山門

は甘露門の額を掛け筆は玉室、方丈の額は東坡の筆、庭は古田織部の作、正面の石橋は唐土の湖信橋を模したものだといふ、石を排置して水の流に代てある、樹陰幽邃實に塵外の趣があります、何しろ三百年近くの星霜を經たのですから、石橋はそのまゝで大きくも小さくも成らねど、樹木は遠慮なく成長しましたゆゑ、最初の釣合を失つて、庭ではなく、樹木の生茂つた深山の中に、小さな石橋が掛つてゐるやうな觀があります、方丈の襖は狩野秀信筆の山水、なか〳〵巧妙に出來てゐる、浴室の額は澤庵筆、客殿の額の乍入も同筆、影堂には舊の堺の刺史花林居士喜多見忠勝の碑が置いてある、牧門の額龍興山は江雪の筆、又寺内に牡丹花肖柏の塔、一閑齋紹鷗の塔、（此塔に耳を當れば湯の沸る音聞ゆるといふ）、利休の塔、（是は門弟故舊が造立せる代々の假墓で、利休の髪の毛が埋めてあるといふ）、趙陶齋の塔、其他にも有名の人の墓が澤山あります、寺中も數院ある、又北の隅に利休の茶室があつて實相庵といふ壁は當時のまゝとて、殆んと煤色を呈してゐます此室が二疊臺目の起原だといふ事です、床の落しがけは弘法の筆の卒塔婆をそのまゝ用いたもので、今尚字体が明に存じてゐます、床柱は南天、爐は釜ずりと稱して一

種異樣の製、此室は鹽穴寺に在たのを、明治十一年堺に、則ち此寺で博覽會を開た時に、有志者が爰に移したので、庭の手水鉢も室と共に鹽穴寺より移したもので、袈裟形の手水鉢として利休の好み、石燈籠は向泉寺傳來六地藏形と稱する名物、妙國寺の蘇鉄の前にも、是と同じ燈籠が立てゐますが、此所のは名高く彼所のは聞えません、物も置所で幸不幸のあるものです、室の造り庭の樣、幽閑の趣き言語につくし難く、爰に至つて茶味と禪味の面白さを感じないものは、夫こそ俗中の俗です、此室の維持の爲め、當市の紳士が瓶笙社といふ社を組み、月に一會づゝ此室で茶の湯を催してゐます、坐雲亭は元和の九年七月十日德川二代將軍秀忠公當山に來つて此亭に登り、西南は紀泉阿淡、北は須磨明石の風光を弄ばれ、その眺望の絶佳なるをめでゝ、逍遙時を移されたといふ事ですが、今は樹陰に遮斷られて、四方ともに眺望はありませんが、雅趣の雅致ある、周圍に松櫻楓など程好く排置され、境内第一の好所、惜哉やゝ頽破に屬しかけてゐますが、利休の茶室と共に此寺の二大名物として、永く世に保存したいものです、又その南隅に東照宮の祠があつて、其床下に無名の墓があるが、是ゞ大阪陣に家康敗を取り（平野の燒討の時とい

ふ）堺へ逃來る途中、敵の爲に害され、首級を爰に埋たのだ、堺の町には將軍小路などいふ家康の逃て來た古迹があつて、其事を證據立る、又秀忠公の當寺に來られたも、只澤庵和尚に歸依ばかりでなく、全く此墓に參詣の爲だ、德川家より此寺へは代々格別の仕向けのあつたのも、やはり、夫が爲だといふ說を、兼てより聞てゐたゆゑ、此案內をするを幸ひ、親しく當寺に詣でて尋ねたれども、寺にはさる事したゝめた記錄は無し、然しながら其の說は昔より言ひ傳たへられてゐると、役僧の曖昧な返答、大阪の役は一孤城と天下の戰、否、浪人と將軍の爭ひ、素より大人が小見を弄ぶやうなものだのに、老功の家康公が、さる敗を取る筈はなく、又正史に據ろもなく、殊に大阪落城の後、家康公の現存せられたことは、歷々と史傳に揭げられれば、所謂判官贔負の齊東野人の語でございませう、此無名の墓の噂は昔より世に高く聞えてゐますから、案內の序に一寸一言申しておきます、前に揭げてある當寺の寫眞は、甘露門の前から寫したのです、又當寺に參詣人の群集するのは、舊曆四月十七日の權現祭と、佛誕生と佛涅槃と達磨忌等です、此地內の東の方に

海會寺

がありますが、禪宗東福寺派で、元は開口社の前にあつたのですが、元和の兵火の後此山內に移されたのです、南宗寺の惣門の前より一町東に

大安寺

があります、禪宗で京都東福寺に屬す、開基は環中和尙、開山は德宗和尙、佛殿には聖觀音の像を安置してありますが、寺傳に依れば聖德太子の作、火防の觀音として名高い靈物、當寺は應永年間當市に納屋助左衞門（後天正年中呂宋國へ貿易に渡つて、眞筐その他多くの珍寶を携へ來つて非常の利を占めたので、又の名を呂宋助左衞門とも云ひます）といふ豪富の人が有て、己が住居の書院の結構善美をつくしてゐましたが、一日松永久秀が來て是を見て、盈れば缺くるといふに、此る善美を盡せる家に住では、却て災を生ずる基ゆゑ、今予が盈るを缺いて、禍を未然に防いでやると、佩たる太刀を拔て柱を切て疵を殘しました、助左衞門後に禪法に歸依して書院をそのまゝ當寺に寄附し、佛殿となしたので、今尙

その刀痕を社にとゞめてあります、上壇の間の壁は西湖の圖で、古法眼元信の筆、佛間及び次の間は狩野永德の筆、松、藤、猿、鶴など描いてありますが、中にも松は永德東國へ赴く前に描いたのですが、發足の後尾張の鳴海にて面白い枝振の松を見て、已が曩に畫いた松ゝ枝の足らざる事を思ひ出し、其所より引返して書添へたといふ傳へがあつて、夫故之を枝添の松と稱して格別名高いです、方丈の庭に利休が時雨の名を呼だ井戸があり、又利休の好の手水鉢があります、當寺の什物の中で殊に優れたものは印度作の木像の達摩、同出山の釋迦、是は銅像、助左衛門の遺物の呂宋の茶壺、蛸の香爐等です、寺は小なれど、南宗寺について雅致のあるのは當山です、是より一町西、新在家に

鹽穴寺

があります、眞言宗で本尊は十一面觀世音、長五尺許り、當寺は和銅年中元明帝の詔に依て草創したもの、昔は封境廣大で七堂伽藍の名刹であつたのですが、今は見る影もなくなりました、併し當市屈指の古刹ゆゑ一寸御案内いたしおきます、是より北一町、檜屋町に

少林寺

があります、桃源和尚の開基で、禪宗大德寺末、昔は本市屈指の大刹、兆域も頗る廣く、今の寺地町の少林寺町は皆境内であつたさうですが、漸次に荒廢に及んで、今は只その迹のみを留めてゐますが、可惜名刹の衰滅を哀み、有志者に再建の企てがあるとのこと、當寺稻荷の祠があります、是は通心靈祠とまうして、當寺の塔中に住でゐた、白藏主の信仰したもので白狐を祭つたといふ言ひ傳へ、彼の狂言の釣狐は、此靈祠の由緒に依るとのことで、その狂言をする時は、當祠の後手の鼓に生ずる竹を以て杖にするといふ事です、是より南一町寺地町に

旭蓮社

があります、淨土宗、中華盧山派の一本寺、甘露山大阿彌陀經寺といひます、本尊は上品阿彌陀佛、寺内に舶松神廟があります、是は當山の鎭守、神功皇后異國より歸朝の時軍船九艘の舶頭の向ふ所を九艘小路といひ、又九本の松に繫いだところから、九本松町とも呼ぶ、夫故九本松明

神とも稱します、其小路が此寺の北の門の前の町といふことです、是より、路を西へ取て、南島へ渡りますには、住吉橋、龍神橋、榮橋等の橋があります、夫を西に渡れば

南新地

是は尤も新しく築立たところですから、此名があるのです、此邊は大半青樓でして、龍神町又榮橋の二つに分れてをりますが、龍神町の方は大樓、榮橋の方は小店と二樣に分れてをります。

龍神町

は貸座敷七十一戸、娼妓五十九人、藝妓七十七人、去る六月中の來客の數六千百〇九人、消費額は五千八百九拾九圓參拾參錢五厘今は乳守は名のみ高くして、其實の繁昌は、此龍神町が本市第一の遊廓です。

榮橋

は、貸坐敷四十戸、娼妓二百四十人、藝妓無し、來客の數（六月中）五

千二百二十人、消費高は四千百貳拾壹圓、この遊廓を出て西へ行くと

堺港

に出ます、灣内には和船洋艦絶ず碇をおろして、檣梢林立、欸乃の聲日夜波に徹するといふ景況、此に京阪紳士の倶樂部

旭館

が建ていますが家屋の建築、庭園の結構、なか〳〵壯麗なものです、其前を過て大濱に至るの間

貝細工

を賣る家所を併べています、簪、或は藥玉やうのもの、又は花卉の盆栽やうのものなど、染貝を以て種々の形をつくり、遊客の土産に供へています

大濱公園

堺　ノ　濱　大　堺
丁三ニリヨ坂亜後堺

Ōhama, Sakai. Close to Sakai Station.

は前へは茅渡の海に臨み、後は陸軍所属の練兵場を控へ、波防の石堤遠く海面に突出し、此に不動綠色の

燈臺を設け、燈火遙に海上を照して、暗夜船舶往來の便に供へ、昔は此邊總て漁村でありましたが、眺望の面白きに愛でゝ自然遊客の杖を曳くもの多く、隨て茶肆酒樓も出來、僅々數年の間に閑地は熱界と轉り、今は近幾無二の遊園、否、大阪府の公園の一に數へられるやうな場所になりました、酒樓も漸次に數を添へ、和風洋製、三層四層、互ひに美を競ひ麗を爭ひ、日に月に壯大に成りましたが、其中の最なるものを云へば、茅海樓、川芳樓、一力樓、㊂樓、八角萬、㊁樓などです、此寫眞は則ち川芳樓の前景を寫したものです、是等の諸樓に登り、欄に凭て目を縱にしまするとと、西南には紀淡の山色を見、東北には和泉の峰光を望み、海波藍の如く平沙雪を欺き、其風景畫よりも妙、殊に月に宜しく、朝に宜しく、夕に宜しく、雪に宜しく、食ふに魚の鮮しいのがある、入るに沙湯の滑らかなのがある、避暑に佳に、出養生に可し、夫が爲め遊客群集して、四時手を鳴す音、絃を彈く聲の絶間なし、實に一場の仙鄉樂土、尙此邊で見るべきものは

魚市

毎朝未明より漁船此濱に集り市を開く、數百の商人四方より集り、先を爭ふて魚を買ふ、其聲喧囂、其樣勇ましく花々しく、又是一奇觀、殊に例年七月三十一日、住吉祭夜宮の夜を以て最とします、賣る者、買ふ者、見る者、さすがの、大濱も立錐の地なきまでの繁昌です、又

北大濱

此にも公園があります、港灣を巡つて築出した地先で、區域尤も廣く、舊砲臺の中にあるのです、此處も風景好く、茶肆酒店などありまして、南公園に劣らぬ盛況、殊に陰曆の上巳の日は大汐と唱へて、潮水が遠く退いて、數里の間干潟になりますので、來つて汐干狩する者多く、年中第一の一大熱鬧を極めます、是等の遊覽を終つて吾妻橋に出れば、すぐに南海鐵道の停車場です、此邊に鋼鐵製練所、煉瓦製造所などがあります御案内をして見ますと、大層路程も有て、時間も澤山にかゝるやう思はれますが滋車から下りてすぐに構内の人車に乘て走らせますと半日に見物が出來ます、大阪の人なら大濱で晝食を遣ひ風呂へ這入て、ゆる〳〵休息して明るい中に宅へ歸られます、案内の序に、堺の港を築いた

吉川俵右衛門

の傳を簡短にお話いたしませう、此人の事はあまり世に知られませんが、惜いことに思ひます、俵右衛門は、享保十五年一月を以て江戸に生れましたが、一年紀州の高野山に參詣して、其歸途に此の堺の地を過ぎ、此程の繁華の地に、川を鑿ち港を築き、船舶往來の便を開たら、土地の利益にも成るだらうと考へて、今度は所有の資金貳萬圓ばかりを拵へて再び當地に來り、今の大小路の邊に住居して、其事を計畫し、地圖を畫き仕方を考へ、日夜一室に閉居し、やゝ設計の成就せしを以て、其筋の許可を得んものと、奉行に當て出願しましたが、元より廣大の目論見ですから、其成らざるを危み、又は山師の仕事かと疑つて、奉行はその願書を下げました、俵右衛門之にも懲りずして、再三願を出しましたところ、其頃の役人の壓制から、不法にも强訴の件を以て俵右衛門を獄に繫ぎました、俵右衛門之にも屈せず、縲紲の中にありながらも、日夜築港の設計のみ考へ、出獄の上は是非とも望を遂げやうと、まず〳〵丹精を拔んでゝゐましたが、憐む可し、罪なくて鐵窓の下に呻吟すること十五年、

漸く放免の身となりましたが、その後又築港に熱心して、辛苦經營する事拾餘年、始めて官の許可を得て、先づ第一に新川を開き、橋を架るに至りましたが、其身江戸より來りしを以て、吾妻橋と呼びました、大小路停車場前の橋）次に架けた橋の名は、益々土地の繁榮を祝して榮橋と號け、次に架けた橋は、多年の辛苦其甲斐あつて、事やゝ成就せんとする一時は堺港の名を日本中に轟かし、諸國の船舶を引寄せ、大いに當市の繁榮利潤を増しました、今日大濱公園として、大阪幷びに諸府縣の人を吸集して、堺市の賑ひを添ゆるのは、全く俵右衛門の功勞です、俵右衛門文化七年の二月二十日、行年八十一歳を以て世を去りました、先に當市の日下氏他數名の有志者が、俵右衛門の紀念碑を大濱公園に設立する計畫をされましたが、何故か中絶して今尚成功に至らぬのは、遺憾此上もない事です、俵右衛門の子孫は大小路停車場前の茶店の主、山本藤吉氏です、氏は四代目だといふことです、其店の庭の井戸の横に一碑の存するがありますが、是は俵右衛門の沒後、親族知音の人々が建た墓表兼紀念碑と思はれます、せめて之を今少し人の目につくやうな所に移して、

俵右衛門其人を世に知らせては如何、碑銘は誠に簡短でございますが、俵右衛門の人物と事業の幾分は現れてゐます、其碑の

南面には　文化七年午二月二十日
　　新川開發人吉川俵右衛門墓

西面は　うらやまし八十に餘る年をつみ
　　なき跡もまたあふがるゝ身は

北面は　天地四方恣獨歩　奇計百功舌三寸。

文者班馬俱低昂。　辯者蘇張於上下。

泉須院奏譽信現居士

此碑が庭の井戸端にあるゆゑ、井筒屋とも云ひ、又の名を石碑茶屋とも云ひます、右の碑の銘に依りますと、俵右衛門は、百折不撓の精神のあるばかりか、文學も出來、辯舌も巧妙だつたと、思はれます、併し夫ゆゑに幕府の俗吏に山師と誤認られて、獄に投ぜられたものでございます、今日大阪は築港の起工式を擧るといふ時に際して、かゝる偉人の傳をお話しするのですから、案内者の胸は一種の感に打れて、涙の襟を濕すを知りませんでした。

本市の産物

の概略は清酒、緞通、薫香、利器、眞田織、木綿、貝細工、紡績糸、玉簾、水晶玉、櫻鯛、芥子餅、醬油、煉化石、中でも清酒と緞通を二大産物と唱へ清酒は内國、緞通は海外、共に名譽を鳴らしてゐます、本市名産販賣製造家の

三幅對

といふは

○木綿商、河盛利兵衛、泉谷九平、泉谷德平、
○酒造家、宅德平、鳥井駒吉、肥塚與八郎
○醬油商、河盛又平、豊田熊次郎、戸川源次郎
○緞通商、藤本庄太郎、三谷岩藏、大野熊次郎
○庖丁商、淺香久平、酒井義包、文珠四郎

夫から

旅館

は中の町の銀兎樓、櫛屋町の扇屋、熊野町の澤田、同町の山喜、大濱の諸樓は公園の所に申しましたから省きます、次に

銀行と會社

の重なるものは第三十二國立銀行支店は熊野町に、合資會社大西銀行は甲斐町西四町に、鹿喰銀行は南旅籠町西三町、株式會社堺銀行は甲斐町に、同堺共立銀行は宿屋町に、指吸銀行は寺町西四町に、株式會社堺貯蓄銀行は甲斐町に、堺酒造株式會社は神明町西一町に、清酒株式會社は櫛屋町西一町に、鳥井合名會社は甲斐町西一町に、堺煉化株式會社は戎島附洲新田に、泉洲紡績株式會社は戎島一町に、別途合資會社は宿屋町西一町に、電燈株式會社は龍神橋通二町に、株式會社堺米穀取引所は大町西四町に、堺煙草株式會社は市の町東四町に、日本緞通株式會社は材木町大道に、宅合名會社は九間町に、千歳清酒株式會社は櫛屋町に、立花合名會社は車之町にあります、其他は略します、又

官衙

は市役所は殿馬場に、警察署は市之町に、電信局は宿院に、郵便局は熊野町に、商業會議所は市之町西四町にあります。

各名所へ人力車賃

は宿院へ三錢○開口神社へ同上○菅原神社へ同上○神明社へ同上○妙國寺へ同上○祥雲寺へ同上○大和橋へ五錢○高須へ四錢○大濱へ參錢○南宗寺へ四錢○濱寺へ八錢○大濱へ九錢○方違社へ五錢○大仙陵へ六錢○萬代八幡へ八錢○住吉へ八錢等です、是で堺の案内は了りとして、湊の停車場へまゐりませう。

湊停車場

は堺市の南の外端湊村にあります、此間壹哩、此驛から御案内する所は、大低堺驛から御案内申しましたゆゑ、當驛から茌原の文珠、一路の舊迹、似雲歿去地等其他一二を御案内いたしませう、その前に當所の人口戸數

と名物の大概を一寸

人口戸數

人口は三千〇六十七人、戸數は六百三十五戸。

名産

は湊紙、燒鹽、湊燒陶器（昔は盛んに燒出したものですが、今は僅にその形のみ）等です、先づ一路居士の舊迹から

一路山禪海寺

は港驛を東南に距る七八町、石津上方市村にあります、京都大德寺末派です、開基は一路居士、此人原洛西仁和寺一代の御門主であつたが、世を遁れてこゝに幽栖あり、詩歌を吟じ清貧を樂んで、生涯を送られたといふことです、今その吟咏の一二を

月や見ん月には見じながらへてうき世をめぐる影もはづかし

世を忍ぶいほりの軒のくちぬればいきても苔の下にこそすめ

その高逸の風致儘の文字の上にも能く現れています、一休和尚と同時の人でありましたが、一日一休一路に問はるゝは

萬法有道如何是一路、居士言下に答へけるは

萬事可休如何是一休

居士常に半舛鐺内に菜蔬を煑て范冉が釜魚を樂んでゐました、其狂歌にこの鍋は細川家の重器と成て今にあるといふ傳へ、居士又或時詩を賦して

節後菊花吹不飛、　羅根臥雨似蓋微
万年峰頂新長老、　笑下禪牀對布衣

畚懸松は當寺の境内にある、居士爰に閑居してより人の往來を絶し、一つの畚を此松枝より釣下し、志ある人に食物を受て命を繋いでゐましたが、一日里の童共悪戯に馬糞牛の靴など入置ければ、居士之を見て、最早我糧盡たりとて是より斷食して終りしとの傳へです、是より十五六町東南に當つて、名高い

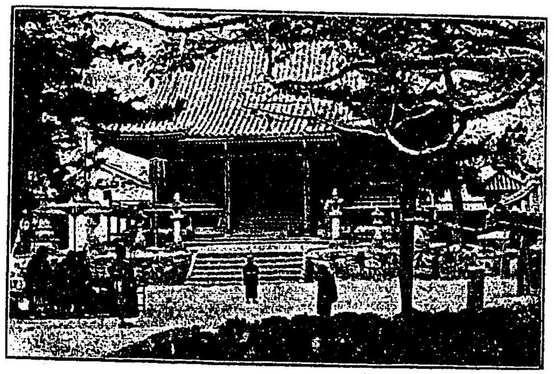
家原寺

があります、村を家原村と申して、山號は一乘山、境域は千八百餘坪、開基は行基菩薩、本堂（本尊文殊菩薩、左迦釋、右普賢共に行基の作、本尊の白毫の中に一寸八分の黄金佛が安置してある、是は天竺の波羅門僧正天平十八年南都東大寺建立の時來朝將來の靈佛）、多寶塔（中には大日如來を安置して、香燈本院と稱す）、不動堂（本堂の右）、祖師堂（本堂の北、其中に、中央に、行基、左右に弘法興聖を安置してある）、藥師堂（本堂の巽）清涼院（本堂の後）、其他行基戒壇の迹、鎮守の社、誕生木（行基出生の時胞衣を此木に掛けたとの傳へ）、龍穴、經塚、閼伽井、放生池、櫻門跡、辨財天社、聖天尊社、善光寺塚、二王門、三反田（門前にある、行基の田畔の叭割を敎へしところとの傳へ）、などの建物と名所がある、

當山は行基菩薩誕生の地、父は高志氏、名は貞知、百濟王の裔王仁の後、母は峰田首虎身の女、藥師姫、天智帝七年の出生、幼名法貴丸、聖武帝天平二年に改めて精舍となされたのです、行基自ら其境内の趣を記して曰く、山海兩邊の中間に、一乘菩提峰といふあり、慈尊成道の勝地にし

て靈山會場に異ならず、西北は港海浪上洋々として、遙に心を億國に念じ、北面に臥して首を左に廻らして南顧す、北を穿つて口とし橋は則ち舌なり、額は丘、尾は崎、耳は道、眼は窟、唯は砌、髭は蘿、其狀宛然たり、三國の土を聚めて壇を築き、一宇を建て釋迦、文殊、普賢を安ず、傍に禪室を造り、前に高門を建て、二金剛を置く、左に鐘樓、右に皷樓、三層の塔中には四智佛を畫いて安じ、西に藥師堂を作り、東に鎮守の神を祀る、艮に食堂、坤に平居の禪室、山上には龍穴あり、又赤龍淵といふ所には、漢高の靈を祠る（是は行基の系脉百濟王の遠祖なれば）云々、能く其實

家原文珠堂ノ景
濱寺停車場ヨリ十八丁



Monjudo, Yebara (Buddhist temple). A little more than One mile from Hamadera Station,

境をつくしてあります此寺を家原といふのは、全く行基の誕生地を代表したのです、當山の寶物の中で殊に優等であるのは、巨勢金岡筆の行基の行狀三幅、小野道風奉勅の筆の山門の額、行基自筆の肖像等です、寫眞は山門の內より正面に本堂を取たので、文殊は智惠を司る佛なればと、吾子吾孫に智惠を授けて、貰はん願ひ、子を連れ孫を携へて、參詣する老若男女、年中斷る間もなき繁昌、寺內に茶菓を賣る店があります、又此村に

家原の城趾

があります、足利の中頃寺町左近、雀部次兵衛、城を此家原に築いて威を震ふ、永錄十二年正月元日、三好山城守笑岩齋の爲に攻落され、遂に瓶頽に屬したのです、是より一里半ばかり西へ戻ると

似雲の示寂地

があります、村の名を鰐尾村と申して、其家は北村氏です、似雲法師は其名の雲の如く生涯所定めず、行吟した人ですが、今畸人傳に載する所

に就て、尤も法師の特質の見える所を拔いて御案内いたしませう、似雲、名は如雲、安藝國廣島の人、歌を好み都に上つて儀同三司實陰公に學び、又名山靈地こゝかしこに遊んで住所を定めないので、世人が己を今西行と呼ぶと云ふを聞て

西行に奚ばかりは似たれども心は雪と墨染の袖

と戲れましたが、西行上人の墓所の定かならぬを嘆きました、石山の救世菩薩に祈り、其靈告に依て、河内國弘川寺の境内にてもとめ得、其所にて唯行塚と云ひならはしてあつたのを、改て石の印を建、果はその寺に有た肖像をも搜し出して、堂を建立し、自も山中に庵を結んで住んでをり、其名を春雨亭と喚びました、其時の歌に

並ならぬ昔の人の跡とめて弘川寺に墨染の袖

其庵のひらさ疊一ひら二ひらに過ないゆゑ、人々今少し廣くせよと云ふに

我庵は形も定めず行雲の立居さわらぬ空とこそ思へ

と歌を詠んで答へました、此山にある程と又何所にまれ一人住る時は、搔餅といふもの二ひらを舌にのせて一日の糧に充、飯を炊ぐ煩ひを除い

たといふことです、須磨の浦にありける時、久しく絶たる鹽竈を興し、あらゝし山の麓、大井の川邊には弘川と全く同じ樣の庵を作る

住かへん秋は紅葉の嵯峨の山春はよしのゝ花の下庵

苔清水の奥にしばし住んだ跡があります、其他高野の奥、龍門の滝の邊など、浮世離れし所々に住んだ趣は、其自記思ひ草、年並草などに見にます、八十にあまつて、此和泉の貝尾の豪富北村氏に身を寄せ、其處で往生の素懷を遂げ、遺言して骸を弘川に送つて、西行と同樣の墳を築かせたといふ事です、著す所は右の二記の外に、似雲聞書と題して、儀同公の御說をたゝ事に書附たものがあります、中には雜話も交つて居ます、又葛城百首といふものもあります、尙この邊に

蛭子神社と乳岡

の二名所がありますが、似雲の沒去地に程近い、上石津下石津の兩村にあります、蛭子神社、又の名は上下石津社、祭神は蛭子命を祭つたので す、式内の神社で、社殿も粗備つてをります、當社は孝照天皇の御宇に勸請になつたので、日本で一番古い蛭子命の社です、祭日は下石津の方

は一月十日、上石津の方は九月十日、又同村の北の端の東の方に小さな丘があつて、松樹二三本を栽て小庵を結んだところがあります、之を乳の岡と云ひます、其處は石津連の祖野見宿禰の墓、又乳朝臣の墓といふ二つの傳へがありますが、定かでありません、是より元の湊村に歸り、夫より濱車は石津今在家（壹里三拾町、此石津は舊名石津の鄕、今は上下石津兩村と成ています、土佐日記に「石津といふところの松原おもしろくて濱べおかし」とあります、列車の窓よりの眺望今尙その面影が殘つてゐます、又更科日記にはこゝの海で難風に遭た怖ろしい樣を細に寫してありますが、此く濱車の開通する上は、さる患ひはありません、古今文野の差今更のやうに思はれますから、因に一寸）を經て濱寺驛に達します、此に

濱寺停車場

があります、湊より二哩餘、此邊一帶に青松白砂風光明媚、名高い高石濱の舊跡で、今尙高石の名があります、高石、濱寺の二村に分れて、高石は人口三千五百四拾三人、戸數五百九拾四戸、濱寺は三千八百〇九人

戸數七百戸、高石には明治煉瓦株式會社、濱寺には摂津煉瓦株式會社、濱寺合資會社（雜穀其他農産物及肥料賣買貸附）等があります、此驛より第一に御案内いたさねば成らぬは

濱寺公園

です、此公園は區域頗る廣大、南北二十町、東西十町、此公園の所在地を濱寺と稱するは、濱寺の舊迹故です、濱寺は元亨年中三光國師の開創で、寺號を大雄寺と稱し、封境頗る廣大、七堂伽藍巍々として聳にてゐましたが、世の變遷の爲に廢滅に歸し、今は僅に其名のみ殘つてゐます、此の邊一面の眞砂地で、古松多く、西に淡路島、北に須磨赤石一の谷鉄枴峰、南に紀の海、阿波の鳴戸など見にて、風景實に佳絶なれど、其地の大阪を距ることやゝ遠きに過るを以て、其割に來遊の人が少なかつたですが、今度南海鐵道の停車場を濱寺に置く事に成つたから此公園の地所借用を願出るもの多く、既に貸下に成た坪數は一万八千坪以上、漸次旅館、酒樓、茶店を新築して、所々に樓臺や亭榭を設け、又鐵道の便を假りて、北は大阪、堺、南は貝塚、岸和田より、遊客日夜に群集して、

濱寺公園ノ景
濱寺停車場ヨリ一丁

Hamadera park (thepine groves on the sea-shore). Close to Hamadera Station.

僅少の日子に、今は大濱公園と繁華を爭ふやうになりました、其多くの旅館、酒樓、茶店の中で、公園中の尤も勝地を占め、且聲譽を博し、旅館と酒樓を兼てゐるのは、海濱院です、同院は前大阪府知事建野鄕三氏が、府民海水浴の便を謀つて之を設立し、其後堺市の人仁井田祐次郎氏に之が保管を委ねたのですが、祐次郎氏その委托を重んじ、十年一日の如く能く其任をつくし、家屋を建增し、庭園に手を入れ、來賓、接待、料理の盛梅、潮湯の加減等に意を用ひたので、目今は非常の盛大を極めてをります、其他に一力樓、川芳樓、○三樓、鶴の家、壽命館、朝日館など、孰

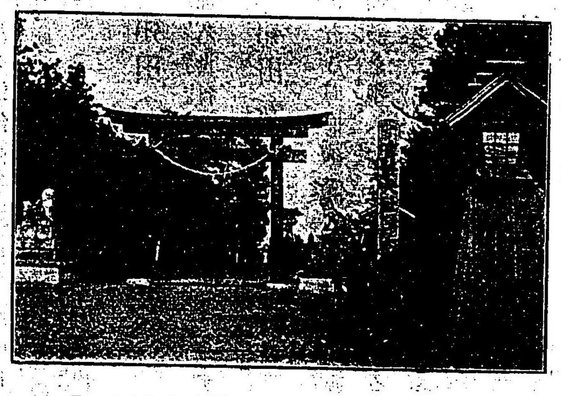
も建築に壯大を競ひ、料理に新鮮を爭ひ、是又頗る繁昌をいたしてをります、抑も此公園の風景は、寫眞にも採影してをきましたが、其區域があまり廣大に、其四邊があまり美麗で、百分の一をも盡す事が出來ません、案内者の口頭から、其概略を摘要んで申せば、宛然白銀を敷いたやうな白砂の上に、數千株の老松が、千狀萬態、舞ふが如く、躍るが如く、龍の蟠るが如く、虎の踞るが如く、所々に奇姿妙趣を恣にしてをりまして、松で名高い播州の舞子の濱に優るとも劣らぬ風景、堺の大濱は明に一着を輸してをります、以前は此邊今より尙多くの古松を以て滿されてをつたのを、明治の初め、或人開拓の企を起して、無慚にも夫を伐採りまもたが、偶々時の内務卿大久保利通公巡廻のついで、此地を過られ、可惜名所の荒廢に屬するを嘆かれて名にしおふ高石の濱の松枝も世の仇波は免れざりけり と一首の和歌を咏ぜられたのを、開拓發起者が聞て、實にもと思ひ、遂に其事を中止したので、今日公園として此景を存する事を得たのだといふ事です、海濱院の主仁井田氏其他の有志家、大久保公の德を賞して、此公園に紀念碑設立の計畫をしてゐます、序に申しておきますが、海濱

院の主の發意で、今中絶してゐる堺の名物、一休の烏扇と栗煎餅を再興して、此公園來遊の諸君へ、安價で賣捌といふことですが、至極好いことのやうに思ひます、是より東北へ七八町行くと、泉北郡鳳村で

大鳥神社

があります、官幣大社延喜式内和泉の一の宮、乃ち泉州五社の第一です祭神は日本武尊、尊東征の歸途伊勢の能褒野で崩じたまひ、八尋の白鳥に化して飛去りたまふとは、日本紀に見にたるところですが、此地は乃ち其白鳥の止まるところ、又大鳥神社の名の因て起るところ、境内の坪數一萬貳千九百貳坪、其内建物の敷地二百九拾坪以上、本殿、祝詞殿、幣殿、拜殿、神饌所總て備はり、結構壯麗であるその上に、社地は老杉右松を以て埋められてゐます故、大社の体裁儼かに借はり、自ら神威の尊さを感じます、社地に六百餘坪の梅園がありまして、早春の頃には蕾を開き芳を吐き、只さへ清らかな神の御園に、又一段の風致を添へ、此色香を慕ふて杖を曳く人も多いといふ事です、境内の摂社は大鳥美波比神社、祭神は天照大御神、延喜式内、例祭は四月三日、夫から境外の摂

大鳥神社ノ最寄停車場ヨリ一十町



Ōtori Jinja (Shinto shrine). One mile from Hamadera Station.

社は大鳥北濱神社（泉北郡濱寺村大字下字角垣内鎮座、祭神は吉備穴戸武姫命、延喜式内、例祭は陰暦八月廿五日）、大鳥濱神社（同郡高石村大字今在家字井戸森鎮座、祭神は兩道入姫命、延喜式内、例祭同上）、大鳥井瀬神社（同郡八田莊村大字堀上字大明神山鎮座、祭神は弟橘姫命、延喜式内、例祭は八月十三日）、本社の祭日、官祭は例祭八月十三日、祈年祭二月、新嘗祭十一月、一日祭毎月、元始祭一月三日、紀元節二月十一日、除夜祭十二月卅一日、大祓式六月三十日十二月三十一日、遙拜式は後月輪東山陵傍山東北山陵四月三日で、私祭

は花摘祭四月十三日、堺渡御祭七月卅一日、冬季祭十一月廿八日、二十九日、月次祭毎月十三日、酉の日祭毎月酉の日、當社の名所は行基の井（清泉甘味）、千種の森（當社の森の總名）、影向石（本社の北にあります）、尙此邊で二三の名所舊迹を御案内いたしませう。

和田の城趾

が同郡久世村大字和田にあります、楠正成の外戚和田高遠の築く所。

和田新發意源秀の墓

同村にある、世に傳ふ貞和五年源秀正行と共に河内の苅屋に戰死し、家人其死骸を拵へ歸つて本土に葬ると、今は寺と成て毘沙門を安置してあるが、夫は源秀の守本尊だといふ傳へです、又同郡神谷村大字鉢ヶ峰寺といふ所に

鉢峰寺

といふ眞言古義の古刹があります、寺傳に依れば垂仁天皇八年日本武尊

鳳凰と化して當寺の艮に當る鵞峯に降臨ましく、帝其跡を祠りたまひて、日來野神鄕と號けらる、景行天皇二十四年神託に依て、武内宿彌に命じて祠を造る、同五十五年神鳳千種森に移る、今の大鳥の社が夫だとある、前に云ふ如く大鳥明神初めて降臨の地ゆゑ、こゝに社を建て鎭守と崇め、今二王門の前にある、金堂（本尊藥師佛、日光月光十二神を安じてある）、二層塔（五智如來を安じてある）、樓門は金剛力士の二天を安じてある、是も寺傳に、開基の法道上人は原天竺の人、播州法華山に住居し、一時此山に來つて法華經を誦し、密觀を修してゐられしに、法華山に殘し置れた、所持の齊具、千手大悲の像、佛舍利、寶鉢など、一時に空を飛で此山に來り、法道の室に入たので、即ち精舍を營んでこゝに安置したといふことです又常に鉢を虛空に飛して供養を受るので、人皆奇異の想ひをして夫故鉢峯の名があるのです、古は堂塔莊嚴、僧房の數四十九院もあつたそうですが、其中で閑谷院と釋迦院は法道仙人の居住の地、什寶には阿含經の添書（弘法大師の眞蹟）、佛舍利十粒、寶鉢一筒、座具一枚、惠亮の獨鈷、大師眞筆の法華經具塔寶品の初一紙、小松内府筆の經文、其他古證制狀が澤山あります、是と同郡で、今は西東陶器の

兩村に分れてゐますが、其所に

陶器荘

の舊迹があります、乃ち此荘は深阪、田園、辻ノ、大村、北、府久田、高藏、岩室の八村を合併した名で、昔は此地で陶器を多く作り出すので此名があるのです、貞觀元年夏四月二十一日、河内和泉兩國陶器を燒く薪を伐る山を爭つて訴へを起した事が、三代實錄に見ゐますが、今は此事絶て農家ばかり、折節土中より陶器を堀出す事があります、世に古い陶器を行基燒といひますが、此地で陶器を燒いたのは夫より以前の事です、或傳へでは神代からと云ひますが、只今中絶してゐるのは惜いもの、文明日新の今日、更に再興したいものです、林羅山先生が泉州の刺史小出某の爲に作た、陶器十景の長篇の詩がありますが、皆御覽に入ては大層ですから、今其題目だけを、金剛初雪、淡路殘月、萬松風聲、江上漁火、斜月片帆、炭竈孤煙、秋天來鴈、池塘春水、編戶壤歌、古寺晚鐘以上、此邊に尙御案内したい所もございますが、際限がありませんから、元の濱寺驛へ戻りまして、南の方を御案内いたしませう、此驛を西南へ三町

ばかり行くと

千貫橋

といふ名の橋が架つてゐます、俗傳に、此橋板が皆沈香であつたので、或人之を一千貫に買ふた事があるゆゑ、此名があるといふ事です、今は石橋になつて居ます、夫を渡つて又三町ばかり行くと

高石神社

海道の西側にあつて、社は小さうございますが、延喜式内の神社、高石姓の祖王仁を祭つたのですが、今は俗に天神と唱えてゐます、逍遙院殿の高野紀行に、「高師の松原のした天神の社の前に興を立て——袖の上に松吹く風やあだ波のたかしの濱の名をたもつらん」「實隆」とあるは乃この社で詠んだのです、而て見ると天神と誤つてからも數多の星霜を經てをります、是から葛葉、聖、上原、穴師、總社、珍努縣主の居地、和泉の宮御館等の名所舊迹を御案内いたしても宜しうございます、是等は大津驛から御案内する方が順序ですから、同驛からいたしませう、爰で序に申

しておきますが、案内者は南からおいでのお方の爲にも、北からおいでのお方の爲にも、孰からも便利といふ成丈中庸の地から御案内いたしますから、乘客諸君は行程の模樣、用務の都合で、少しは迂路をお取りに成るは御隨意ですから、案内者の言に依て、强て杓子定規を採らるゝ事なからんことを願ひおきます、是より元の濱寺驛へ戻り、濱車に乘て助松を經て大津驛に至ります。

大津停車場

は濱寺驛より三哩餘、此大津は、をづと申して、當時よりの紀州街道、土佐日記に、五日けふからくしていづみのなだより、小津のとまりに逢ふ、松原もはるゝなり、かれこれくるしければよめる

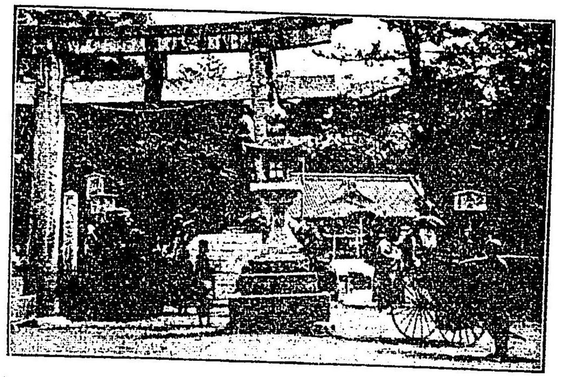
ゆけどなほ行やられぬはいもがうむをづのうらなるきしの松原　貫之

又更科日記に、大津の浦田樂法師三人あり、毎歲春日住吉の祭禮に出て伎藝を勤むとありますのを見れば、此驛は昔田樂法師の本場と見えますが、今は聞にません、又此邊を澳津の濱と云つたといふ說がありますが、分明でありません、戶數は七百六拾四戶、人口は三千六百八拾人、是より泉州五社の一つである。

泉穴師神社

へ御案内いたしませう、神社は泉北郡穴師村大字豐中に鎭座ましますのです祭神は、正哉吾勝速日天忍穗耳尊と栲幡千々姬命の二体、別殿配神は住吉神四座、天富貴命、佐古麻桃命であります（一說に穴師は風の名、風神を祭つたので、泉は國の名を冠らせたのだらふと申してありますが、今は社說に從つてをります）、當社は延喜式内の舊社で、目下は府社ですが、創立の年代は定かでありません、但往古より歷代天皇の御崇敬の篤かつたことは、仁明天皇承和九年十月奉授和泉國穴師大神從五位下（續日本後記、清和天皇貞觀六年春二月賜從五位上同年夏六月賜正五位下同九年春二月賜從四位下（三代實錄）等などとあるのでわかります、其後他社に位を授け王ふ毎に、當社に必ず一級づゝを進められ、遂に極位に昇られました、孝謙天皇天平勝鳳年中、村上天皇天曆年中、崇德天皇大治年中、孰も御祈禱の綸旨を下し賜はる、元正天皇養老四年放生會執行の勅諚下り、聖武天皇天平三年春勅を奉じて、國内の鎭疫を祈禱し、同天

穴師神社ノ景
大津停車場ヨリ十八丁



Anashi Jinja (Shinto shrine). A little more than one mile from Ōtsu Station.

平四年夏大旱、天皇勅して官幣を當社に奉じ雨を祈らる、同天平十四年六月京中大に飯を降す、又靈夢に依て橘諸兄公を勅使として、飯山五瓮を總社に渡し、和泉五社に供し、餘瓮を窮民に賜ふ、此時の叡慮により、正一位穴師大明神といふ宸翰の勅額を賜つたのです、昔は神宮寺、不動院、文球院、地藏院、寶知院、泉德院、愛染院の六坊及び藥師堂多寶塔五重塔等があります、孰も壯觀を極めてをりましたが、維新の際分離して夫等の建物は皆取崩されました、聖武天皇和泉國五社明神へ高六千八百石を賜はり、總社の祭主職劃配して、當社は千三百石を受領しました、其後

天正三年十月廿日、織田信長公社領從前の通りの朱印を下され、慶長七年豐臣秀頼公、片桐東市正を奉行として、當社を修理せられ、明治六年三月鄕社に列し、同二七年五月府社に昇り、二十二年十一月十一日内務省より保存資の内へ壹百圓下賜り、又廿四年五月三十一日神像鑑査狀を下附せらる、當社の建物は、住吉に似て又一種異つた所もあり、頗る古雅でございますから、本殿と拜殿だけ詳しく申しませう、本殿は、二社一殿流造、向出端一丈双破風、濱椽附、屋根檜皮葺、慶長七年十月豐臣秀頼造營、拜殿は船臂木流造、向屋根、二重唐破風屋根瓦葺、建設年代不詳、永德六年茅葺を檜皮葺に改め、慶長七年又瓦葺に改め二重唐破風を附けたのです、本殿拜殿とも左右の袖に馬松杜若など極彩色で畫いてある、本社と拜殿の前に、極めて接近して武基の鳥居が建てゐるのも珍らしく、正面に石の太皷橋が架つてゐる、又本殿の前に据てある一基の石燈籠は、古色蒼然頗る愛すべきもので、楠正成寄附といふ云傳へがあるそうですが、惜哉、文字も彫像も共に磨滅欠落して分ません、彫像は佛体のやうですが維新の際、神佛混交の過を恐れて、所の者が鐵槌でたゝき欠いだと云こと、實に物体ない事をしました、夫につけても當社の神寶の御神像の

差がなくあつたのは、鬼神の加護とでも申すのでせう、御神体は總て八拾三体あります、其内三体（木）壹千年以上、優等にして美術上の摸範となるべきものとの認定の鑑査狀が添てあります、十体は（木）、左紀、一千年代、美術上參考となるべきものと認定の鑑査狀が添てある、七拾体は（木）八百年代、同上、又什寶は勅額（聖武天皇御宸翰、其文は正一位穴師大明神）一面、綸紙三通（孝嫌、村上、崇德の三皇）、神鏡二面、國宣壹通、朱印（織田信長）壹通、永德元年辛酉屋根葺替棟札一枚、慶長七年壬寅月如意珠日、神殿造營棟札一枚、古瓦一枚、明治二十八年征清戰利品三點等です、本社の寫眞は、正面大鳥居の前から寫たのです、例祭は陰暦八月十五日ですが、當社は小兒の虫封の効驗著明だといふので、北は大阪堺南は岸和田貝塚邊より其護符を受け祈禱を請ふため、日夜參拜人の絶間はありません、昔は

藥師寺

又の名を穴師の神宮寺と申して、本尊は藥師如來、光仁天皇寶龜年中の草創、穴師神社の傍に在て、一州の大刹でありましたが、維新の際神佛

の差を明らかにされ、今は廢寺になりました、是より拾二三町南へ行きますと

國府の清水

大津停車場ヨリ三十丁

國府ノ清水ノ景

Shimidsu (Spring water), Kokubu. A little more than twomiles from Ōtsu Station.

があります、清水を御案内すると共に、同村に鎮座ます、式内、泉井上神社の來歴から申上ねばなりませんが、井上神社は、只今は社號が單一でございますが、實は總社と合同したので、兩社各別の由緒を有てゐますから、その事から、申上ねばなりません、今井上神社と稱しますのは、慶長以後の事で、其以前、五社惣社と申したのです、夫迄は別に式内泉井上神社

といふ社があつて、總社とは創建の年代より、由緒祭神まで皆違つてゐたのです、然るを慶長十年秀頼公五社總社の神殿造營の際、事故なくして、物社と相殿に祀つたので、兩社を一名に通稱し來り、明治十二年神寺明細調査の節も、關係の者共、誤謬の取調のまゝ上申しましたが、永世誤謬のまゝ祀り奉る事を恐多く思ひ、式内井上神社復舊の事と、五社總社復稱の事を、去る廿七年十月中に出願して、廿八年五月に許可を得、爾來孜々怠らず建築計畫に盡力してゐるのです、其處で

式内、泉井上神社

は元井の八幡、井戸の森八幡宮、又は水内の社と稱せし神社であつて、當國が尙河内國茅渟の縣であつた時の創立、其由緒を尋ぬるに、往古神功皇后三韓を征伐したまひし時、清泉一夜に涌出、其味ひ甘露の如くでありましたが、皇后凱旋して住吉の神を祭らんと御船を浪速に入れんとしたまふ時、忍熊王軍を起して住吉に屯するに依て、皇后珍奴浦より上陸したまふ、其時土地の有司涌泉の奇瑞を奏したので、皇后直ちに敵覽あそばされ、御感のあまり靈泉と稱へ、懇ろに神理を加へ、此水で修禊

したまひ、祠を靈泉の上に設け、天神地祇に告げて玉の井と名け、此邊りを和泉郡と號し、行宮を造られまして起る所、仲哀天皇、應神天皇、神功皇后の三神を始め、皇后征韓の役に從つて、勳功を建られた諸臣を、四十八の神として合せ祭り其後歴朝の勅願社であります、天正年中豊臣秀吉公、此靈泉を茶の湯に用ひ、賞感のあまり、其十四年高貳拾石の朱印を附られました、此社の事は和泉地誌、延喜式神名帳、和韓三才圖會等にも出てをります、又三代實錄にも、聖武天皇天平四年夏大に旱りしたので、天皇勅して和泉五社及び井の八幡宮に奉幣して雨を祈られた事が出てをります、明治廿四年七月三日宮内省より、當社四十八神の像に鑑査狀を下附されましたが、泉穴師神社の神像と共に、神像としては吾が邦稀有の古彫刻、殊に當社のは皇后征韓の功臣、國民の尤も尊崇すべきものです、偖て今度總社と分離して、舊地へ再建する神社は、（本殿）桁行弐間半、梁行二間、（拜殿）桁行五間、梁行二間、（廊下）桁行弐間、梁行二間、屋根檜皮葺、屋根瓦葺、千鳥唐破風、（社務所）是れは目下建築設計中、今明年の中に落成の筈、（境内）、四畝歩（永續基本財産）金弐百參拾圓、（寶物）

秀吉公の朱印一通、（鑑査狀）壹通其文は「神功皇后討韓勳功の諸神、坐像木、丈五寸より壹尺に至る、四拾八体、右美術之上參考となるべきものと認定す」とあります、（境外所有地）畑反別壹畝廿九歩、山林反別三畝六歩、竹藪反別貳反拾九歩、（社掌）は橘諸兄公の末孫田所政雄氏、數代連綿當社の社務を掌つて居られます、因に申す此樣に由緒ある清水と、井上、神社の荒廢と共に、村民の物洗ひ場といふやうな始末でございましたが、近來垣を作つて大切にしてあります、現在の樣は寫眞に採つてあれば、文に照して一覽あれ、次に

五社惣社

の事を申しあげませう、祭神は大烏神社、泉穴師神社に聖神社、積川神社、日根神社、合祀、掘社は天照皇太神、日本武尊、大國主命、事代主命、天兒屋根命、伊弉冊命、菅原大神、市邊磐阪王子、偖五社惣社は元正天皇靈龜元年四月、河内國茅渟縣を割いて和泉國を置れ、此地を府中と定め、國主の館を建られましたが、國主赴任の際、例に依て先づ五社に參拜奉告の後、府政を執たのですが、後には府政繁務に成つて、然す

る暇の無くなつたゆえ、五社を始め諸社の分靈を府中に迎へ、社殿を造立して五社惣社と齋き奉り、歴代天皇の御祟敬あり、就中聖武天皇五社惣社の祭主橘諸兄公の末孫、田所某を割元として、社領六千八百石を和泉五社へ下し賜はる、田畑五百十餘町歩を阿波國那賀郡に封ぜらる、其割高は左の如くです、

一	社領二千石	府中惣社
一同	千三百石	大烏神社
一同	千三百石	泉穴師神社
一同	千石	聖神社
一同	千石	積川神社
一同	六百石	日根神社
一同	五百石	

又正親町天皇天正三年十月廿日、織田信長より五社の社領從前の如しといふ朱印を下附され、後小松天皇明德三年正月廿日、兵部少輔某より國宣を執達せられたるなど、歴代の天皇の御尊崇厚く、且は社領の巨大なるより、勢ひ自ら村社泉井上神社の社格を吸收し、誰云ふと無く村社と稱するに至りましたが、神社も亦世の變遷は免れ難く、豐臣秀吉公の代

に社領を沒收されしより社運頓に衰頽して、終に社殿の修繕も成り難き程の不幸に陷りしが、其子秀頼公此衰頽を歎かれ、慶長十年壯麗なる社殿を造營され、井上神社をも合祀りしが、何分無縁無格の社殿維持の道なく、五社の名稱は低く信仰は薄くなり行き、夫に引替て、村社井上神社の名稱は高く信仰は篤く、遂に五社惣社の名は埋沒し、村民單に井上神社あるを知て、五社惣社の有るを知らざるが如き狀況に陷りましたが、今般二社分離して共に維持保存の道の立ましたは、社掌田所氏を始め村民敬神の心の篤きのいたす所、誠に歡ばしさの限りです、前に歷代天皇御尊崇の淺からざりし事を申しましたが、今その中の重なものを擧げますれば、元正天皇養老四年、夷賊邊を襲ひ、日向大隅大ひに亂る、朝廷宇佐八幡宮に冦賊平治の事を祈る、大神詫宣して曰く、是戰ひ死傷多し、我甚だ之を憐む、冦平ぐの後放生を諸國に置んとあつたので、八幡の放生會此より始り、當國でも毎歲八月十五日、泉州五社の神輿惣社に行幸し、朝廷より勅使下向なつて、數萬の小魚を清水の流に放て放生會を修します、又聖武天皇天平四年夏大に旱りしましたので、官幣を五社及び井八幡に奉つて雨を祈つたことがあります、又十四年の六月京中飯を雨

らしたことがありましたが、帝靈夢に因て、橘の諸兄公に勅して飯山五穀を惣社に渡して五社に供へ、其餘りを以て窮民を賑はした事もあります、毎歲飯山を渡すのは此緣に由るのです、和泉の五社府中に會合の神事は、天正の後、廢ましたが、當社は古例に倣つて、毎年八月十五日、神輿を當社の東南約貳町ばかりの所にある

式内和泉神社

の境内に渡御します、今俗に上泉の天神とまうします、此境内は、往古

珍努縣主居地

ならびに

御舘

乃ち代々の國司の館のあつたところ、國府又は府中と云ひて、和泉式部の夫橘道貞、源順、紀貫之、菅原定義等、和泉守に任ぜられて、皆此府中に居たのです、今は方四五間の松林、此所は又元正、聖武、二帝の

行在所○

和泉宮

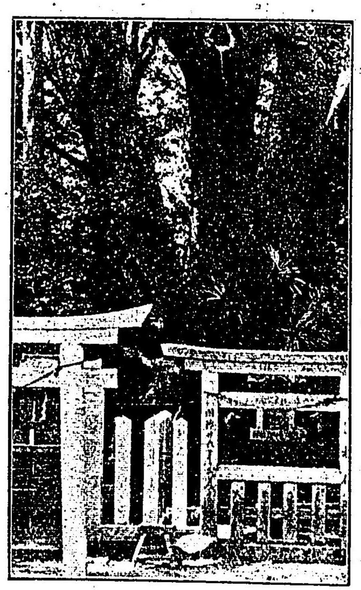
は珍努の離宮の舊地、後鳥羽天皇熊野御幸の砌り、此所に行在せられた故迹、今尚御舘の森の名が殘つて居ます、當社の神輿の御旅所としたのは、眞に所以あることです、偖建物は（本殿）坪數六坪、桁行三間、梁行二間、屋根瓦葺、（拜殿）同廿一坪、桁行七間、梁行三間、屋根千鳥唐破風附、（社務所）同拾七坪半、桁行七間、梁行二間半屋根瓦葺、（境内）五百六拾八坪、（寶物）古文書數通、累代祖掌田所家に保管、（國宝）一通、（織田信長朱印狀）一通、社掌は井上神社と同じく田所氏、是より北東へ拾町あまり行くと

葛葉神社

があります、土地は信太村の信太森、此森は往古より森田氏の所有ですが、世に名高い信太の森の名殘でせう、神社は同家の庭前に繁茂せる老

楠樹の下にあります、祭神は宇迦の御魂命と葛葉姫、泉州誌に森田氏の居地に老楠があるが、古より世に賞せらるゝ千枝の楠は是で有うと志るし、又千枝の楠を詠じた歌四十六首を載せてあります、又簠簋鈔に、安部晴明の母は信太森の狐とありますが、本社の傳へも同じことです、案内者は今こゝに其説の如何は述べません、伊東蘭嶋の葛葉神祠記、

信田ノ森葛ノ葉神社ノ景
大津停車場ヨリ三十丁



Kujunoha Jinja (Shinto shrine), Shinoda mori. A little more than two miles from Otsu Station.

能くその梗概をつくしてゐますから、左に筆記します、

葛葉神祠記

泉監信太森昔有樟樹、蓋經數千歲、而花山上皇勅賜名千枝、下有白狐、而棲焉、人口所鱠炙故不詳、又有神祠在其側、曰稻荷大明神、天照神皇時、奉命主敎民稼穡蠶織者、即山城州稻荷山所奉祠、今行祠遍于天下、此其一云、又古人歌什、賦此林、多有葛葉之語、或謂樟與葛訓相似、故誤也、是不然、蓋此林、以樟顯固久矣、而其地又別生葛、其葉婁々、相傳昔有人來祈無子於此祠、蓋夢葛葉入懷、遂有娠、故此林葛葉、人懷之、能避厲鬼、止小兒夜啼、魑魅罔兩莫敢近焉、人心所尊異、使之然歟、頃因一僚友需予記之、以爲贈云、

伊藤長堅記

干時明和八年辛卯龍月

此他に瓶山陽が今の祖父に當る森田氏の需に應じて書いた、葛葉神祠記もありますが、略して記しません、當社近鄕近在は云ふに及ばず、京大阪にも信徒多く、今度新に社殿石の玉垣を營み、社内に八百坪の遊園地を設くるの計畫で、其豫算四千餘圓でありますと、又盛んなりと云つべしです、(本殿)梁行貳間、桁行貳間半、屋根檜皮葺、(幣殿)梁行貳間、桁行貳間半、屋根瓦葺、(花門)梁行四尺五寸、桁行壹間、屋根瓦葺、(玉垣)周圍貳拾間、屋根瓦葺、又森田氏の宅は、寛政年中に火災に罹り、

其後の建築ださうですが、玄關三枚、座敷四枚の紙障は燒殘りの由で玄關のは柳に蘆、又は梅などを表裏に畫き、座敷のは山水、猴猿を表裏に描いてありますが、絕妙の筆、探幽といふ傳ださうですが、左もこそと思はれます、奥庭に名高い桑の燈籠がありますが、古色掬すべく、其形奇雅、如何にも日本有數の燈籠と思はれます、燒殘りの石で庭が作つてありますが、樹木ものの古り、石も寂があつて、なか〳〵面白うございます、名高い楠樹は寫眞に取てありますから、御一覽あれ、是より七八町北へ行くと信太山に

聖神社

があります、延喜式内の神社で、天武天皇白鳳三年八月十五日、勅願に依て建立したまふ所、祭神は大藏の神の御子、聖神、米穀を守り、農事幸はひたまふ神であつて、和泉五社の其一つ、三代實錄に、貞觀元年を五月七日壬戌、和泉國聖神を官社に列すとあります、當社は昔より山林極めて廣く、九町に廿四丁、其坪數七十七万七千六百坪ありましたが、明治四年に境外悉く上地となりたれど、今尙兆域闊大、土地高爽、風光

頗る宜しく、社殿の結構も壯麗であるが、殊に景致に於ては五社の第一です、滿山躑躅を以て充され、夏の初めは紅絹にて包まれし如くなるが、之に加へて若も萩を栽るならば、秋は亦錦を敷きたる如く、一層の美を添ゆるでありませう、此邊松茸多く、秋は茸狩の人群集するといふ、神事は、舊七月廿八日相撲の神事、祇殿の前の谷で相撲がある、舊二月十日流鏑馬の神事、是も同所で行はる、昔は的に熊の皮を用ひしゆゑ、俗に皮祭りともいふ、今は澁紙を用ふ、大祭は舊八月十五日、森の中に土蜘の穴居の跡がある、是は當時大熊小熊の二人の、土蜘が住居せる迹であつて、小熊は網に罹つて此處で捕へられ、大熊は逸げたが、夫を取つた所が熊取であるといふ云ひ傳へ、又安倍の晴明と葛葉姫（白狐）の事について種々の傳へがありますが略します、神社の東の方を總て

上原

といふ、泉州誌に、四方一里許、今上原と云ふ、信太郷の東にありとあるは、則此原です、今四師團の練兵場に成てゐます、此内に十景の原と唱へる所があつて、十景を一望する好風景の地です、是より北東へ五六

町行きますと、和氣村といふ村があつて、其所に

妙泉寺

といふ名高い日蓮宗の寺があります、山號は大覺山と云ひます、曆應の二年、大覺大僧正の開創、僧正妙法を關西に弘めんが爲め、先づ四天王寺に參詣されましたが、其頃和氣村に中谷源右衛門尉といふ者があつて、此處で僧正に見へて法を受けました、其後僧正和氣村に來られて、同氏の家に逗留さるゝこと百餘日、竟に同氏の母妙泉尼の隱居の地を精舍に營み、妙法を說れました、夫故師檀の名を以て山號寺號とされましたが、世に之を和氣の高祖と稱、日蓮上人自作の尊像一軀を安置されへて、諸人の信仰淺からざる次第です、深草の元政上人、曾て母と共に此處に詣で、上人の像を拜して、自ら三願を發しました、一は我必ず出家せん、二は父母壽長くして我孝心を竭さん、三は天臺の三大部を閱せんと、此く發願して祈念されましたが、後其志を成就して名を四海に輝かしました、かゝる靈場ですから、堂塔壯麗を極め、經宗の信徒日夜參詣の斷間がありませんが、殊に十月の會式は非常の賑ひです、是より十

町あまりの東に當つて、池田といふ村があつて、其處に

契沖の舊庵

がある、是は同村の伏屋氏の後園にあります、契沖の事は、大阪の高津圓珠庵の所で詳しく述ておきましたから、茲には申しませんが、契沖が國學を修めて、萬葉古今、或は歴史の上に就て、多くの發明をしたのは、此地に退隱の間、朝夕多くの書を讀んだ故だといふ說があります、自筆の和歌數首、契沖の舊迹としては圓珠庵に織いての土地でございます、今その中の二三を左に伏屋氏の所藏に成てゐますが、

池田川の邊に伏屋某が作りおける庵をかりて住けるに其ほとり大竹

大空に聳ゆるものおほきを見てよめる

千尋ある岸根に生ふるむら竹をいほりのまがきすぐしてぞ見る

同じく此庵の閑なるをよめる韓退之が詩の意をふくみて

いはちかき竹のみどりの玉帶はらはで塵のなき世にぞ住む

池田川の流いとおもしろく島と見えたる所に梅ありてにほひけるを讀る

夕附夜梅が香おくる河風にきしねの草の身をぞ忘るゝ

梅花河邊の月ににほふ夜は千鳥の音をや聲にせん

池田川の岸に藤と山吹とのさきあひたるにつけて

山川のきしの藤なみかくれどもたれにかいはん山ぶきのはな

池田川納涼

山川のいしまの水の涼しさにうをの心もわれにてぞ知る

岸の上に庵しをれば川音の枕をくゝる夜半ぞ涼しき

是より東へ拾餘町、行くと國分村といふ村がある、其村に

國分寺

といふ古刹がある、今福德寺といふ、昔は七堂伽藍の大地と見にて、金堂、寶塔、中門、大門等の舊礎が尙殘つてゐる、當寺の緣起に曰く、昔智海上人と云ふがあつて、常國泉郡浦田の產であるが、同國宮里の瀧山に住で、佛乘を勤修してゐたところ、一日蹇が來て上人の小便を嘗め、臍胎して遂に小女を產んだ、上人之を見るに忍びず、隣家の嫗を賴んで慈育させた、嫗元來貧賤きものゆゑ農事を業としてゐた、夏五月野田に

出で苗を植るに、彼小女七歳の時、嫗と共に嬉戯でゐた、其頃大臣藤原不比等、勅願の御使に槇尾寺に詣で、其歸道に一道の瑞氣を認めましたが、夫は則ち少女の身より放つ光であつた、大臣輿より降りて之を見たまふに、體貌すべて妙麗しければ、即ち光明子と稱し、嫗に請て輿を同じうして歸られ、夫より君主の側に侍して恩寵を得、天平元年八月に皇后に立たもふ、是則ち光明皇后であつて、甚だ佛法を信じ、多くの寺院を建らる、當寺は即ち皇后の家地、之を精舍となして安樂寺と號く、承和年中勅して國分寺と改められ、瀧山の藥師堂は國分寺の輿院であるといふことです、是より

横山莊

即ち茶人の賞翫する横山炭、又の名は香の瀧炭ともいふ蹶躅炭、新撰六帖に

何としていかに燒ばか和泉なる横山炭の白くなるらん

と光俊朝臣の詠める名物の出所を經て、名を聞けば怖ろしけれど、行て見れば、一溪桃樹を將て充され、武陵桃源の趣あるのみか、茶と松蕈の

名所の

父鬼村

を超て、

卷尾山仙藥院施福寺

に至る、是ゞ「深山路やいばら松原わけゆけばまきのお寺にこまゞいさめる」の御詠歌と共に世に聞こえたる、西國巡禮札所の第四番です、泉郡東横山大字槇尾山の奥にあります、開基行滿上人、時代は鮮かなりません、昔は眞言宗、寛文年中より天台に改宗、本尊（丈六の彌勒佛、文殊「左の脇に安じてある、長五尺」、千手觀音「右の脇に安じてある、長五尺」、法海上人靈驗を蒙つて彫刻する所、又側に四天王の像が安じてある）、阿彌陀堂（本堂の南にある）、不動堂（本堂の戊亥にある）、大師堂（内に弘法大師が安置してある、前に弘法大師剃髪所の標杭が立てある、本堂の西にある）、槇尾神社（本堂の南上楠の地にある、當山は槇尾明神の始めて鎮座したまふ所、貞觀六年秋七月、朝廷より從五位上を授けらる）、

如法嶽（役小角法華二十八品を分て葛城の峯に置き、當山には不輕品を收めし故此名があると云ふ）、卒都婆峰（本堂の西四町許の所にある、大僧正行基、懺悔秘法の卒塔婆を立たところ）捨身嶽、隱水（倶に本堂の南にある、弘法大師、石淵の勤操を師として、當山で落髮され、延曆年中滿願寺を建て、手自ら彫刻の千手觀音を安置し、求聞持の法を修した事がある、此二所は即ち大師の遺迹）、滿願寺の瀧清水の瀧（四十八瀧の內、本堂の西武拾町許の所にある）、兜卒嶽（本堂の北にある）、柴手水（不動堂の前にある、當山に水の乏しき故、弘法大師神呪を誦して祈られたれば、清水忽ち涌出る、之を智惠水といふ、又檜の杖を椿の上に投げて誓はれしは、我願ひ空しからずば、此木が榮ゆるであろうと、果して繁茂して、今椿の杖に檜の葉の生へてゐるのが、此山に多くある）覺超塔（兜卒嶽にあります、敵嶽の覺超は當國の出生ゆゑ、遺言して骨を當山に納めたのです）、吉祥院の舊蹟（吉祥天女の像を安置して本尊としてあつたのです、又愛染堂）もあつたさうですが、今は倶に遺迹のみ存してゐます）、當山の名產が松蕈は風味の美を以て頗る世に名高うございます、抑も當山は四岳八峰層巒若翠、宛然蓮花の如く、山中に四十八瀧三十六

洞があります、當時弘法大師沙門勒操に逢ふて落髮し、虛空藏求聞持の法を受け、沙彌の十戒を授かり、三輪を究めて當寺に籠り、初の名は敎海、又如空と改め、延曆十四年東大寺の壇に登て具足戒を受け、又空海と改めたのです、其薩染の黑髮當寺の什寶に成てあます、又空海渡唐の時、青瀧寺の惠果阿闍梨より傳來したまふ眞言秘密の論書、又歸朝の時平城帝へ奉つた將來上表、又大師傳敎大師へ贈られた書草一通又大師眞筆の一紙八軸、同大師自作有髮の尊像などあります、又後鳥羽院の院宣、後堀川院の宣旨、是皆寺田免除の證文、四條院延應年中には、橫山の鄕を以て灌頂の用途に當られ、仁治元年には灌頂堂を建立され、後深草院は建長二年に、別當前大僧正行遍をして、結緣の灌頂を修せしめられた事もある、同三年には宣陽門院の御願に依て、萬花萬燈會を行はれ、其用途として吉見の免田を配せらる、同門院槇尾寺の見十一人を伏見御所にめして、五雙の童番を勤めさせらる、御見聞衆は、應司女院近衞殿下兼經公である、又正嘉の頃には後深草院御寄附の法華經、是は後白河院常に御讀誦の經卷、金銅の阿字、同愛染明王幷に種子千体、同普賢像不動尊、佛舍利三粒を併せて寶塔に籠られ、當山に納めたまふ、今尙寺庫に

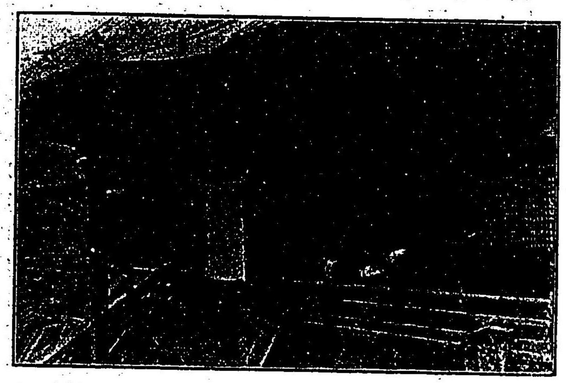
在る、其他靈佛什寶枚擧に遑あらず、當山昔より寺祿少く、所有の山林と、順禮者の寄附とに依て、本坊を始め七十餘宇の坊舍を維持し來つたのですが、維新後は山林の收入も減じ、只巡禮者の寄附のみに依て、本坊始め、今尚道華院、非上坊、北室院、力の坊、觀音寺、靈山院、智積院、文珠院等の諸堂中をゆたかに維持し、多くの僧侶を養ふとは、大士の智力、佛法の繁昌、亦盛んなりと云つ可しです、寺僧に就て聞くに、一年平均して巡禮者の此山に登る者、一日二百人以上、中に就て舊曆の二三月ごろが尤も繁昌との事、登山者の十の二三は豫ての國割に依て、諸坊へ一泊し、又十二錢を投じて九重の守と西吹風の守を受て歸るといふ、此宿料守の代など收入の多きを占むるのださうです、當寺は當國の高山であつて、路遠く、雲封じ、日の出る事も遲い位の土地、和泉より登るには、溪川を右に左に取て進み、行歩頗る嶮難なれど道は左して狹くありません、後山より河内路へ下るには、山路極めて細く嶮しく、「深山路やいばら松原わけ行けば」の御詠歌に背かず、行く者皆惱み煩ふ、是を巡禮道と云つて難行の一つに數へるのです、是より滝ケ畑といふ所へ出て、天野、光の滝、乃ち高野山の街道です、或人此山を天台山に比

べましたが、如何にて、滿山の松風常住に法を說き、一道の溪泉不斷に塵を洗ひ、眞に珠勝の靈區であります前にも申す如く、巡禮者の登山常に斷ませんが、舊曆の三月廿一日は御影供、舊曆の十月十八日は影向の神供と唱にて、近鄕近村及び堺岸和田邊よりも大層の參詣ださうです、當山は案内者が御案内まうした大津停車場よりも、又濱寺停車場よりも、岸和田停車場よりも、凡そ三里許の路程ですから、御都合で孰からなりとも參詣あれ、是より三十町あまり東南へ下りますと、同郡松尾村に

阿彌陀山松尾寺

といふ古刹があります土地高燥林木葱萃、宗旨は天台、本尊は如意輪觀世音（役行者の作、長貳尺）、開基は役優婆塞、本願は用明天皇、中興は越泰澄、累世の天子倫旨を賜ふて勅願寺としたまひ、數代の將軍命令を賜ふて新願所となされ、昔日は堂塔伽藍巍々乎として壯麗であつたが、後世根來の一亂に佛閣坊舍回祿の災にかゝり、慶長七年豐臣秀頼公再興ありたれど、往古の礎石より見れば十が一、詳しくは佛國寺百拙長老の松尾寺の記に見にたれど、文長ければ略します、境内に三所權現社（本

堂の上壇にある、祭神は熊野、白山、吉野の三權現、勅額正一位三所權現、越の泰澄の勸請、春日四所明神社（三所社の側にある、神護景雲二年常陸國より大和の三笠山に遷座の時、暫くこゝに息はれし舊迹、こゝを出で合の衢といふ）、山王社（本堂の左にある）、經堂（本堂の北にある）、不動堂（本堂の南にある）、首堂（樓門の側にある、傳て云ふ源平の時戰死者の髑髏を當寺に納めたものであると、堂の椽の下に今尚白骨累々として存在して、頗るめづらしいものです）、樓門（石檀の上にあつて西向き）、今は僅に是のみ、是より瀧と紅葉で名の高い



槇尾寺本堂ノ景
大津停車場ヨリ三里

The main building of Makinoo dera (Buddhist temple). About seven miles from Ōtsu Station.

牛瀧山大威德寺

御案内いたしませう、元來此所は岸和田停車場より行くが順路ですが、案内者は、槇の尾に一泊して、夫より坪井、大野、父鬼、春木川、大澤等の、諸村落を經て、東南の山つゞき四里餘を歩み、當寺へ參詣しましたから、其順序に依て御内案いたしませう、當寺は同郡山瀧村大字大津にあります、昔は石藏五山と云つて、坊舍が四十もあつたさうですが、今は本坊（眞言宗）と穀屋坊（天台宗）の二坊のみ殘つてをります、本尊大威德明王）佛殿に安置してある、慧亮の作）、不動尊（役の行者の作）、阿彌陀佛（弘法大師の作、俱に脇檀に安置してある）、役行者堂（自作の像を安置してある、多寶塔（金剛界大日を安置してある、弘法大師の作）、求聞持堂（虛空藏を安置してある、弘法大師の作）、鎭守社（辨財天を安置してある、弘法の作）、姪子大黑社（行者勸請）、天照太神社（大師堂の傍にある）、大師堂（弘法大師の畫影眞如法親王の筆）、鍾堂（大師堂の左にある）、閼伽井（本堂の傍にある）、當山は役優婆塞の開創、其後弘法大師惠亮和尚も錫を留めて、共に中興の業を爲しました、昔は石藏五山と

號し、轉法輪の嶺、高座石などいふ奇迹があります、始め役の行者こゝに來て、第二の瀧の上に修錬し、不動尊を彫刻して之を安置されました、今の明王堂が是です、行者七寶を巖窟に收めて山鎮としましたが、其巖窟の中は杳冥らで、常に列風が多いので風穴の名があります、深さ二拾町、昔聖武帝の御時、天下大に旱りしましたが、帝陰陽師の侑めに因て此瀧に雨を祈り、効驗の有たのを悅ばれ、重ねて使を遣はし、瀧の上りで音樂を奏して賽しをされました、是を樂原と云ふて今に其迹があります、亦此時六十六州の田園を此山に分入れて、六十六段田と號け、且は瀧を尊んで嚴重の瀧とあふせられました、從爾毎歳六月十五日、大般若を轉讀して五穀の豊熟を祈り、旱魃を救ふの例となりました、山内の求聞持堂と兩層塔は弘法大師の建立、敬山の大乘坊惠亮和尚此山に來つて、大威德の法を修しましたが、其時大威德尊、第三の瀧より涌出し、其騎る所の牛は潭心の臥石、其石の長さ四丈、瀧之を挾んで飛流る、其樣恰も青牛が水より躍出た如くなので、惠亮感喜瞻仰して、乃ち大日岩の澗の石の上に座して、一刀三禮、大威德尊の像を造りました、今の本尊が是より嚴重の瀧の名を牛瀧と改めました、第一の瀧の高さ二

丈、第二の瀧の高さ十丈、寫眞に採たのは乃ち此の第二の瀧です、第三の瀧の高さ四丈、此第三の瀧の水源に四十八瀧があつて、曲折崔流してゐます、かゝる勝れた瀧のある上に、當山は楓樹を以て充され、秋の末より冬の初めにかけて、宛然紅錦に包まれし如く、麓より峰まで紅葉ならぬ所もなく、綠りなす瀧の流と相映じて、實に奇絶の壯觀、箕面に比ぶれば規摸はやゝ小なれど、風景は却ていや勝り、楫尾高尾は遙に劣ります、是までは道路の不便ゆゑ、畫家詩人など風流の人のみ杖を曳き、普通の人は風景の面白き割に、登臨する者が少なかつたのですが、南海鉄道が開通して、當驛よりも岸和田驛よりも、三里そこ〳〵の里程、大阪堺および和歌山からも、一番列車に乘つて當驛又は岸和田驛に來り、夫より三里の道を人力車で走らすれば、其日の中に樂に瀧と紅葉を見て歸ることが出來ますから、當秋からは單に風流の人のみならず、紳士淑女達も續々登臨して、山靈水伯も爲に一驚を喫するやうな次第になりませう、又當山は紅葉を以て世に聞にてゐますが、紅葉につゞいて櫻樹も多く、殊に糸櫻は京の祇園の名木にも比ぶ可き程の大木があります、寺僧の云ふ所に依れば、糸櫻は節分より咲初め、其他の櫻の盛りは吉野と同

じことだとのこと、瀛車を利用して春も亦遊ぶ可しです、花の少い代りに水に富んでゐますから、吉野とは趣を異にして又一興であります、其他岩躑躅は八十八夜十日前ごろより、五月中旬までが盛り、つゞいて○○○○トウヂリとて他に見なれぬ、卯の花に似た白い花が山の所々に咲いて、青葉の中に雪を見せ、時鳥啼く、河蛙鳴く、若楓では瀧又は瀧の流に映じて、互ひに緑を競へば、夏の初の登臨も亦た面白く、閑雅清涼、避暑に尤も適當の土地です、紫野大心和尚の大威德寺の記、能く此山の事をつくしてゐますが、和泉名所にも出てゐますから略しまして、普照院宮の歌文と、友人石橋雲來翁の詩文、又藤澤南岳翁の詩、中村良顯翁の歌、共に此山の風景、且は瀧と紅葉の樣を能く述てありますから、さに掲げて、案内者の筆舌の不足を補ひ、諸君觀楓の栞りに供へます、

此山の丹楓は高雄通天にも劣らずして、谷の低きも峯の高きも紅ならざるはおし、其くれなゐの中より三つの瀧のだん〳〵に落て牛石さしはさみて水の音つよく霜に染たる紅葉此牛の脊に散かさなりて錦の褥を着せたるが如し、あるは溪の早き瀨に流れ、あるは巖の肩に舞止るもあり、散かたには坊舍の書院庫裡までみな紅にて人の顏も赤き面を

破ぎたるが如し、楚岸吳江もこれにはまさらじとぞおもふなるべし

慈照院宮元瑤法親王　九十一歳

暮ぬとてさても覺へず紅葉はの下てる山の入相の鐘

石橋雲來

泉南葛城二十八峯中。雙峯摩天飛泉倒漢。其下仄徑叉路。如窮如闢。武夷九曲不翅而伽藍僧房倚於其間。是爲牛瀧山。自古其地以楓柏顯(中略)寺依山枕崖。縹渺架空。瀑泉流其下四面皆楓。如晒錦綉。風入樹間。紅舞紫躍。時而繽々有聲。奇觀不可名狀。觀楓之奇。余竊以此山爲白眉。往年河野鉄兜一遊。匾曰秋錦洞。非誣也。余今春遊月瀨賞梅花。觀一日千本之勝。驚其壯觀。余對之。不覺絶叫快呼。又有一目千本之想。薄暮出院右折有壇。石階百級。相呼而登。堂宇無數。有寶塔。有閼伽井。本堂安置威德明王。其像古雅。覺威靈今尚儼存。其他堂宇。皆安古佛。一々拜觀。蓋寺係役優婆塞創開云。過之左折。攀紅踏紫。支逕探瀑。瀑在伽藍坤隅楓林中。分爲三。一則高二丈。二則十丈。三則四丈。水源更有四十八瀑云。第二瀑中間。有一巨石。形類臥牛。如

仰而吸。俯而噴者。以横水。相傳牛瀧之名源於此矣。昔清和御宇。國内大旱。詔祈雨。俄頃沛然雨降。帝大悅。發使入山。奏樂。儀頗嚴密以故別曰嚴重瀧。事詳于紫野大心記。既而瀑水忽激。紅奔龍躍。飛沫

牛瀧ノ景
岸和田停車場ヨリ三里

A water fall of Ushitaki. About seven miles from Kishiwada Station.

撲人。會夕陽西傾。四顧曛黑。而楓錦絢爛。餘光奪目。戊牌歸院。剪燭置酒。且醉且賦各得詩數首。須臾巖角月出。水聲淙々在蟾蜍影中。又一奇觀。三更就寢。夢魂恍惚。覺在錦林水聲中。翌廿一日。早起闊牕。宿雲解駁。曉霜如雪。楓葉皆濕。淡碧濃紅。與曦光映發。又爲佳觀。偶寺僧出紙索書。各書昨夜所賦詩。以與之。午前辭院下山。取路於久米田寺。寺曰龍臥山。又泉南之一名區。有七堂伽藍。此地永祿中。畠山紀伊。三好豐前。爭戰之處。過寺至岸和田。買馬車。薄暮達泉華。先是前七日。余同秋城百忍二氏。賞楓於洛北高雄栂尾諸山。然未有記之。蓋以其名勝於實也。而今如牛山反之。實勝於名數等是不可以無記。終援毫記之。以示同行諸彥云。

元來雲來の詩は祇南海の詩の韻を用ひて久米田寺の觀楓を併せて十疊韻。其他に清人王曉村の詩の韻を用ひた五律一首と分韻の二絶句、總ては十三首ありますが、今は節略して二律二絶だけを掲げます

到大威德寺

法華二十八峰中。寺倚雲端樹々楓。百丈飛泉孤洞雨。一堆殘照半龕風。

溪山帶濕秋心冷。衣袖皆霞人面紅。清賞斯間不堪感。吟情自與牧之同。

步瀑前

滿山秋色夕陽中。隨踏隨穿萬樹楓。對瀑寧無李頻想。停車且逐杜狂風。
水皆帶錦流偏艷。人未呼杯顏忽紅。奇境更存奇物在。濕心臥石與牛同。

分韻得元

桃是武陵梅庾嶺。名區人說別乾坤。誰知東海扶桑國。有此楓紅錦繡源。
箕面高雄皆子弟。吳江楚岸是兄孫。奇觀絕叫牛山勝。錦洞繡邱村又村。

藤澤南岳

題牛瀧圖

半是紅嵐半翠嵐。重々楓葉壓山巖。曾遊如夢吟衣冷。清磬秋高牛石潭

中村良顯

牛瀧

瀧波の岩うつ瀨々に影見にて
色ばかりちる岸のもみぢ葉

以上御案内申した名所舊迹は、濱寺驛、當大津驛、岸和田驛、孰から巡覽するも、里程は大同小異、只行方の順序が違ふ分の事ですから、前にも申しておきましたが、南よりおいでの諸君は岸和田、北よりおいでの諸君は濱寺、岸和田は殊に中庸を得てゐます御都合の所から滊車を降つて御一覽あるが宜しうございます、偖是から元の大津驛に歸り、三哩餘滊車に乘り、忠岡掃守を經て

岸和田停車場

に至ります、當停車場は岸和田舊城趾を距る事二町の所にあります

岸和田

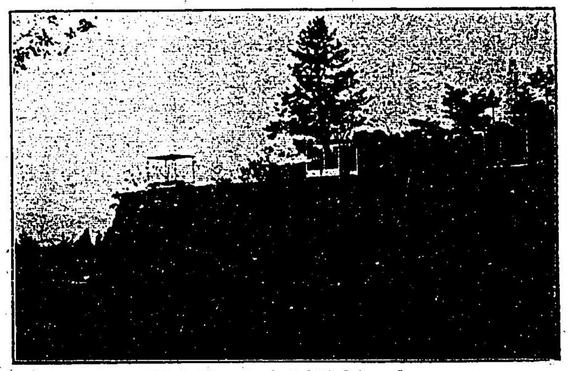
は舊岡部侯の城下、大阪より和歌山に至るまでの海道で、堺に續いての繁華の地、現在の人口一萬七千百五十四人、戸數二千八百廿二戸、銀行は國立銀行一ケ所、株式銀行三ケ所、會社は紡績會社一ケ所、木綿會社一ケ所、織物會社一ケ所、煉瓦會社五ケ所、其他の會社工場其數百を以て數ふ可く、重なる產物は、米、麥、菜種、蜜柑、清酒、陶器、薄木綿、

煉瓦、木櫛、茶、絹糸、紡績、綿チール、紋羽、水産物、砂糖、細麗、燐寸其他澤山あります、又岸和田港より輸出品の重なるものは、米、蜜柑、清酒、油糟、紡績糸、細麗、燐寸等其他にも尙澤山あります、又官衙は、岸和田郡役所、同税務署、大阪府第二土木出張所、同憲兵第七管區首部、岸和田區裁判所、同警察署、同水上警察署、同郵便電信局等、學校は中學校一、高等小學校一、尋常小學校二、各種學校五、町名の聞には、北町、魚屋町、堺町、本町、南町、並松町其他は略します、以て其盛況の一班を知るに足ります、旅館は本町の寺田光三郎(通稱西吉)等を始め可成なのが數軒あります、先づ

岸和田城

の事から御案内いたしませう、當城は建武年中和田新兵衛高家始めて築くところ、其以前は地名を岸と云ひましたが、高家在城に依て、岸の和田殿と稱したので、遂に岸和田と唱ふるに至つたのです、高家は大鳥郡上神谷和田村の城主である、始楠左衛門尉成康の次男親遠と云ふ人、河内より來つて和田を氏とし、和田太郎親遠と名乘りましたが、其子の四郎高遠は楠正成の妹婿、其子孫三郎正遠は正成の甥です、其子が乃ち新三郎高家で、後に新兵衛尉と改め、河内に歸つて大饗村に住居し、又岸和田へ來たのです、正成攝河泉の大守、左近衛中將、從三位に昇進した時、高家を和泉守にして、此城を預けました、其後永祿三庚子年、三好筑前守義賢の一族、安宅木攝津守冬康、和泉河内の兵を率ひて此城に籠つた事がございます、又元龜年中寺田又右衛門在城、松浦肥前守も暫時一國の代官として在城、天正十一年豊臣秀吉公、中村式部少輔一氏に、湫仁清、

岸和田城ノ景
岸和田停車場ヨリ五丁



The Castle of Kishiwadaa.
Close to Kishiwada Station

寺田又右衛門、松浦安太夫、真鍋次郎、桑原、淡輪以下の地侍を殘らずつけ、其他加勢として、明石與四郎、黒田甲斐守、宇喜田秀家の人數をも添へ、都合八千許りの同勢で、紀州一揆、三万餘の押えとして此城に籠城させました、其翌年中村と紀州一揆との取合は、なか〳〵の大合戦、一氏が秀吉の委托に背かず、小勢を以て大敵を破り、生涯の勇略を顯したばかりか、頗る面白い戦爭でございますが、其割に人が知りませんから、岸和田城の沿革をお話しする序に、一寸一綴り講談師摸樣で辯じませう、十一年にも一揆と屢々取合ひがございましたが、夫は略して、翌年の大合戦だけをかいつまんで偖も紀州の一揆共、秀吉が家康と戰ふ爲め、大阪を出陣すると聞き、此虚に乘じて大阪を乘取れと、二萬三千の大軍を二手に分け、一手は東の山際より堺に向ひ、一手は岸和田に押寄せました、中村方にては此くと聞くより、逸り雄の若者ども二騎三騎うち連れ〳〵城を出て、寄手に向ひましたので、士大將早川助右衛門、川毛惣左衛門大ひにあせり、速に引返せと使を走らせやうとしますを、一氏聞て頭を掉り、かゝる時進んで行重りたる武者を引んとすれば、却て敗北するものゞ、いざ打出んと云ひて、鉄蓋が峯と名附けた胃の緒を締め、自ら真先き驅けて城を乘出しました、先に進みました若者共、菅笠の馬印をふり返つて見まして、一層の勇氣を增し、すはや殿こそ出たまへり、軍は勝たるゞと云ふ程とそあれ、一萬餘の紀州勢に面もふらで切てかゝり、須臾間に打破り、七筋に分れて逃るを遂ひました、一氏は旗本三百騎許りで、堂の池といふ所に控へて、先陣の返るを待てゐました處、堺海道に當つて馬煙りが黒く見えました、是は堺に向つた敵が味方の敗れを聞て、應援の爲に引返して來たのです、旗本の面々之を見て、戰ひ勞れし小勢を以て、新手の大軍に驅合ふて戰はんこと思ひも寄らず、疾く城に楯籠り候はんと口々に云ふを、一氏少しも騷がず、イヤ〳〵今退くならば味方の氣挫けて打負くること必定、一寸だも退く時は先陣を捨殺にし、城をも攻落さるゝ可し、一揆は何百萬もあれ、先陣をだに切崩すならば、二陣は忽ち敗北すべし、我に任せよと云ひて、敵の一同に懸りがたき地の理を撰み、堂の池を前にあて、落着拂つて敵の寄するを待ち、一氏更に令して、馬をば悉く城へ返し候へ、馬を引附けおく時は、自然引退きたき心の起るゞとて、將几に腰を掛け、三百許りの勢に殘らず槍を膝の上に置せ、折敷い

てゐました、中村の手の内で新藤勘左衛門は強弓矢繼早の手利ゆゑ、散々に射る、敵兵射しらまされて、手負死人倒れ重なつてためらふ時、一氏弓の者の羽靈を悉く勘左衛門に渡せと下知せられたので、いよ〳〵指詰引詰射たつる矢に、空矢は一筋も無かつた、一氏麾を取てかゝれといふて立上がる、爰に又黑田如水は大阪に留主してゐましたが、岸和田に敵押寄すると聞き、吾子の長政十四歳なるが岸和田にあれば、いざ救はんとて七百騎許りにて敵の後よりかけ來るを、一氏見ていよ〳〵進み、おめき叫んで切てかゝり、追立て〳〵八百餘の首を取りました、如水は長政如何にと思ふ所に、黄羅紗の羽織を着て、鹿毛の馬に乘り、今朝討取た首を鞍の四方手に附て馳廻るを見て、此上もなく悦びました、其後秀吉此合戰の始末を聞き、一氏の功を賞して感狀を與へました、この一氏は豐臣家の諸將の中でも、殊に勝れた名將であつたので、さすがの加藤嘉明も其智勇を羨ましく思ひ、彼が武略にあやからせたいとて、其子の明成を式部少輔にしたといふことです、而も其頃の岸和田城は、二の丸だけあつて掻上げ城であつたといふ事です、文祿より慶長へかけて、桑山、小出の二氏在城、元和五年より松平周防守康重在城、其以前は二

の丸の石垣まで汐が指入り蘆原であつたのが、段々遠淺に成り、やがて傳馬口より阪口門まで新廓が出來、町家も建つたといふことです、夫迄は南大手より東大手の往還のところ、目今の通りの往還に成てゐたといひます、此時に伏見の城を取壞ち、其建物を所々へ引かれて、當城へも分たれたので、五三の桐の紋附の瓦が、今尚いさゝか殘てゐます、寛永の十七年より岡部氏の所領となり、天守、矢倉多門等悉く建添へ、明治四年辛未七月廢藩置縣の時まで在城、此時牙城、二丸、三丸、外廓等總て取毀ち、本丸は陸軍省の所轄に歸し、後農商務省の所轄に移り、後は岡部家の所有になる、二丸は廢城後人民に拂下げられたが、後又岡部家の所有となりました、明治十二年の頃岸和田士民義金を募つて岡部氏の爲に

紀念碑

を其處に立てました、此邊眺望好く、櫻など栽ゑて、此町の公園の姿にて、士民の遊び處に成てゐます、乃ち寫眞は其紀念碑を寫したのです、

岸城神社

はすぐ下にございますが、祭神は素盞雄命、社格は鄕社、式内の神社でございまして、舊藩主岡部公の尤も尊敬された大神です、夫から町の南の盡所に

蛸地藏尊

といふ靈佛があります、天性寺の境内に安置してあります、今寺記に因てその緣起の概略を述べますれば、此地藏尊は、建武年中に鮴の脊に御して海濱に出現され、時の城主和田氏の尊崇を得て、城内に堂を構へて安置されましたが、其後兵火の患ひを怖れて尊像を溝の中に納め、爭亂の爲め取出ず時期なくて、そのまゝ數多の歲月を送りましたが、天正の始め松浦氏在城の時、紀州の一揆近隣を侵し、既に城をも陷入れんとする時、城中より一個の大法師現れ、劒法の妙手をふるひ、宛然蝶鳥なんどの飛び廻るが如く能く戰ひ、敵兵之が爲に惱されて敗走しましたが、大法師は敵の引退くと共に、忽然姿を隱して見へなくなつたので、人々奇異の想ひを爲してゐましたが、其後城主時々蛸の堀に泛ぶのを見て、奇怪の事であるとて、多くの人數を堀に入て探らせましたが、不圖も木像の地藏尊を得たので、偖は曩に現れた大法師は此地藏尊の化身で有たかと、始めて尊敬して、城内に置て諸人の拜膽を許し、其後文祿年中小

岸和田蛸地藏ノ景
岸和田停車場ヨリ八丁

Takojizo (Buddhist temple), Kishiwada.
Close to Kishiwada Station.

出氏在城の時、此地藏尊毎夜白法師に化して城下を彷徨ふといふ風説がありましたが、時の天性寺の住僧泰山和尚、元來地藏尊を尊信のあまり、城主に請ふて其寺に安置しました、夫よりいよ〳〵靈驗著明になり、諸人の信仰もいや増して、今日の盛況を呈するに至つたのです、此地藏尊は弘法大師の作、本堂は九間に七間半、日本第一の地藏堂、日夜參詣の斷間はございませんが、毎月の廿四日は緣日殊七月二十四日は大緣日として近郷近在より貴賤老若群集して、町内は非常の賑ひです、此寫眞は本堂の正面から撮たのです、是より少し懸離れた名所古跡を御案内いたしませう、是より、東南へ二十五丁許り隔つた泉南郡有眞香村大字八田の丘の上に

捕鳥部萬墳

と幷に義犬の塚があります、日本紀を按じまするに、万主は物部守屋大連公と共に、當時の國難に殉れたる愛國忠君の士其凛乎たる英風、千歳の下聞く者をして感奮興起せしむるに足るです、義犬は万主の愛飼せる所なるが、万主の難に殉れた時、其首級を偷み咥へ去つて、丘山に至つて之を埋藏め、尚其側に在て之を護衛すること數日、遂に絶食して死んだのです、後に其事實が朝廷に聞えたところ、かゝる例は世に珍らしい事であると、深く愍みたまひ、詔勅を下したまひて、万の墓を封じ、併せて義犬をも葬らしめたまふとあります、而るに千三百餘年の星霜を經へて、周圍自然に崩壞して、唯一小石碑の存するのみ、頗る廢頽に爲つたのを、有志の人々之を遺憾に思ひ、義金を募集して、明治廿二年内大臣從一位大勳位公爵三條實美公の題辭、本居豊穎翁の撰文、小杉榲邨君の執筆に係る一大碑を建設したるは、誠に喜ばしい事の限りです、此擧たる、朝廷夙に忠臣義士を重んじたまふ御主意に適し、啻に万主の靈魂を慰むるのみならず、又以て天下の士氣を振興するに預て力ありです、是より一里ばかり東南へ行くと、同郡八木村大字池尻に

久米田寺

があります、山號は龍臥山、又の名は隆池院、宗旨は古義眞言、行基の開基四十九院の其一つです、本尊(中尊釋迦左文殊、右普賢、聖武帝除厄の爲に作らせたまふといふ寺傳)、不動堂(本堂の左にあり)、觀音堂(本堂の

左上壇の地にあり)、開山堂(同上)、三石塔(當寺の南にあり、聖武天皇、光明皇后、龜山祥定の墳墓)、當地の緣起に行基菩薩の眞筆、今其大意を採て記しますれば隆池院は一國の命珠、万民の依帖なり、夫故、堅牢地神は鷲峰海會の土を運んで爰に築き、善哉童子は清涼山堀の壞を荷ふて之に加ふ、爰に一天の聖主勅詔を降して行幸を遂げ、万乘の文武官符を捧げて命池に臨む、内大臣の某殊に功を致し、光明皇后勝れて力を加へ、遂に去ぬる神龜二年乙丑二月五日始めて寶地を堀り、天平十年戊寅孟秋を以て功を成し滿願畢んぬ、五間四面の堂一宇、釋迦、普賢、文殊、の像を安ず、塔婆一基、鐘樓、經藏、僧房二宇、餘房二十宇は常住僧の坊なり、爰に親父高志定知貧道と奏聞を經て州吏に達し敷兆を定め、四至を限る、所謂東は角河の流れ、春木峰、并に小津川の東峰、七層峰を限り、南は葛木の横峰を限り、西は松村の登路、并に延年峰又坂の切上げを限り、北は熊野詣での大道を限る、件んの四至の内、田畠地利を募つて佛聖の燈油、住僧の依帖とすべし(云々)中略)源の淨業怠らず、故に水田三百町山林十町之を以て寶地に修理を加へよ、此法水の利益に預るの

民、此池流の餘水に懸る魁、かならず法力の驗を仰がん、又命じて同じく龍蓏の曉に及ばんと欲す、遮て將來末代の違亂を停止ん爲、記錄する所如件天平十年戊寅十二月八日云々(當寺の什寶は、後高倉院の院宣、大塔宮の令旨、楠正成の添書、新田義貞の書、足利尊氏同直義の書、大佛陸奥守及高野帥直の書、仁木細川の書、楠正儀の書、鹿園院の文、沙門禪餘の勸進帳、其他將軍家の古文書數通あります、當寺は只古刹として賞すべきのみならず、山内の風景も亦愛すべし、尤も秋日登臨して楓を觀るに宜し、今石橋雲來翁の詩を左に掲げて、之が證となす、此詩は前に掲げた牛瀧觀楓の詩と、同じ韻を疊んだものであります

久米田寺觀楓

石橋雲來

一天如洗寸眸中。不似牛山醉對楓。晴色映衣秋澗水。奇香撲鼻露柑風。
祇園松老髯猶綠。寶井魚肥鬣更紅。我與寺僧原有舊。假來獅座好參同。

久米田池

久米田寺の門前にあります、行基の鑿たのです、此池の事は、前に掲げ

た行基の久米田寺縁起の内に述てあります、池の周り十六万五千餘歩、町數で云へば八町四方あります、千歳の後の今日、土民此池に據て灌漑の便を得、行基の法澤に潤ふてゐます、此池の北に久米田村があります。

橘諸兄公の塚

が久米田寺の西一丁ばかりの處にありますが、諸兄公は井山の里で薨じられ、彼里に塚がありますが、是は久米田の池を堀る時、公は其奉行を勤められたから、里人其功を大なりとして此塚を築いたのだといふ説がありますが、或は是に近いやうに想はれます。

光明皇后の塚

久米田寺の境内に、古くより女郎塚と呼ぶ塚があつて、是は光明皇后の塚だといふ説がありますが、前に述た久米田寺三塔の内の一つか、但は久米田の池を穿るにつき、皇后殊に力を加ふとある故、其德を稱へて廟を建たその迹であるか、孰とも定かでありません。

久米田戰場

永祿三年二月、畠山紀伊守高政、熊野根來の地士法師等を驅催し、既に廣浦の城より和泉國に發向しました、此時安宅摂津守冬康、十河左衛門尉一存、三好刑部少輔、同左馬助、岩成主税助、早淵瓶母助等、及び淡州の軍卒二千餘騎を率へ、岸和田の城に籠つて居ましたが、大將三好豐前守義賢入道實休は、堺の津に陣を取り、即ち篠原右京進に、阿波讃岐伊豫の軍勢一万餘騎を附て、岸和田の加勢とし、實休は五畿内の勢二万騎を率へて、陣を久米田に張て、數日畠山勢と對陣して爲ましたが、一夕實休夢に一首の和歌を得ました

草からす霜又けふの日に消て因果はこゝに廻り來にけり

實休曾て其主君を弑した事がある、暗に其應報の意が含まれてゐる、舍弟冬康之を凶夢だと思つて

因果とはるか車の輪の外にめぐるも遠きみよしのゝ山

と添削しましたが、其甲斐もなく、實休遂に防戰利なくして、三月五日流矢に中つて死にました。

三好實休墳

は此より程遠からぬ額原村の東にありますが、其曾孫の三好篤慶といふ人が近來墓石を建ました、是より北へ一里許り行くと同郡山直上村大字積川に和泉五社の第四

積川神社

がございます、社格は鄕社、延喜式内、祭神は五座、彦火々出見尊、天照太神、豐玉媛、火酢芹尊、火明神、日本後紀に淳和帝弘仁十四年秋七月丙辰、祈雨の奉幣使を立られた事を記し、續日本後記に仁明帝承和九年十月己巳和泉國積川の神に從五位下を授くる事を記し、三代實錄に清和帝貞觀六年三月廿三日己酉和泉の積川の神に從四位下を授け、同十五年四月五日從四位の上を授ける事を記してあります、由緒正しい神社です、是より東へ一里餘り行くと

牛瀧

でございますから、單に牛瀧の觀楓をのみ目的の方は、前にも申しましたが、岸和田驛から行かれるのが便利です、而も該驛より内端まで二里半の所、沿道の有志者の發起で、馬車鐵道を架ると云ふ計畫があるとの事ですが、此鐵道が落成すれば、内端から牛瀧まで僅に半里程、いよ〳〵觀楓の便利を添へて、南からも北からも、該驛から行くのが順路になります、此邊にも尙著名の神社佛閣がございますが、爰所等で御免を蒙りまして、一旦元の驛に返り、貝塚驛へまゐつてから、更にその近傍を御案内いたしませう、岸和田驛より一哩餘走りますと

貝塚停車場

です、停車場は、町の東南にあります、先づ

貝塚

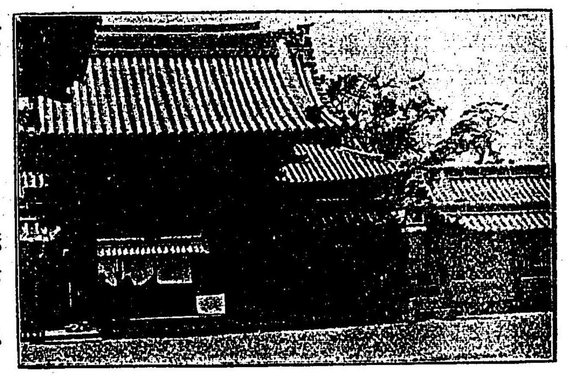
から御案内致しませう、當驛は以前は願泉寺領（願泉寺の事は後に申します）方四丁現在の戸數千百二十戸、人口五千二百五十三人、銀行諸會社は、貝塚銀行、貝塚織物株式會社、貝塚煉瓦株式會社、其他に會社工場

も數々あります、昔より戸數に合して富豪多く、産物も亦澤山あります が、岸和田と大同小異で、木綿、幅廣木綿、煉瓦石等です、殊に盛大を極めてゐるは、木櫛でございます、組合が五十軒ございまして、一ヶ所の製造高平均一万圓以上、其販賣地方は、大阪、京都、阿波、肥前、肥後、筑前等、又た宇野家の製造の大釜、一個人の營業でございますが、あまり他に類のないもので、さし渡し四尺五寸、拾五石入より、さし渡し弐尺、六斗入まで位のを製造すること、一ヶ年平均八百本以上、其金高は四万圓以上、第四回勸業博覽會に出品して、褒狀を得たといふこと、以前は關西のみの販路であつたが、逐々擴張して、今は關西七分、關東二分、北海道一分といふ景況ださうです、又此海道で堺をのぞいて、花街のあるのは、當驛のみです、當驛の繁華は花街のあるのが幾分か預つて力ありだといふ事です、旅館は旅籠町の若松屋、角の花など好い家です、先づ以前の領主、貝塚御坊——

金涼山願泉寺

より御案内いたしませう、當寺は貝塚停車場より二丁北にあたる、眞敎

貝塚御堂ノ景
貝塚停車場ヨリ二丁



Kaizuka Mido (Buddhist temple). Close to Kaizuka Station.

院ト半の代々看主する所、往古は行基菩薩の開基四十九院の其一つ、本尊は阿彌陀佛、脇壇に宗祖親鸞上人眞向の影と、聖德太子七高僧の影を安置してあります、寫眞に依て其一班を推察あるべけれど、大阪の御堂に次ぐの大伽藍です、本願寺第十一世顯如上人、信長と不快であつて紀州の雑賀に屏居され、和睦の後天正十一年七月、本願寺を此願泉寺に移し、十三年八月攝州の天滿に移る時、ト半が從來の忠節にめでゝ、同人を以て當坊主としたのです、ト半は俗姓新川氏、佐野川村の人、其後ト半又忠節を德川家康にいたし、其功に依て貝塚四丁を與へられ、遂に御坊もト半

の私有に歸して、名を願泉寺と改めたといふ事です、元和元年大野主馬助一軍に將として大阪より討ていで、此願泉寺に陣を取り、酒宴に心を奪れて先陣の敢るゝを知らなかつたといふ事ですが、其實は卜半故意と主馬を饗應して時刻を移させ、戰機を誤らせたのだといふことです、此の樫井の合戰の事は、同所を染内する時に詳しく述べませう、卜半は德川家と緣故厚きを以て、年々麥粉と干鱧を幕府に献上するを例として、慶應三年まで繼續して來ました、此樣な由緒ある寺でございますから、家康以下代々將軍家の手書を始め、珍器の重寶今尙多く所藏してをり、毎年舊十一月廿五日より廿八日報恩講を執行しますが、其間近歸近村より、貴賤郡集し、具塚町は立錐の地もなき大繁昌を極めます、夫から

感田神社

を御案内いたしませう、當社は具塚町の氏神であつて、社格は鄕社、延喜式内の神社、祭神は素盞雄命、天照皇大神菅原大神の三座、社殿も頗る壯麗、明治廿七八年征清の役戰利品數點を御分納ありしに依つても、朝廷に小線ならぬ由緒ある神社といふことを知るに足ります、其感社に

潛戸神社といふがありまして、祭神は蜆貝媛神、俗に乳の社と稱して婦人の信仰極めて厚く、來つて乳を祈るに靈驗著明なれば、日夜諸方よりの參詣斷間なく、祭日は例月廿一日、大祭は七月廿一日、當社の神官大石清次君は、國學に秀で、敬神の心厚く、此回予が此案内記を著はすについても、舊記を示され、實踐を說かれ、多くの利益を與へられましたから、爰に一言の謝辭を述べます、次に

清水の大師

は具塚停車場より十五町南に當る、南近義村大字橋本にあります、安置する所の本尊は弘法大師、堂の前に清水が涌出てゐますが、是は昔大師行脚の際、杖を以て地を穿つて涌出さしめたまふ靈水とて、之を汲みながら參詣する者多く、例月の廿一日は群集雜沓を極めます、因に申します、同村に昔より痛醫で名高い

長谷川桂山

と云ふがあります、世に和泉の痛醫者と云ふのは是です、此家の庭を踏

んでも小兒の病ひは癒るといふ位で、近村近郷は更にも云はず、遠き、他府縣からも、子を負ひ孫を抱いて門内に群集します、是より東南へ半道あまり行くと、

木積觀音堂

は泉南郡西葛城大字木積にあります、貝塚停車場を距ること五十町余り岸和田停車場を距ること一里足らず、水間の觀音のすぐ側です、此堂の事を泉州誌には、其寺の緣起を引て、行基幾内に四十九院を建るにつき、其の材木は盡く和泉の國の木島の杣山から伐出しましたが、此地は即ち其材木を置いた處ゆゑ木積の名があるので、行基自ら觀音の像を彫刻して此地に安置したと、此丈の事を誌してありますが、案内者が實見した所は大きな相違でございます、寺の傳へに依りますに、當寺は聖武天皇の勅願で、神龜三寅年の春、行基菩薩の開基で、七堂伽藍の大刹を建立して其後桓武天皇より寺領千七百石を賜はり、泉州第一の靈場でありましたが、足利の世に兵燹に罹つて、佛堂六宇僧房二拾余宇、灰燼と成りましたが、此時佛像のみは疾く堂中より探出して、宇新池に投入れ辛うじて回祿の災を免れましたが、後に堀出して今の觀音堂に安置しておきました、然るに天正十三年豐臣秀吉根來攻の時又もや兵火に罹り、燒殘りの佛堂僧房悉く烏有に歸し、僅に今日の觀音堂のみを存し、其後岸和田藩主岡部侯、往古の由緒を追想されて、本堂永世修覆料として、山林五町歩を寄附され、享保七年復た新田五町歩を寄附されましたが、度々の大修繕に其田圃山林をも失ふに至り、一時は衰頽の極に陷入りましたが、何しろ千百余年を經た稀有の靈場、諸人の信仰も淺らず、頻りに維持の方法を講じてゐる折柄、去る二十三年二月十日、朝廷より保存金百圓を下賜されたので、いよ〳〵感慣興起し、此堂の管理者周旋掛等、百方奔走して、今は立派に維持の道もついたといふ事ですが、かゝる靈場の永遠に保存さるゝは案内者の尤も喜ぶ所です、此堂に現在の佛像は阿彌陀如來坐像木丈五尺、阿彌陀如來立像木丈四尺八寸、聖觀世音菩薩立像木丈五尺七寸、文殊菩薩立像木丈六尺三寸、勢至菩薩立像木丈六尺一寸、藥師如來立像木丈五尺七寸、日光菩薩立像木丈六尺、虛空藏菩薩立像木丈五尺三寸、地藏菩薩立像木丈四尺八寸、釋迦如來坐像木丈三尺一寸、普賢菩薩立像木丈六尺、彌勒菩薩坐像木

丈三尺、　聖觀音菩薩立像木丈五尺七寸、　十一面觀音菩薩立像木丈三尺二寸、　難陁龍王立像木丈五尺五寸、　跋難陁龍王立像木丈五尺七寸五分、持國天立像木丈四尺八寸、辨才天立像木丈四尺一寸、　多聞天立像木丈五尺五寸、　都合二十体總て行基の作、明治廿四年七月三日附を以て、其筋より、悉く鑑査狀が下附に成てゐます、和泉にて美術的に一見するの價ひあるは、堂塔では此木積の觀音堂、佛像では吾孫彦の觀世音と、此木積の諸尊体、神像では泉穴師神社の諸神体ですいづれも千年以上の古作、實にありがたくも尊くも拜まれるものです、是より二三丁隔てゝ同郡木島村大字水間に

龍谷山水間寺

があります、水間寺の水源は二流ある、一は大川村の東より出て大川といふ、一は蕎麥原村より出て蕎麥原川といふ、俱に水間に至つて、相合ふて水間川と云ふ、其二流の中間にあるゆゑ水間寺といふのです、本尊正觀音（赤栴檀長四寸、天竺文殊菩薩の作、昔天平十六年聖武天皇靈夢に感じたまひ、行基に堂山を見せしめられたところ、瀧の下より龍神が顯

れて、忽ち老翁と化し、行基に語つて曰ふやう、此所に天竺靈鷲山の靈佛文殊の作られた觀世音の尊像がある、之を帝に上り佛閣を營まれなば、國家長久であるだらふと、行基即ち此由を奏聞して靈場を造營したのだといふ寺傳です）、若宮社（聖武帝の靈を祭る）、鎮守社（熊野、藏王、白山）、辨財天祠（南の上壇にあり）、開山堂（同上）愛染堂（坊の横手にあり、本尊は行基僧正の作、俗に縁結びの神と開山堂（同上）愛染堂（坊の横手にあり、本尊は行基僧正の作、俗に縁結びの神と稱して、參詣人頗る多し）、藥師堂（南上壇の地にあり）、奥の院（坊の裏手にあり）、行基僧正四十二歳の肖像が安置してあります）、多寶塔（本堂の前にあり）、護摩堂（川の側にあり）、廊下橋（本堂の南にあり）、水間の瀧（橋の上にあり）、爪切不動（瀧の本にあり）、其他經堂鐘樓もあつて莊嚴見るに足ります、當寺は昔堂塔巍々、坊舍百三十餘宇、其後衰微しても尚四十坊を餘したといふ事ですが、今は本坊のみです、併し諸人の信仰はます〳〵厚きを添へ、年中の法會の概略を云へば、先づ舊正月三日は千本搗と唱へ、村内の者が集つて、三石三斗の餅を搗き、舊二月の初午と二の午は、此日に參詣する者は、四十二の厄を拂ふとて、紀州、大阪、大和、和泉、各府縣の講中、又近郷近在の信徒陸續參詣し、其日水間へ宿を取る者ばかりでも、例も三千人を下つた事はな

く、年越しも亦同じ意味にて参詣多く、初午に續いての繁昌、舊六月十七日は十七夜、同七月十日は千日祭、同七月十七日は十七夜、同八月十七日は相撲、孰も參詣人晝夜に群集しますが、平生といへど毎日參詣の斷間はありません、愛染堂の前にお夏清十郎の墓があります、お夏は此水間在の人、清十郎は薩摩の人、或る事情に迫られて此愛染堂の前で情死を遂げたといふ、その時着てゐたれ夏の上着と清十郎の大小、今尚當寺に保存してあります、其側に一種變つた椿がある、愛染椿、又縁結び椿と名づけ、參詣の人紙を結附け、「お夏清十郎の愛染椿、縁を結ぶの玉椿」といふ

水間寺ノ景
岸和田停車場ヨリ一里半

Mizumadera (Buddhist temple) About three miles from Kishiwada Station.

其の寺の盛況の大法會ふくしの時、放生會、此の寺は四国巡行をを以つて世に聞こゆ、

白糸の滝
岸和田停車場ヨリ一里

The Shiraito waterfall of Mizumadera. About three miles from Kishiwada Station

里許の處が、今尚あつて、人の口碑に殘つて居ます、境内に此の大

ひとりますが、案内者は寺の裏手の二水の落合ひの所、乃ち寫眞にも採つた、白糸の瀧の懸つてゐる所の風景が、當寺の第一の名勝と思ひます、牛瀧の壯麗、犬鳴の幽邃、共に天下の奇でございますが、此水間の瀧と川の流れ、木立の安排、實に奇絶妙絶、案内者は犬鳴、牛瀧、水間を以て、和泉の三景と稱して可なりと思ひます、木曾の寢醒にも比ふべく、夏日此に來つて暑を避け、釣でも垂れてゐたら「万事無心一釣竿、三公不換此江山」の高尚の觀念が泛びませう、瀧の上に二の石があつて、其上の石に行基が、不動を彫り、下の石に弘法が六字の名號を刻んでありますが、又以て一種の奇觀です、當寺の宗旨は天台です、白糸の瀧の奇觀のある上に、境内に櫻花紅葉を植る計畫をしてゐますから、其事成就の上は、春秋の詠めにも富で、錦の上に花を添るの觀がございませう。

鐵道馬車

當村の村長中野彌平次氏の話に、此近村西葛木、東葛木、岸間、熊取、木積等は産物極めて多く、中にも、茶、蜜柑、煉瓦、木綿、藍紙など、外國へ輸出する物もあまたゆゑ、夫等のものを南海鐵道へ積込む便を計り、當村より貝塚まで鉄道馬車を通ずる計畫で、發起人は九人、資本金は九万圓、壹株は貳拾圓、只今出願中、當年中に落成の都合だと云ふてゐられたが、此鉄道馬車が出來上つたら、岸和田よりも貝塚よりも、水間寺を經て牛瀧へ行くには、誠に便利な事になります、水間寺へは、岸和田より一里强、貝塚よりは一里弱、孰から參詣するも、左して、差ひはありません、是より元の貝塚へ歸つて、佐野驛の方へ進みませう、貝塚より佐野まで三哩餘、其間此海道で名高い、蛸茶屋の前を過ぎ、鶴原村中の莊村を通りますが、鶴原村は昔貝田村と云つたのですが、中世村を海濱に移して鶴原と改めたので、同村に貝田の神社といふ延喜式内の神社がありますが、今は八幡社と稱してゐます、同所に

珍努池

といふ古い池があります、鶴原と佐野川の間、海道の東側にあります、今里人之を野々の池、或は沼野の池など云ふものがあります、珍努の池の轉語です、日本紀に垂仁天皇三十五年秋九月、五十瓊敷命を河内に遣して、高石池茅渟池を作らすとあります、又古事紀にも、垂仁天皇の御

子、印色入日子命、血沼池を作るとあります、又佐野の川村に

顯如の蟄穴

といふ古迹があります、是は佐野の川村新川又七郎の第宅の境地竹林の中にあります、天正八年閏三月五日信長と本願寺と和議整ひ、同月廿七日顯如上人紀州雑賀へ退去する事になり、大阪より船で四月九日に、佐野川の北出の濱へ着岸、紀州の門徒等、新川與一と共に新川の宅へ請じ入れましたが、織田の諜者が窺つて來ること、藪の中に穴を深く穿て其内に蟄しました、ところが果して兵卒がやつて來て、所々を捜索したれども、遂に見當らないので、定めて先を急いだのであらうと、雑賀の方へ逐駈けたので危い命を助かつたをゆこと、其後信長滅亡、上人貝塚御坊に三年住居の時、時々新川の宅へまゐられ、舊恩報謝の爲め、祖師の眞影、蓮如上人直筆、山科御堂建立の文章などを贈られたが、今に同家に秘藏して居るといふ、其處を經て

佐野停車場

に着ます、停車場は佐野驛の東南の所にあります、先づ

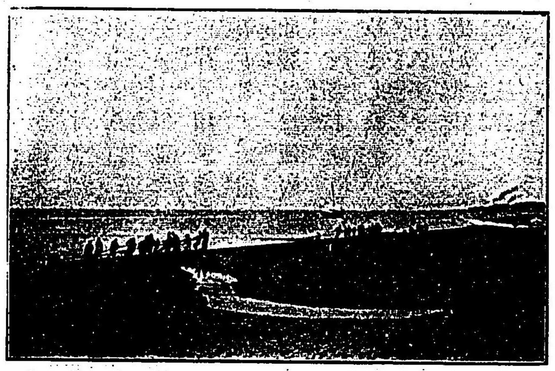
佐野

から御案内いたしませう、此驛は岸和田に續いての大驛、戸數千三百貳拾戸、人口七千貳百三拾一人、泉陽銀行あり、泉南木綿株式會社、弘燐株式會社あり、其他にも各種の工場があります、又官衙は、岸和田區裁判所佐野出張所、岸和田警察署佐野分署、佐野郵便局等があります、宿屋も三浦、貴島等ありますが、其内三浦は尤も上等です、此驛昔は飯野佐太郎といふ豪家があつて、一家一門も數多く、多くの大船を所持して、南海北海に通つて萬の物を交易し、此驛も殊に繁昌を極めましたが、飯野家滅亡して後は、やゝ衰退の傾きですが、尚濱に船の出入多く、商賣も頗る繁昌して、和歌山海道の一都會です、頃日南海鐵道が當驛まで開通したにつき、此濱より一日數回滊船を和歌山へ往復させ、旅客の便利を謀らんと、土地の有志が計畫してゐるとの事でございますが、此事成就の上は、又一層の繁昌を添へませう、當驛は源平盛衰記にも佐野の法橋の名と共に、見えて、古くより世に顯れたとこ

ろ、又

佐野ノ浜

佐野停車場ヨリ三四丁



The Sano beach. Close to Sano Station.

佐野市場

は逍遙院殿の記に—廿二日佐野といふ所に輿かきすへたるほど、市人さはぎたるを見て「いづみなるさのゝ市人たちさはぎ此わたりには家もありけり」廿六日歸りに又さのと云ふ所のすこし道よりは入りたる方へ宗珀ゐるべして畫のやすみにかひつものなどとゝのへたるもめづらかになんしとゐるしてあり、是も亦舊き名所です、此記にすこし道よりは入りたる方とゐるしたる所は、今停車場を置けるところの佐野驛かと思はれます、又

佐野松原

は此驛の海道を云ふのでせう、八雲御抄幷に顯照の色葉集に、和泉國としてあります

歌枕　時鳥木末にきゐる聲聞ば過ぐやられぬ佐野のまつばら

慶永法師

夫木　冬の日にあられふりはへ朝たてば涙に涙こすさのゝ松原

定家朝臣

など其他夥多の古歌があります、寫眞は此浦の網曳の樣を採つたのです、又

佐野池

海道の左右に大池がありまして、泉州地方で名高いものです、恐く之が佐野の池でござりませう、今は其名を四ッ池と云ひます、景色の好いところであります。

妙光寺

も此驛にあります、當寺は大覺大僧正の草創、僧正は近衛藤原經忠公の息、始め嵯峨の大覺寺に入て密宗を學び、後に日蓮の上足日像に隨逐して、專法華唱題の行を修め、延文三年弘法の爲め南海道に趣かれましたが、其行裝は唯傘一柄を携へ、傘の中に曼陀羅を掛け、時々之を路傍に植て、題目を唱へて群生に勸めつゝ行きましたが、行き〳〵て佐野にいたりました、ところ貴賤を擧つて信仰歸依しまして、法を受る者數へきれぬ程、之が爲に一宇の堂を建立して、彼の曼陀羅を安置しました、今現存してゐる當寺の曼陀羅は即ち夫です、是より近傍の名所舊迹を御案内いたしませう、先づ名高い

蟻通大明神

から御案内いたしませう、社は佐野停車場を距ること十丁あまり長瀧村にあります、社格は村社、本社は東向き、拜殿、朱の鳥居あり、祭神は大名持少彦名命、末社は、五社の明神、住吉、多賀、愛宕等を本社の左に祭つてあります、四面林に圍まれ、貳町ばかりの馬場があります、例祭は舊曆の八月廿七日、當村の土産神で

すから、當日宵祭ともなか〳〵の賑ひです、鳥居に蟻通大明神の竪額がかけてあつて、頗る妙筆ですが、筆者は詳かなりません、寫眞は本社の正面から採たのです、開化天皇の御宇に初めて祭られたといふ言ひ傳へです、當社の緣起は、枕草紙に詳しく出てゐますから、事長うございますが抜抄きしてお慰みに供へます、又貫之家集の下にも、此神の事をしるしてございますから、つひでに夫も御覽に入れます

ありとほしの明神貫之が馬のわづらひけるに、此明神のやませたまふとて歌よみて奉りけんに、やめたまひけんいとれかし、此ありどほしとつけたる心は、誠にやあらん、むかしおはしましける帝の、只若き人をのみおぼしめして、四十に成ぬるをばうしなはせたまひければ、人の國のとほきにいきかくれなどして、更に都のうちにさる物なかりけるに、中將なりける人の、いみじき時の人にて、心なども賢かりけるが、七そぢちかき親ふたりをもたりけるが、かう四十をだにせいあるに、ましていとれそろしとおぢさはぐを、いみじうけうある人にて、とほ所には更にすませし、一日に一度見てはえあるまじとて、みそかによる〳〵家の内の土をほりて其うちに屋をたてゝ、それにこめすへて、

此ほらに人をば、ひとしらぬ上さまの藤棚はなかし、うたてに、中ぶりけるなり

蟻通神社遥拝所佐野駅

Aritoshi Jinja (Shinto shrine). A little more than half a miele bfrom Sano Station.

なるよしいひ、見るもはべりけれど、ものしらぬ人にてさかへやうなれば、みかどおぼしめしたづねて、使ひ入らせたまへり。

なと子にてもなりけんは、いと心かしこく萬の事しりたりければ、此中將わかけれど、さへありいたりて賢くして、時の人におぼす成けりむろこしの帝この國のみかどを、いかではかりて、此國うちとらんとて常に心見あらがひ事をしてをくりたまひけるに、つや〳〵とまろにうつくしげにけづりたる木の二尺ばかりあるを、これがもと末いづかたゞとひ奉たるに、すべてしるべきやうなければ、みかどおぼしめしわづらひたるに、いとおしくて、れやのもとにゆきて、かう〳〵の事なんあるといへば、只はやからん川にたちながらよこさまになげ入見んに、かへりてながれむかたをすゑとしるしてつかはせとおしふ、まいりて我しりがほにして、心見はべらんとて、人々具してなけいれたるに、さきにして行かたにしるしをつけてつかはしたれば、まことにさなりけり、又二尺ばかりなるくちなはのれなじやうなるを、是はいづれか男女とて奉れり、又さらに人にしらず、れいの中將ゆきてとへば、二つをあらべて尾のかたにほそきすはにをさしよせんに、尾はたらかさんを女としれといひければ、やがてそれを内裏のうちにてさしければ、まことに一つはうごかず、一つはうごかしけるに、又しる

しつけてつかはしけり、程久しうして、七わだにわだかまりたる玉の中とをりて左右に口あきたるがちいさきを奉て、これに緒とをしてたまはらん、此國にみなしはべる事なりとて奉りたるに、いみじからん物の上手ふようならん、そこらの上達部よりはじめて、ありとある人しらずといふに、又いきてかくなんといへばたほきなる蟻を二つとらへてこしにほそき糸をつけ、又それに今すこしふときをつけて、あなたの口にみつをぬりて見よといひければ、さ申てありをいれたゝけるに、蜜のかをかぎて、まことにいとほあなのあなたのくちに出にけり、さて其糸のつらぬかれたるをつかはしたりける後になん、猶日本はかしこかりけりとて、のち〳〵はさる事もせざりけり、此中將をいみじき人におぼしめして、何事をし、いかなるくらゐをかたまはるべきとおぼせられければ、さらにつかさ位をもたまはらじ、只老たる父母のかくれうせてすべるをたづねて都にすまゐする事をゆるさせたまへと申ければ、いみじうやすき事とてゆるされにければ、よろづの人のおや是をさしてよろこぶ事いみじかりけり、中將は大臣までになさせたまひてなんありける、さて其人の神になりたるにやあらん、此明神の

もとへまうでたりける人に、よるあらはれてのたまひけるなゝわだにまがれる玉のをゝぬきてありとほしともしらずやあらん

とのたまひける人のかたりし

貫之家集

きのくにゝくだりてかへりのぼりし道にてにはかに馬のしぬべくわづらふところに、道ゆく人々立とまりて云、これはこゝにいますかるかみのしたまふならむ、としごろやしろもなくしるしも見へねどうたてあるかみなりさき〳〵かゝるにはいのりをなんもうすといふに、みてぐらもなければなにわざもせで手あらいてかみおはし氣もなしやそもそ〳〵何の神とかきこへんとといへば、ありとほしの神といふをきゝてよみてたてまつりける、むまのこゝちやみにけり

かきくもりあやめもしらぬおほ空にありとしとは思ふへしやは

貫之

是等の事よりして後世旅人に神崇ありとて、當社は海道を背にして東向に建てあります。

冠池

蟻通神社の北壹丁許り海道の傍にあります、紀貫之落馬の古跡といふ傳へです。

近義の浦

此の最寄の北近義村大字脇濱にあります、風景絶佳、龍王の社があります石室です、世の傳へに依れば、欽明天皇の御宇に此浦より樟木を得、之を朝廷へ献じましたが、帝奇異の想ひをなされ、其木を以て佛体二軀を造らしめたまふ、其一体は吉野の藏王權現であるとのこと。

樫井戰場

是は佐野の停車場を距る一里弱の所の樫井村にあります、元和元年四月廿七日、紀伊國淺野但馬守長晟、八千の軍士を引率して、攝州大阪に向ひ、先陣は淺野左衞門佐、上田主水、多湖助左衞門等で、泉州の安松村まで押出して來た時、同國尾崎の吉田九右衞門が走來つて告げて云ふやう、明廿八日大阪の大野主馬助治房、三萬騎を引率して、但馬守出陣の跡を窺ふて討取んとの計略であるといふので、淺野の先手の大將九右衞門に

軍の手筈を尋ねると、九右衞門の云ふやう、此地に幸ひ舟岡山があり、又二つの池もあり、四方皆水田であるから、最も守戰に利はあるなれど、人馬の往來が自由でないゆゑ、若も進退度に當り、變化氣に應じて、快く一戰しやうと思ふなれば、陣を信達村の懸岸の上に張て、樫井川を前に當て戰ふに如く事はないと云ふ、三將之を聞て、夫こそ然る可れとて、急に進んで其所に陣を張りました、南軍の勇將は、上田主水、龜田大隅、多湖助右衞門、横江平右衞門、水谷又兵衞、高河原小平太、横關新三郎等です、上田龜田共に武名を世に知られた者、大阪方大野主馬助の先手は、既に佐野村に陣を取てゐました、先手の大將は塙團右衞門直之、淡輪六郎兵衞重政等です、團右衞門は聞ゆる猛將ですから、戰ひの始るが否や、堅横無盡に切て廻り、敵あまた討ら、多湖助右衞門の放つ矢、團右衞門の額に當る、之が爲に馬より下に どうと落ましたが、八木新左衞門馳來つて首を取る、淡輪は團右衞門の戰死を見て、今は斯うよと思ひ、四方八方に斫て廻り、終に討死して、首を永田治兵衞に取られました、次の大將岡部大學も、創疵あまた被りたれど、其臣岡部金丸等と共に、義を重んじ命を輕んじて、短兵急に戰

ひましたので、さすがの淺野勢も、今は氣疲れ息絶えて、覺ぜず南の河原まで引退きましたが、仙馬守の家臣に小野慶雲といふものがあつて、老功の勇士でありますが、甞本の諸士を勵して、馬の轡を并べて一度に馳立てました、大阪方此勢ひに辟易して遂に敗北しました、此時大將の大野主馬助は、具塚の願泉寺卜半の許に在て、酒宴に精神を脱してゐましたが、先陣既に敗れたりと聞て、遽かに馬を進めましたが、淺野勢早くも椦阪に引揚げましたので、今更後悔すれども其甲斐なく、故に火を樫井の人家に放つて、大阪指して引返しました、此時岸和田の城主であつた小出大和守が、師を出して大野を逐ひましたが、主馬助一戰にも及ばずして大阪の城へ逃入りました、此戰に淺野方先手の三將の手に、大阪方の士分の首を十三得たといふことです、是を大阪の役の樫井合戰と云ひます、此戰さに討死した、塙直之、淡輪重政の

兩將の墓

は俱に樫井村の入口の路傍にあります、何時誰が言ひ誤りましたか、塙團右衛門の方は豐臣方だと云つて、石の玉垣をも造り、里人等朝夕參詣して香華が斷にません、淡輪六郎兵衛の方は德川方だと按斥して、誰吊ふ人もなく、墓に玉垣もなく、見すぼらしい姿で立ております、同じく大阪方で秀頼の爲に忠死を遂げた兩勇將に、此幸不幸のあるは妙な事です。

舊家中村氏

は佐野停車場より二拾丁ばかり東に當る熊取村大字御門に住居してゐる、今より八百年の昔、後白川法皇熊野へ御行幸の際、同氏の宅を行宮となしたまひ、其時立られた御門今に在存してをり、其縁由に因て、以前は御門村と書たのを、舊幕の頃其筋の沙汰に依て五門村と改めました、同氏の庭に當時の紀念だと云ひ傳ふる一株の老松がありますが、枝葉繁茂して千歳の緑りいよ〳〵色濃く、其幹の大ひなること世に稱に見るところです、是より名高い犬鳴の方へ御案内いたしませう、都合に依て、前に御案内申した、蟻通の神社も、その道でございますから、序に御參詣あるが宜しうございます、佐野から犬鳴へ行きますは、熊取、大久保、土丸、大木等の村々を經、又日根神社、慈眼院等の著名の神社佛閣のあ

る所をも過りますから、序に御案内いたしませう、先づ

熊取

此處も古い土地で、日本後紀に、桓武天皇延暦二十三年の冬十月甲辰、和泉國に行幸あり、乙卯に熊取野に遊獵したまふと載せてあります、又土丸には

土丸城蹟

があります、此城は楠氏の一族が貞和中に築く所、日根野氏の感狀に其事が載せてあります、夫から大木には

火走神社

といふ舊社があります、延喜式内の神社で、今は瀧明神と云ひます、此所の土地神で、例祭は舊曆の八月廿四日、昔は此神を祭るに男巫火の上を走る例しゆゑ、火走の名があるのです、此村の名産は楊梅で、其味ひの甘美なること他に類ひはありません、夫から

日根神社

是は日根野村大字日根野にありますが、此所も佐野から犬鳴へ行く道に沿ふてあります、當社は泉州五社の一つで、日根野惣社、即ち生土神です、祭日は舊四月二日、延喜式内の神社、社格は鄕社、祭神は鷗鷺萱萱不合尊、聖武天皇の御宇に此に觀請あつたのです、末社は、住吉、祇園、加茂、熱田、春日、稻荷、一名を大井堰大明神と云ひますが、是は大井堰川が當社の南を流れてゐるからです、此川は兩岸岩石累々として松蒼繁茂し、其中を流るゝ水聲淅瀝として、賊に神さび心清みわたる靈地です、川の中に牛石といふ名物の石があります、又御手洗川は當社の右を流れてゐます。

比賣神社

日根神社の鳥居の南にあります、是も延喜式内の神社です、三代實錄に、貞觀元年五月七日壬戌、和泉國地賣神を官社に列すとあります、又同書に同八月十三日丙申無位比賣神に、從五位上を授くとあります、一説に芽淳宮の舊跡が此社より程近い故、此神は衣通姫を祭つたものといふ、

溝口村の前にあるゆゑ、又の名を溝口大明神ともいひます。

慈眼院

是は以前は日根神社の神宮寺でしたが、維新以來分離しました、本堂、二層塔、藥師堂、不動堂などありますが、殊に當院の名物は門前の姥櫻です、奇代の大樹でして枝葉四方に蔓延り、花の時は爛熳として、綺麗壯觀、實に人の目を驚ろかします、之を觀んとて、近鄉近在より夥多の人が群集して、西行ならば、群つゝ人の一と櫻に咎を被せやうな騒ぎです。

日根野城跡

是も同所の中筋村にあります、日根野氏累代の家地ですが、今は僅に溝洫ばかりが殘つてゐます。

茅渟宮舊跡

是は日根神社より程近い上鄉の中村にあります、土人が衣通姫の手習所といふのは誤りです、今より百年前までは小さな社があつて、社の傍に池があり、封境は方一町ばかり、毎年正月と七月に燈明を挑げたといふ

事ですが、今は壞つて田となし、社も迹形なくなつて、所の物墓となつて仕舞つたのは、實に嘆息のいたりです、昔の名殘りは僅に小池のみを遺し、其傍に柿の木一株植てあります、日本紀に、元恭天皇八年春二月、衣通郎姫奏じて言へらく、妾常に王宮に近づいて晝夜陛下の威儀を視んと思ふ、然るに皇后は則妾の嫉なり、妾に依て恒に陛下を恨みたまふ、亦妾之を苦しむ、妾を以て冀くば王居を離れて遠く居しめんと思ふ、然らば皇后の嫉意少しく息ん云々、天皇即ち宮室を河内の茅渟に(和泉國の此地が即ち夫です)造り、衣通姫をこゝに居らしめたまふ、茲に因て時々日根野に遊獵したまふ、同九年春二月、秋八月、冬十月、皆茅渟宮に幸したまふ、同十年春正月茅渟に幸す、於是て皇后奏して言さく、妾毫毛ばかりも弟姫を嫉むにあらず、陛下時々茅渟に幸したまふこと、是百姓の苦みなり、仰ぎ願くは車駕の數を宜除したまへとありければ、其後は希有に幸ましゝけり、同十一年春三月茅渟宮に幸したまふ、衣通姫歌ふて曰く

等虖辞陪邇、枳彌母阿閉柳毛、異舍儺等利、宇彌能波摩毛能、餘留等枳等枳弘

天皇之を聞たまひて、衣通姫に宣ふやうは、此歌他人に聽すべからず、皇后聞たまはゝ大に恨みたまはんと、故に時の人濱藻を號して、奈能利曾毛といふなり云々と、是に依れば全く此處は茅渟宮の舊趾に相違ありません、是よりいよ〳〵犬鳴へ御案内いたしませう。

犬鳴山七寶瀧寺

は佐野驛を距る事貳里半ばかり、大土村大字大木にあります、當山は泉州第一の勝區、只其地の幽邃清秀他に其疋敵なきのみならず、其行く路も流に沿ひ谷を廻りて而白く、半里程前に間瀬峠といふ所がありますが、是は今より百年前、間瀬氏某が獨力を以て開鑿したところ、同氏は頗る大力、單身鶴嘴を振つて此道を作つたといふ、吾々登臨者の爲には、實に大恩人です、此峠を越すと、溪は殊に奇狀を呈し、水は尤も綠色を添へ、格別風景が勝れて見ます、扨其山を概括に形容すれば、巉崖危磴、蓁樹茂密とでもまうしませうか、大木より登ること二十町、路傍に梵字を鐫た標石が、一町毎に立てあります、山中に瀧が都合七ッあつて、金銀珠石等に擬へてある所から七寶瀧寺の名が起つたといふ事です、瀧其

犬鳴山七寶瀧寺

The Inunaki Mountain. About six miles from Sano Station.

滝は成る可く間隔ひろく、古樹老木其間を埋め、色々に繽紛し、之を麓より眺め、之を嶺に攀ぢる。

の他の名勝は、駅から、怪岩奇石と共に、路の所々に、飯場、茶屋、其の流れ、其の瀧

至るまで、變幻百出で愈奇、一歩一歩佳境に入り、言の云ふべき無く、筆の寫す可きなし、唐土の峨眉天台の勝はいざ知らず、我邦の神懸耶馬溪の奇も、是には爭でと思ふばかり、所々に楓樹の大木と、櫻の古木がありますから、秋の紅葉狩は第一、夏の避暑は第二、春の櫻狩は第三で有うと思はれます、牛瀧の紅葉も當山に比べれば、其幽邃と清秀の點にれいては、一着も二着も輸けでございます、始めに泉州第一の勝區と賞贊しておきましたが、恐く天下有數の勝區でございませう、是より名勝を一々御案内いたしませう、本堂(山上にあります、中尊不動明王、長壹尺八寸、役行者の作、左役行者、右弘法大師、宗旨は眞言古義です)、燈明嶽(當山の絶頂を云ふのです、西の海面を暗夜に渡海する船が方角を失ふ時、當山の不動明王を念ずれば、此峰に燈明が輝くといふ言ひ傳)、兩界瀧(登山の初めにあります、之を口の瀧ともまうします、頗る大きく狀も異つてゐます)、塔の瀑是は兩界の瀧の上にあつて、二の瀧とも云ひますが、是も奇觀です)、辨財天瀧又其上にあつて三の瀧とも云ひます)、固律宮瀧(又其上に在て四の瀧とも云ひます)、奥の瀧又其上にあつて五の瀧とも云ひます)、千手瀧(又其上にあつて六の瀧とも云ひます)、布曳瀧(又

其上にあつて七の瀧とも云ひます)、瀧は一つ毎に狀を異にし、孰も特有の奇觀を呈し、又其瀧の異るごとに山の態も變り、互ひに妙を競ふ有樣ですから、前にも賞贊した通り、言語に絶した風景です、左に曲屈する瀧の流を見、右に奇石怪岩を攀て躋るのですから、都會に住んで人力車の役介にばかり成てゐる案内者等の足では、頗る困難な譯ですが、夫が少しも疲勞を感じないで、登臨が出來るのですから、夫に因ても景色の好いのは分ります、昔日九條殿下植道公此山に登臨して、七ッの瀧を見て左の和歌を詠じられたといふ事です

おもひきや七の寶の瀧に來て六のにごりを清むべきとは

東覗、西覗(俱に當山の行場、本堂の上にあります)、笈掛石、四寸岩(登山の道にあります)、屏風岩(當山の北にあります)、行場石(役行者の修行した所、當山の奥にあります)、天狗松(燈明嶽の西にあります)、風穴(奥の院の上にあります、四時風を起します)、天狗(本堂の下にあります)、連理枝(本堂を捧げてゐるやうです)、大黑石(口の瀧の所にあります)、蛇腹(本堂の上にあります)、梵字石(當山に四十八箇あります、是は志一上人の建たのです、山中に毒虫蜘蛛のないの

は、此密卵の奇特だと云ひ傳へてをります)、石綿(奥の滝の傍にあります)、犬の墓(道の左り十間許りの官女志津墓、汨の滝共に道の傍にあります)、犬の墓(當山の寫真は奥の院を小高い所にあります、石面に梵字が彫てあります)、當山の寫真は奥の院の前に舞臺が出來てゐて、左に布曳の下より見上げて採たのです奥の院の前に舞臺が出來てゐて、左に布曳の滝を眺み、前に其流を瞰し、舞臺の周圍は楓と櫻で充され、前の溪は松杉、又は櫻楓が生茂り、積翠滴るが如く、滝の音水の流、澎湃潺湲爲に耳目を清涼ならしめ、肉食の人をして忽ち羽衣の客たらしむる一仙境です、一路二十町、奇絶妙絶の風景を見つくした上に、此又僊境を設くるとは、造化の工も實に極點に達したと申して宜しうございませう、是より又小説的の當山の緣起を話しませう、抑も當山は役優婆塞草創の地であつて、自作の不動尊を本尊に安置してあります、此山を犬鳴と號けましたは、昔獵師が有て犬を牽て此山に入り、一頭の鹿を狙ひましたが、其傍に巨きな蛇が居て頭を擧け、彼の獵師を呑ふとしました、獵師の意は鹿にあつて是を知りませんので、犬は數聲を發して危急を其主に告げましたが、獵師はまだ其由致を曉ることが出來す、鹿は犬の吠るに驚いて逃去りました、獵師は獲物を失つた腹立紛れ、罪を犬に歸して山刀で

斬りますと、斬り落した犬の首は忽ち飛上つて、木枝にゐる蛇を齧殺しました、是に於て獵師は其犬の鳴た事の妄りでなかつた事と知りました其事を聞た人々、犬は不動の使獸、是偏に明王の靈驗だと申しました、獵師大ひに感嘆し、即て此寺に入て髮を薙り、永く殺生を罷めたので山の名を、犬鳴とつけたといふです、又此寺の一名を白雲院とまうします、昔淡路の小聖といふ者があつて、屢々禁闕に上下して雲客と進隨すは、宮嬪の志津といふもの、此小聖を見て戀慕の念を發し、心をりました、宮嬪の志津といふもの、此小聖を見て戀慕の念を發し、心をつくして言寄りましたが、小聖之を避る爲に此に遯れて身を隱さうとしました、然るに志津女其跡を逐ふて山深く登つて來ましたが、其時忽然として白雲たなびき、小聖の行方を匿しました、志津女悲歎に耐へませんで、路傍に泣死にしました、時の人之を哀んで、其處に埋葬り印の噴を建ました、今に於て此噴に雲が掛れば必ず雨が降るので、志津の餘雨とまうします、白雲が小聖を掩映ふたのは、全く不動尊の擁護だといふので、是を院號としたのです、南朝の正平年中に、志一上人といふ名僧があつて、紀州粉河の產れですが、顯密禪の三宗を兼修め、土丸の城主橋本判官正

高を勸修めて堂宇を再營し、寺院を經始しました、實に此山の、中興です、和泉式部此山に登て

山里はねられざりけり夜もすがらまつふく風にねどろかされて

さすが女姓の歌とて、僅に其淋しさのみを詠じましたが、俳し幽邃の趣はつくしてあります、辱知藤澤南嶽翁先年此山に遊れて、記文と詩がございますが、其靈筆、能く實況をつくしてありますから、案内者の筆舌の不足を補ふ爲、左に掲げて一覽に供へます

遊犬鳴山記

泉南之山。可遊者二。北曰牛瀧。寺稱威德。南曰犬鳴。寺稱七寶瀧。皆溪湍作趣。所以命瀧字也。世人概甲牛瀧。乙犬鳴。而雅士則倒其甲乙云。壬辰初冬。里井九峰勸余遊犬鳴。使姻族田中子纓來迎。乃携木村君與西尾士禮往遊焉。九峰宅在佐野湊村。距山四里而近。早朝命車五輛。聯走山村。自大久保村。稍々入山。至土丸村。則溪山已佳。一澗送。一溪迎。一嶺去。一峰來。徑險則步。且步且車。收拾小春風色。盡入有聲畫中。勝情太適。至大木村。村東路岐。右則走紀之粉川者。余輩取左而行。到

溪橋停車。九峰曰。是犬鳴第一橋也。從此石徑不容車。皆步。小杜風致可想。溪幅十餘步。一大石渠也。激泉湍湃。雪渦漲崖。過橋則景致頓殊。傍有小瀑。俗呼兩界瀑。蓋仙凡分界之處也。過第二橋。數步巨巖當徑。徑即絕矣。余愕眙嶷立。君與進指示下脚之方。乃陷岩稜以陟。苔滑鞋冷。已踰之。徑不甚艱。板橋縫溪。溪左右轉。轉々殊觀。有塔瀑者。可觀。左崖磴上有二小石禍。一爲獨夫。一爲義狗。事載在泉州志。過第七橋。巨堂當面。堂安不動明王像。堂前又有瀑。巨巖突兀。洄洑万狀。觀最美矣。又從堂左小蹊行。數十步枵一瀑。長二丈餘。亦可觀也。觀畢。踞堂前胡床。九峰汲澗泉煎茶。茶氣芳烈。心膈爽絕。時有囮鳥者。茶頃得二小禽。亦添興趣。已而腹枵。乃收茶具。轉到僧房。房在第四橋北崖上。即七寶瀧寺也。與燈明嶽相對。滿目秋樹。紅紫可愛。而溪則聞轟轟耳。環坐開行厨。余笑曰美酒佳肴。以賞佳景。自有此山水。豈有爲此遊者乎。時亦來話。問七瀑。則曰兩界爲第一。塔爲第二。辨財天第三。而固津喜第四。皆溪路所觀。曰千手。曰布曳。曰奥。皆在山岩崎嶇之間。七寶之名。實由之。而橋亦七。又曰。寺上數町。土泥消。山骨露。律硫之奇。不可名狀。殆與和州金峰相似。寔羽流苦行之地。余聞之。魂飛神動。欲窮其

勝。然短晷慮歸途。故止焉。又曰。淡之小聖。避姿女于此。與彼獵夫事。不足陳于大人前。獨正平中。南朝忠臣城於岸土丸雨山者。橋本和田諸士。來往此山。今明王堂即正高所新修。縷々架話。亦助興情。且排靈異而推忠士。似有見者。時日加未。乃與君興士禮剳與先歸。溪山之美。實爲一州之冠。以余所觀牛實不及犬哉。秋樹清澹。山雲澗嵐。何地無之。而今殊覺其奇。乃記以供雅士之觀。

五十川劒堂評。犬鳴山勝景。一々叙去。以橋爲其脉絡。一絲不紊。令人一讀神動。

義狗墳

犬鳴山深秋色老。落葉埋蹊濕不燥。左崖時見義狗墳。墳上荒草無人掃。聞昔獵夫夜入山。手率此狗過溪間。竄猪犇鹿不可迹。意倦且踞冷石眠。飛瀑璧岩激如咽。欽月帶霜骨亦寒。巨蛇懸在老樹杪。窺人饞口口流涎。狗眼如炬早認之。四脚地號吠酸。聲々悟主主不悟。愕視却訝狗即癲。刀光一閃斫狗首。首忽飛揚咋蜒。蜒蜒忽陸地上死。始知狗也救險艱。悔恨悲嗟抛世累。投身山寺了宿緣。死猶救主眞義烈。烏龍張然家狗黄蒼張彪家狗何足說。

獸也雖微事則偉。片石記歲長不滅。近世邪說亂々。薄俗亡父又凶君。願驅海内數倫徒。盡入此山拜此墳。

又寺僧の語る所に依れば、此山の縁日は例月十五日と廿八日、一年中で殊に盛んな法會は、舊一月の十四日十五日、同三月廿六日廿七日廿八日、此三日間は大護摩、舊七月十四日十五日は盆會、講中は大阪、堺、和歌山、神戸、兵庫、其他丹波、播摩、泉州等に澤山あります、現在の境内は三町七反貳拾七歩、夫から舊領主岡部家より寄附の田地が一町五反ある、一昨年から僧房の建築に着手して、本年中に落成の筈、其費用金高三千五百圓、此金は講中の寄附と山林の木を伐て賣た代價で辨じるとの事、鉄道が通じて登臨者の多くなると共に、僧房の普請が出來上るのですから、登臨者の爲にも寺の爲にも双方の便利です、可惜天下の勝區も從來は道路の不便の爲め、或る佛法の信徒の外は、風士雅客がでつ〳〵登臨する位でしたが、鉄道の便に依て、諸府縣の紳士婦女も自由に登臨するやうに成りますから、いよ〳〵犬鳴の勝が天下に顯れませう、案内者も頗る滿足に思ひます、當山は佐野の驛には限りません、樽井からも岸和田からも里程は大同小異、大木までは人力車で行けますから、何樣

な足弱の人でも登臨が出來ます、是から元の佐野へ戻つて、樽井驛へ進み、金熊寺砂川其他の名勝古迹を御案内いたしませう佐野驛から樽井まで、四里餘あります、此間、嘉祥寺、吉見、岡田の村々を經ます、其中

岡田

は樽井停車場より十八町東にあたる所、西信達村の内にあります、同所に里引の神社があつて、其境内に鰈が淵といふがある、是は昔後鳥羽上皇熊野行幸の時、二尾の鰈に松葉を描いて放れたと云ひ傳へ、今鰈石といふ寄石があります、此縁に因て此岡田沖で漁れる鰈は、脊に松葉の模様のある一種の名産、世に岡田鰈といふは是です、此岡田浦は、貝塚佐野につゞいての湊で戸數人口も多く、頗る繁昌の地です、樽井へ行てから御案内しても好けれど、つひでに此所で

樽井停車場

は垂井驛の北口の所にあります、例に從つて

樽井

より御案内いたしませう、當驛は、現在の戸數三百九十七戸、人口千八百二十四人、戸數人口少あうございますが、資産家の多いところです、當驛第一の産物は、紋羽と金崎アッシです、紋羽の製造高は一ヶ年三百万反、一反の代價凡そ壹圓、金崎アッシ百反、一反代價凡そ七拾錢、併し總て同驛で製造するのではありません、同驛尾崎近傍の在々で製造して同驛へ持寄り、同驛で賣捌くのです、販路の重なる土地は、大阪、神戸、同驛に樽井紡績會社が新設されます、資本金は貳拾五万圓、發起人は二十名、株主は、垂井、貝塚、岸和田、堺、大阪等にあります、當年の秋工事に着手して、一ヶ年の後に開業の筈です、此名産紋羽織の由來が、十六年七月の工報に出てゐますから、左に掲げて諸君の御參考に供へます、此工報の云ふ所に依れば、是が創造者たる大津屋新助の妻の爲に、當驛を始め尾崎の村々、此紋羽織の爲めに利潤を得る人々が協力して、一大紀念碑を建ても然るべしでせう、又紋羽織も一時疎製濫造に流れた事が有たと見ますが、今日の盛況を保つところを見ますと、當業者の勉强に依て改良したものと思はれます。

文派織、十六年七月工報

安永年間和泉國日根郡樽井村に大津屋新助(現今絶家)と稱する者あり、其妻紀州那賀郡井白村産にて文派織を能くし自ら紡績したる綿絲を以て之を織出し、其の販賣を試みたるに價格紀州産と軒輊あることなし、隣近相倣ひて織事漸く廣まる、文化年間に及び尾崎波有手の二村に於ても盛に之れに從事するに至れり、而して其の業終に織元出機の二に分れ、織元は別に工場を設けず原質を各家に交付し、出機は若干の賃銀を得て之を織る(當時の賃銀詳かならず現今は壹段七八錢の外に出でず)、其の織物は文派屋に渡し之が整理をなさしむるものとす、又其の原質たる縱絲は一切紀州綛を用ひ横絲は打綿を數村に交付して紡績せしむるものとす(當時の賃銀詳ならず現今は目方三百五十匁を紡ぎて五錢乃至七八錢を得)、天保年間幕府令して奢侈を制し絹布の類一切之が使用を許さず、是に於て、該業俄に隆盛の色を顯し營業者の數、日を逐ひて增加するため出機の織工數村に起り、紡績の業手は男里貝掛箱作淡輪深日谷川小島孝子等の諸村に滿ち、其の織元たる樽井尾崎波有手の三村は一般に人口を增殖し、就中樽井村の如き安永度には貳百余戸に滿たさりしものも、天保度に及ひては四百五十有余戸の多きに上れり(明治十六年の今日に在りては

五百拾四戸の大村をなすに至れり)、通商互市の道一たび開けてより以來金巾の輸入年を逐ひて增加し、爲に該業の進歩を妨くる鮮少ならざるのみならず、强靭にして久きに堪ふるの紀州綛は其の價不廉なるがため遂に原質たるの地位を退けられ舶來の綿糸之が代用を爲すに至り爾後漸く鎭臺兵の洋服の裏に用ひられ若くは支那輸出の料となるを得たりと雖も稍舊來の面目を保ち難きのみならず、其長所たる固有の良質は今や殆ど地を掃はんとす、數村組合法は從來三箇村を團結し、各村三名の年行司を置き、毎歲一日相集會して專ら織工の賃錢を一定し、昔時に在りては此組合に入らざれば其業を營むを得ざりしも、今や此遺制瞭れて、往々濫造粗製の弊を此の組合外に發出するに至れり、文派の種類は長尺(三丈)を以て壹段となし七拾錢より五拾錢迄)、の二種とす、原質の仕入地は舶來品て壹段(九拾錢より壹圓廿錢迄)、(並物貳丈五尺を以を捌く、大坂若くは東京、北國、九州、阿波、西京、大津等の各地方とす。又煉瓦製造株式會社がありまして、其他二箇所目今出願中です、其他に當驛の名物は蜊と海苔です、蜊は四月ごろを採收の期とし、海苔は三月より四月へかけて採收の期といたします、當驛は紀州根來街道で、根來

へ僅々三里でございます。

山の井

は當村内にあります、是は日本書記に見えし山の井の舊迹です、書紀に神武天皇五月丙寅朔癸酉の日、軍茅渟の山城の水門に至―亦の名山の井の水門、茅渟此に智怒と云―と出てありますが、此所に山の井の舊迹があるによりますと、山の井の水門は、則ち此樽井の濱で、樽井の名も山の井から出たものと思はれます、樽井の樽は、足る―水の多く美しき心よりいで―足井と云つたのを、後世樽井と書改めたのかと思はれます。

鄰蹟山林昌寺井に鄰蹟岡

當驛より南へ十二町、岡村にあります、四國八十八ヶ所の土を運んで山を築き寺を建たのです、宗旨は真言、舊三月廿一日と舊六月廿四日が法會で、參詣人が澤山あります、當寺は山號に顯してある如く、鄰蹟の名所で、夏の始め頃、寺は錦で包まれたやうです、又鄰蹟岡も此村の中にあります、村の北の平山、縱十五四丁、横三四丁、滿山の鄰蹟尤も壯觀

です、是より名高い、砂川、金熊寺、信達神社等を御案内いたします。

砂川

は樽井より東へ去ること二十三四町許り、此邊一帶の兀山ですが、一望白砂漫々、四時雪の積つてゐるやうに美くしく、其砂が雨の爲に流落ちて、自然に川を爲し、時々其の姿を變へ、さながら明日川の淵瀬定まらぬが如く、昨日の淵は今日の瀬となり、實に一奇觀です、此邊一面に鄰蹟がありますから、夏の始めに遊べば尚更妙です、此處より遙か向ふの峰にれ菊松が見えます、お菊の履歴は波有手驛で御案内いたします、砂川の寫眞は採りま

The Suna-Gawa (Sand river). About two miles from Tarui Station.

砂川ノ景
樽井停車場ヨリ廿三四丁

したが、其奇景の十分一をもつくす事は出來ません、是より一町足らずあと戻りすると

海會宮舊趾

があります、海會寺は行基の草創、天正の兵火に罹つて泯滅し、今は礎のみ殘つてゐますが、海會宮の池は現存してをります。

金泉山長慶寺

海會宮の南の峯にあります、當寺の本尊如意輪觀音は、本海會宮の池の中島に在たので、海會寺の一堂です、幸ひに兵火を免れて存してゐたのを、南の峯に改め移して、長慶寺としたのです、此寺眺望に富んでゐますが、林羅山の諸集に、能く此寺の風景を盡した一段がありますから、左に鈔錄して、案内者の舌に換へます

元和七年孟夏十九日宿旅泉州信達村、舍主導余俱升觀音堂、堂在小阜之上、去村三四百歩、四望則海山在眼、葛城之白雲猶餘晩櫻之殘色、金剛山之雲霞緬懷楠氏旌旗之閃爍、大阪之白雉和田之一驛亦在莽蒼之中、淡路浪高也疑長鯨之噴氣、鳴戸霧開也眺退之飛風云々

信達村

前の羅山の文にもある通り、此所より近です、おか〳〵の大村で今は西、東の兩村に分れて、銀行、警察分署、郵便局などもあります。

御所村

此所も信達の中です、中古の天子熊野へ行幸の時、必ず當村へ御止宿あるゆゑ、此名があります、後鳥羽院御幸記に――建仁元年十月七日、信達の宿廬戸の御所に入りたまふ、萱葺三間の屋例の如し、戌時許り召されて御前に參り、和歌二首を奉る

曉初雪　いろ〳〵の木の葉のうへにちりそめて雪はうづまずしのゝめのそら　愚歌

山路月　袖のしものかげうちはらふみやま路もまだすゑとをき夕月夜かな　希有

讀上げて人々詠吟して退出す、內府宰相中將、大貳三位中將、下官長房、

定通、通方、信綱、家長、清範等――此記は定家卿の草稿故、愚歌と云ふは卿の自詠です。

一乘山金熊寺

今の信達神社は、以前此寺の鎮守で、金熊權現と號し、金峰熊野を併せ祭つたのですが、維新後に分離したのです、寺は東信達村、大字金熊寺にあります、佛殿(元の金熊權現の下壇の所にあります、本尊如意輪觀世音、役行者堂(本堂の右の方にあります)、藥師堂(本堂の左にあります)、辨財天社(本堂の左にあります)、當寺の寫眞は本堂より信達神社をかけて探たのです、東草集に當寺堂供養の願文が乘せてありますから、和譯して左に掲げます

泉州信達莊金熊寺の本尊如意輪觀世音は、役行者靈夢を感じて、金銅六寸の尊像を納め當寺に安ず、幸に正安元年正月廿八日の火難を免れたり、人咸奇なりとす、然るに今造營に及び修補する所は、本堂、藥師堂、鐘樓、中門、金銅三尺鏡面に觀音像を鑄顯す)、兩界の曼荼羅等なり、當山の鎮守の神は、行者金峰熊野の兩神を勸請す、故に金熊寺と號す、應長二年三月二十八日敬白、

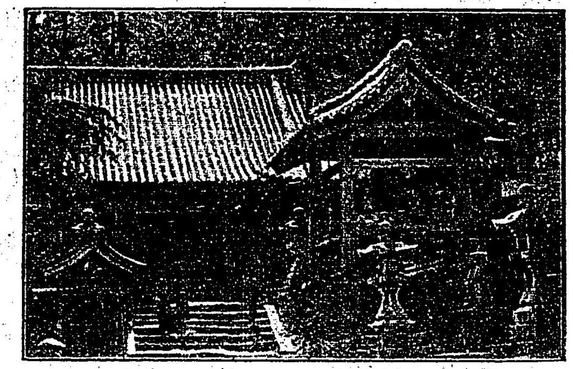
繁を省いて要文をのみ探る

信達神社

金熊寺の境内にあつて、今は別に社地を存してゐます、祭神は神武天皇、祭日は四月三日、舊金熊權現の祭日は舊九月十六日、兩日とも非常の賑ひです、舊三月十八日も祭日で、是も多くの參詣があります、當社の事も東草集に、正保三年本社建立の記が載せてありますから、是も要を摘んで和譯して左に掲げます。

泉州日根郡信達庄の惣社、金熊大權現は舊男神社の垂迹にて、神は神日本磐余彦尊なり、延喜式神

金熊寺ノ景
樹井停車場ヨリ一里拾四町



The Kinyuji (Buddhist temqle). About three miles from Tarui Station.

明帳に男神社二座とある其一座にて、(噴唫郷の物社(噴唫郷は男の郷の事)人皇の第一なり、彦五瀬命と共に、天下を撥下げ、八州を有たれたる神功昭々たり(中略)後世金峰熊野の兩神を合祀りて、之を社號とも爲し又村名とも爲せるなり、毎歳神輿樽井の濱に行幸するは、男神社の神蹟たるが故なり、正安中の火災を免れ、後天正中紀州根來征討の時兵火に罹る云々、

此記は正保五年二月某日、祭主矢野家次が書たのでず、是に依て見ますと、此社の傳へに、當社は南朝の時代に垂井より當所へ移したといふ説がありますが實に近いやうです、當社の神体は木像で、見たところは天部の像のやうに思はれますが、何しろ千有餘年を經たもので、神武天皇の御尊体といふのは、是が第一古い物には相違ありませんから、好古學者は十分に研究すべき木像のやうに想はれます、當社内に、古木の糸櫻や山櫻が澤山ありますから、彌生の頃はさぞ壯觀でございませう。

疫神社

是も金熊寺の境内にありますが、延喜式に畿内の堺に十所の疫神あり、

(其一)泉州佐野町四十里一リ目　梅林寺坊車停非梅林

金熊寺の梅林

和泉と紀伊人との堺にあるこの古社は、一座あるのは、此神社なるべし

The Plum groves of Kinyuji. About three miles from Tarui Station.

當社の裏手の谷は一面の梅林で、花の頃は爛漫清奇

香雪溪を埋めて一目千本、否、万本、和州の月が瀬につゞいての一大勝地でございます、是までは往來の不便で、岸和田貝塚あたりの人よりか遊ばなかつたのですが、是より南海鐵道の便を借りて、堺、大阪、其他の地方からも續々觀梅の客が出かけてやがて、花の匂ひと共に芳しい名がいよ〳〵四方に聞ゑませう、案内者がまゐつた時は、不幸にも夏の始めで、青梅の時でございましたから、「青梅の香は又花にまさりけり」といふ馬琴の俳句を口吟み、ヤア、大層な梅だ、一目千本どころか、是は一目万本だ、花の頃に砂川の見物、金熊寺、信達神社の參詣を兼て來たら、さゞ壯觀であるだらうの贊辭を殘し、寫眞も青葉の鼎色を採て來ましたから、香世界の眞面目の万分一もつくすことは出來ません、いづ

金熊寺梅林

れ疎影横斜暗香浮動の時に再遊を試み、十分に花神の形容を寫して、案内記の增補をいたしませう、此處は樽井停車場より一里十四町ばかりの路程です。

男里村

樽井驛を南に距る五町餘りの處にあります、昔の男卿です、此村の濱乃街道筋の左手の松林の中に、小さな社があります、是が

男神社

です、延喜式内の神社で、俗に天神の社と云つてをりますが、此所は五瀬命が矢瘡を洗ひたまひし、男水門ですから、後世社を建て五瀬命を祭つたのです。

男水門

は樽井驛を西南に距る三町ばかり、南海鐵道線路の傍にありますが、現今は其形迹なく、總て田圃と化し、僅に松樹の生立し一小丘と小川のあ

るのみ日本紀に

神武天皇五月丙寅朔癸酉日、軍至茅山城水門、薄(亦名山井水門、茅渟此云智怒)時五瀬命矢瘡痛甚、乃撫劒而雄誥曰、慨哉大丈夫被傷於虜、午將不報而死耶、時人因號其處曰雄水門(舊人記同上)

とあり古事紀に

神倭伊波禮毘古命與登美能那賀須泥毘古戰之時五瀬命給御手負登美毘古之痛矢串故爾紹吾者爲日神之御子向日而戰不良故負賤奴痛自今行廻而背負日以擊、期而自南方廻幸之時到血沼海洗其御手之血故謂血沼海也、

從其地廻幸到紀國男水門而詔負賤奴之手空死乎爲男建而崩、故號其水門謂男水門也、陵即在紀國之竈山也、

是に依て見ると雄水門は紀州に在るやうですが、泉州志其他の學者の說に因れば、雄水門は泉州、即此地です。

男森大明神

は、男里の東南樽井村より五町ばかりの所にあります、延喜式に、男神社二座とありますが、今濱の天神と稱へてゐるのは誤りで、男里の男神

社は五瀨命、當社は神武天皇を祭つたのです、後世八幡、春日の兩神を併せ祭つたものと思はれます、是より壹哩余を走つて、尾崎驛にいたります。

尾崎停車場

は、尾崎驛の東南にあります、例に依て

尾崎

より御案内いたしませう、尾崎驛は現在の戶數三百六十六戶、人口千八百二十四人、官衙は、警察出張所、郵便局等があります、銀行は岡田銀行支店があります、此地は古くより南海四國の船がゝりであつて、此海道の一都會です。

西本願寺御坊

當驛の中にあつて、一名を尾崎御坊といひます、始めは一草堂でありましたが、或時一老人が來て笈を置いて行きました、迹で夫を開いて見る

と、其中に蓮如上人染筆の六字の名號、善導大師釋文の一軸等がありました、然るに慶長三年願主桑山伊賀守の家臣石田次郎左衛門といふもの、眞宗に歸依して此地に新に十間餘の御堂を造立し、前の名號を本尊とし、之を本願寺十二世准如上人に寄附して、本願寺の懸所としたのです。

苑砥川

は尾崎停車場より十八町ばかり南に當る、双の名を島取川とも云ふ、河の原は自然田村の奥金龍寺の奥より、三流相合して男水門に入る。

苑砥河上宮舊跡

は、尾崎停車場より十八町許り東南に當る、東島取村、大字自然田に、古木の欝蒼たる小山がある、今山の名を玉田山と稱してをります、乃ち其處です、山上に神寂た社がありまして、玉田神社と稱します、祭神は五十瓊敷皇子を祭つたのです、日本記を按じまするに、皇子は垂仁天皇第二の皇子で、河内國狹山池を始め、多くの池を堀り溝を開いて、專ら農事を興されたお方です、同紀に三十九年十月五十瓊敷の皇子、苑砥の

川上の宮に居まして、劒千口を作る、因て其劒を名けて川上部と謂ふ、亦の名は禊伴と曰ふ、石上神宮に藏む云々と見にて、歴史上古く世に顯れた土地です、此山の麓は三面は耕地に接し、一面は山に連なり、其山上より遠く前面を望めば、茅渟の海を隔て、兵庫、神戸、明石及び、淡路島までが、總て一眸の中に收まり、近く見れば、一面の曠野眼前に横はり、又其後面を顧みれば、葛城山及び其他の諸山、一高一低、相連續して遠近に聳へ、風光頗る美麗、境内の反別は三町歩に餘り、老松古杉參差として杖を交へ、赤日を遮り紅塵を隔て、春は曠野に麥芽と菜花と青黄の色を競ひ、秋は此山に連接せる山林に、多くの松萱を生ずるを以て、萱狩には尤も好い場所で、此近傍の人の遊園となつてをります。

自然居士禿倉

是も同所にあります、自然居士の木像が安置してありますが、其長二尺許り、近年此像に彩色をして、刦て古雅殊勝の相を失つたのは、眞に遺憾の事です、居士は當地の出生、故に自然居士と號したといふ事です、始めは法相を學び、後に禪に入て南禪寺大明國師の弟子と成て、東山の

雲居寺に住し、墓は京師西九條村の福田寺にあります、因にまうします、江州觀音城の東嶺に軍神を祭つてあります、其社を陽林堂と云ひます、聖一國師初め駿州の久能寺より江州の桑實寺に移住されましたが、近江守源信綱、深く國師に歸依しました、國師宋國に入て經山の無準の法を嗣ぎましたが、無準に請ふて陽林の二字を手書せしめ、歸朝の後是を信綱に與へし舊好を報はれました、正安二年仲冬源信綱自然居士をして其事を書しめ額の裏文としました、則ち自然居士の筆です。

波太神社

は尾崎停車場より十八町南に當る、東鳥取村大字石田にあります、其境内は封域頗る廣く、古杉老松參差として杖を交へ、人をして心清み氣新たならしむる靈地です、日本紀を按じまするに、垂仁天皇、天湯河板舉命に勅して、磐津別皇子の爲に鵠を捕へて奉らしめ、其功により性を捕鳥部と賜ふとあります、其子孫が領内に社を建て、天湯河板舉命を祭つたのが、即ち波太神社です、此社は延喜式内の舊社で、鳥取卿中の氏神です、社殿も宏壯で、參拜の人も常に澤山あります、相殿は八幡宮です。

捕鳥部万邸宅の舊地

同くこのところにあります、万主の事は、前に主の碑の所で述ました故爰では略します。

波有手村

尾崎停車場を去ること八町ばかりの所にあります、又の名は鳥取手村といひます、此村に

道弘寺の舊跡

があります、今辨財天の社があります、其地を蓬萊山と號してをります、其南に小社がありますが、何の神を祭てあるか詳がなりません、二社とも道弘寺の舊迹であります、觀音堂と二階堂は移して村の中にあります、太子傳曆通要に、和泉國日根郡道弘寺は聖德太子御願の寺と、此邊の古老相傳ふとあります。

お菊の像

是は同村の楊柳山法福寺にあります、寺は淨土宗、お菊の像は寫眞に採つておきました、此お菊の緣起の概畧を、當寺の記錄に就てお話し申せば、

お菊は關白秀次公の落胤、和泉の地士淡輪六郎の娘、御小督の局の腹より出生したのですが、秀次公養父秀吉公の勘氣を蒙り、高野山で生害された時、秀次の臣富田藏人、苦計をめぐらして、おこゝの方の父淡輪六郎方へ、窃に菊女を送りました、六郎秀吉公の怒りを怖れて吾家へおかず、波有手村の地士後藤六郎兵衛を頼み、其娘にして養育して貰ひました、お菊が十八の年、祖父の跡を繼いだ、其身の伯父に當る淡輪六郎の媒介で、紀伊國の代官山口喜内へ嫁づきました、所がをりしも大阪の役の時であつて、お菊の良人の山口喜内は、國主の淺野家に叛いて、大阪方へ欵を通じましたが、其事顯れて一家一族、大野瀨といふ所で死刑に處せられました、お菊は女の事として其數に洩れましたが、其日處刑の場所へかけつけ、强て願ふて良人喜内と共に、哀れ大野瀨の露と消へました、養父後藤六郎兵衛の妻、お菊の貞操を憐んで木像を造り、追善の爲め當寺へ寄附したとの事です、お菊の法名は、光德院法譽妙林大姉、元和元年六月某日死去、山口喜内とお菊の墓は、紀伊國山口村の遍照寺にあります、此寺は山口家代々の菩提所です、又同村にお菊を唄ふ手毬歌が殘つてゐますが、少し緣起の意味と異つてゐるやうですが、紀州で謠ふ同じ盆踊の歌と共に、左に揭げれきます、此歌に就て案内者の考へもありますが、長くなりますからこゝではまうしません

法福寺お菊ノ像

尾崎停車場ヨリ十二丁

The Statue of Okiku (Female bud dhistdevotee). One mile from Ozaki Station.

手毬歌

波有手で一番
六兵衛のこ、
六兵衛の娘は
阿菊とて、
山口喜内へ嫁入して、
大阪で貰ふた文證を、
城の小姓衆に拾はれて、
行てから七日も經たぬ間に、
樫井川で落して、
呉レヨト言ても呉もせず、

夫から阿菊は是非もなく、
御上の捕手が下るやら、
阿菊は其場を遁れ出で、
山道隱れて忍び來る、
互ひに悅ぶ顏と顏、
あの山越たら我が里か、
風もいよ〳〵吹て來る、
姉さんよ〳〵、
此山越たら和泉かよ、
やれ〳〵嬉しや助かつた、
かゝさんよ〳〵、
お菊ぢやあるまゐよう開ぬ、
お菊が來たほにこゝ開て、
お菊ぢやさけに開けて呉れ、
姉聟九兵衛さん呼で來て、
四十四本の障子開けて、
見御樣に詫るやら、
內は騷動大騷ぎ、
雪踏片足草履片足、
折しも姉さんと邂逅ひ、
姉さんよ〳〵、
此山越たら我里ぢや、
雨もしよぼ〳〵降て來る、
あの山越にたら和泉かへ、
和泉ぢやよ〳〵、
六兵衛の門口見にて來た、
阿菊がきたほにこゝ開て、
とゝさんよ〳〵、
お菊ぢやあるまゐよう開ぬ、
夜のことゆゑ開られぬ、
夫から門口開けられて、
座敷へ駈込閨に就き、

お菊女郎〳〵、
起て物言へ樣子聞せ、
とゝさんのおじやるに、
夫でもお菊起られぬ、
起て物言へ樣子聞せ、
裏へ廻りて手水行ふて、
白い手拭で顏を拭き、
水晶の珠數を手に掛けて、
西を向て南無阿彌陀、
北を向て南無阿彌陀
お菊女郎〳〵、
此所で死ぬべき所ぢやない、
難波の夫ともろともに、
篤と道理を辨へて、
淺野の事は姉うめが、
夫から菊の身拵へ、
かゝさんのおじやるに、
夫でもれ菊は起きられぬ、
起て言物へ樣子聞せ、
姉さんのおしつやるに、
夫からまんまと起られて、
赤い手拭でてゝ拭いて、
井戸の井筒に腰をかけ、
東を向て手を合せ、
南を向て手を合せ、
南無阿彌陀佛南無阿彌陀
九兵衛さんのおつしやるに、
大阪の軍の濟ぬ間に、
死ぬるも生るも天命と、
若しも追手の來る時は、
代りて罪を引受る、
二階へ上りて髮を結ひ、

紅つけ鐵漿つけ白粉つけ、
色よい小袖を上に着て、
お菊の拵へも濟たれば、
發途を祝ふ其中へ、
五十許りの侍士と、
青竹から竹杖につき、
お菊は私じやと姉さんが、
出れば稚兒泣いて出で、
れ菊に子はない身代りかと、
堅くお菊と僞りて、
連れて飯るとする所へ、
知らせの便りが來てからは、
眞のれ菊はわしぢやとて、
眞のれ菊はわしぢやとて、
捕人も何れを分けかぬる、
詮議をすれど雙方が、

白い小袖を下に着て、
金襴眞綿の帶を卷、
お附の拵へも濟だゆゑ、
四十ばかりの侍士と、
二十ばかりの供を連れ、
れ菊は居るかと尋ねたら、
代りて罪を求めんと、
捕人は不審と思れて、
詮議をすれど姉さんは、
捕人の侍士是非なくも、
お菊の夫は討死と、
妹は覺悟の死を決めて、
名乘りて出れど姉さんは、
義理を立て貫き一筋に、
姉も妹もれ菊とて、
何れもお菊と名乘居る、

捕人は詮議の手がゝりと、
二人が中へ歩ませる、
頑是ないげに母さんと、
お菊を引立て歸らんと、
馬の上へは鞍乘せて、
蒲團の上へは毛氈を、
抱き乘せて、
細引繩に道切られ
是れは波有手邊で謠ふものゝ最も完きものであつて、此外に此句を斷續して樣々に謠ふのもあるさうです、亦紀州で謠ふくどき文句は左の如くです

以前の稚兒抱て來て、
姉は焦燥れど稚兒は、
泣くより捕人は妹の、
裸馬を追出して、
鞍の上へは蒲團乘せて、
布きてれ菊をひらりと、
お菊は覺期の死出の旅、
紀州路さして別れ行く、

山口一番喜内さん、
六兵衛の娘はれ菊女郎、
山口喜内へ來る時は、
白い小袖も百七ッ、
木綿衣類は數知れず、

和泉で一番六兵衛さん、
山口喜内へ貰はれて、
赤い小袖を百七ッ、
黑い小袖も百七ッ、
帶は千筋二千筋、

下駄は百足百七ツ、
駕籠乘物も數知れず、
去られて來るなよれ菊女郎、
行た時や殿御の氣も知らず、
の氣も知らず、
云々惜いかな全きを得ません、此歌の全きを得ましたら、前の歌と照し合していよ〳〵事實を知ることを得られるだらうと想はれますから、尙能く聞合して、他日增補いたしませう

簞笥は百掉百七ツ、
是程拵へてやるからは、
私も去られよ思やせん、
御祖父さんや御祖母さん、
知らねばれ菊よ敎へてやろ

貝掛村及び貝掛松

貝掛村は、尾崎停車場より十七八町の所です、此村を貝掛けといふのは貝掛松があるからです、昔盗人が葛城村神於寺の寶物の法螺を取て、此地を過つたところ、其貝吹きもせぬに音を發しましたので、不思議に思つて路邊の松に掛て去つたといふ話があるので、夫で村の名を貝掛とつけたといふ傳へです、其松は二十九年五月の大風に倒れて、今は其根のみ、存してあります。

指出森

同村にあります、神功皇后三韓を討て凱旋の時、當所に船を繫がれ、武内宿禰皇子を抱いて海邊を逍遙した、その所といふ傳へです、次の驛は

箱作停車場

です、尾崎と此間は貳哩あります、停車場は同驛の東南にあります。

箱作村

は現住の戸數二百、人口六百二十二、當村は昔ははこの浦と云つたところです、土作日記に「このあひだにけふははこのうらといふ所よりつなでひきてゆくかくゆくあひだにある人のよめる　玉くしげはこのうら波たゝぬ日は海をかゝみとたれか見ざらん」とあるは此浦です、又重之朝臣の家集に「はこの浦に明くれあそぶ蘆田鶴の千年のかげゞともに見ゆらん」とも詠んであります。

石工

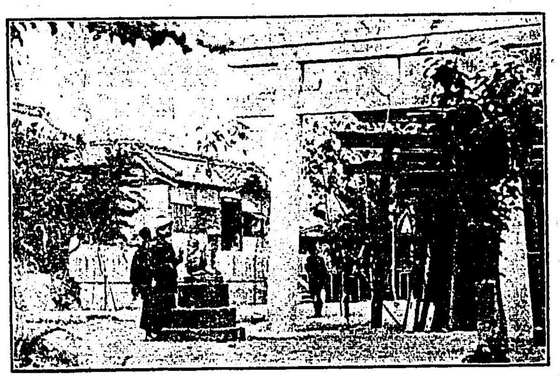
姓氏錄に、和泉國石作連は火明命十六世の孫、天香命の後なり、同右京の神別に云く、石作連は火明命六世の孫、建眞利根命の後なり、垂仁天皇の御世、皇后日葉酢媛命の奉爲に、石棺を作て之を獻る、仍ち姓を石作連と賜ふなりとありますが、當國の石は名産の一つで、其性細密にして物を造るに自在なので、今尙石工が多いですが、皆此石作の遺風でございませう、箱作驛には、殊に石工が多く住んでゐます。

田山稲荷

は箱作停車場を南西に距ること七町餘の所にあります、當時泉州第一の流行神で、大阪の高津高倉稲荷、備前の西條稲荷などゝ、肩を併べる稲荷です、泉州一圓はいふまでもなく、紀州、攝州、大和、殊に大阪市、堺市などからは、格別參詣人多く、一年平均一日百人以上との事、例月の午の日、又初午、二の午、三の午などは、社内は人の山爲すばかりの參詣です、一昨年までは今少し西の山手に社があつたのですか、社掌太田氏の盡力で、土地を購ひ社殿を新築して、今の所へ移したのです、併し此稲荷は隨分古い稲荷で、今より百二十年以前までの事は、明らかに

記錄に殘つてゐるといふ事です。

田山稲荷神社ノ景
箱作停車場ヨリ七丁



Tayama Inari (Shinto shrine). Half a mile from Hakotsukuri Station.

ましたが、淡輪氏の嫡傳は今尙紀州に在るといふことです。

淡輪村

は現在の戶數四百〇二戶、人口二千四百五十九人、郵便局警察分署等もあります、昔此村に淡輪を氏とする地士があつて、元弘建武以來元龜天正に至るまで此地を領し、諸所の合戰に武名を顯してゐます、淡輪大和守徹齋の代に至つて、其子御小督局を關白秀次の妾にしたので大閤秀吉に疎ぜられ、遂に所領を沒收され、徹齋の二男淡輪六郎兵衛、浪々の身と成て大阪の城に籠り、當國樫井の合戰に討死し

五十瓊敷入彦皇子御陵

は、村の入口、即ち東北の方、街道の西手、箱作停車場より二十七八丁西南の所にあります、以前は只舊墓と唱へて、其誰の墓といふ事を詳かにせず、或は小弓宿禰の墓であるだらうなどゝいふ説もあり、只泉州志には皇子の陵であらうとの説を掲げてありますが、維新後皇子の陵といふ事が判然して、立派にお手入が出來ました、皇子の事は尾崎驛より御案内した、菟砥河上宮舊趾の所で御話しましたから、此では申上げません。

紀船守墓

村の西の濱手、皇子御陵より四五丁隔つた所にあります、船守は桓武天皇の寵臣でありまして、天平寶字年中に從七位に叙し、同八年惠美押勝が叛逆した時、船守勅を受て是を擊ち、其勳功に依て從五位下勳五等を授かり、其後屢々數官を經て、延曆四年十一月中納言に任じ、近衛大將に任じられ、十年正月、大納言を拜し、十一年四月に薨じました、年

は六十四、帝哀悼甚しくして朝を視たまはず、詔して正二位右大臣を贈られました。

黒崎

は淡輪村にあります、土佐日記に「二月朔日あしたの間雨ふりうまのときばかりにやみぬればいづみのなだといふ所より出でこぎ行く海のうへきのふの如くに風波みへずくろさきの松原をへてゆくところの名はくろくく松の色はあをくいその波は雪の如くにかひの色はすはうにて五色に今一いろあんぞたらぬ」と書いた黒崎は此處です、淡輪より深日へ一哩餘。

深日停車場

は深日驛の東南にあります。

深日

は現在の戸數三百三十七戸、人口千八百〇九人、漁業を以て稼業としてゐる人が多數を占めてゐます。

深日浦

は名所として舊く世に知られてゐました、代々の撰集を始め家々の家集其他の歌集に數多の歌がのせてあります、紀伊國丹後國にも同名の名所があつて、混合して孰れとも分つことが出來ません、殊に名高い藤原清正の「天津風ふけひの浦にゐるたづのなどか雲井にかへらざるべき」の歌は紀の守になりて殿上にもかへりせでといふ端書がありますから、是は無論紀州のふけひを詠だのです、夫等の論はさておいて、舊く世に顯れた名所程あつて、海の景としては此浦の景色が實に和泉第一と云つて宜しうございませう、寫眞もとりましたが、僅に其一班をしかお見せまうすことの出來ぬは、誠に遺憾でございます、此浦を詠んだ歌のあまたある中で、四季に分て一首づゝを摘で左にお目にかけます

夫木　春風のふけひの浦にちる花をさくらかひとてひろふけふかな　上總

歌枕　夏の夜はふけひの浦のほとゝぎす岩うつ波のたちかへりなけ　親隆

拾三　秋もなほ今はあけぬの月ぞすむ　ふけひの浦の松風に　たづ鳴く夜半の

深日　浦　黒崎　停車場

千歳　ちとせ　ちとせに月かゝりたる　ふけひの浦にあそぶ　家　こゝにすれば　蓮　ながめ

Fukei ura. Crose to Fukei Station.

又晋其角の句に

若はみつ吹飯の月を夜道かな

といふのがありますが、面白く詠みました、此浦の景色を和泉名所圖會に述べてありますが、能く其趣をつくしてありますから、左に抄して案内者の饒舌に換へます

都て此浦は南北壹里許にして、濱松の色濃に蘆邊には田鶴の聲、波間には千鳥鳴つれて滿干にゆられ、江水洋々として、西の方には淡路の翠巒高く聳へ、北は摩耶六甲山武庫一の谷の嶺烈なり、南は紀の海加田の湊粟島の神祠近く、其西には二子島阿波の鳴門の海あらくして、空は滄溟につゝきて漁舟ところ〳〵にちいさく、渚は眞砂淨ふして洗ふが如く、櫻貝春風にうち上て殘月端山に白く、秋の汀には蓼の花赤く巨巖とゝしたにたちて物すごく、其名を藻刈る海士乙女に問へば冠石烏帽子岩入道岩などゝ敎ゆ、そも〳〵此浦はむかしより和歌の名どころにして古人の秀咏多く代々の集にも見へたり、此國の南なれど名高き勝地にして風流の輩たゞに過くべきにもあらす胥を祭り屈を吊するの江頭ともいひつべきものか。

深日行宮

昔當驛にあつたのですが、今は其迹も定かでありません、續日本紀に、天平神護元年九月庚戌、使を遣はして行宮を大和河内和泉等の國に造らしむ、紀伊國と幸したまはんとの用意なり、同十月甲申、和泉國日根郡深日行宮に到りたまふ時に、西の方暗暝にして常の風雨に異なり、紀伊國守小野朝臣小贄、これよりして還る、詔して絹三十疋綿二百疋を賜ふとあります。

吹飯城跡

當驛にあります、平家物語に、壽永三年阿波國安摩六郎忠景、紀伊國園部兵衛忠康志を同じくして、和泉國吹飯に城門に築いて籠居す、平家の大將能登守敎經、兵船を進め來つてこゝを攻む、安摩園部防ぐに勝ずして大に敗北す、敎經城兵の首百三十を得て福原に歸るとあります。

加茂神社

は當驛の村社です、社殿は左まで立派ではありませんが、小高い所で、深日の浦の景色を見るには宜いところです。

國玉神社

是も當驛内にあります、延喜式内の神社で、大巳貴神を祭つてあります。

彌勒寺

當驛内にあります、昔右衛門允猪使公忠の所領で、天德元年氏寺を深日村に建て、大日、釋迦、彌勒、藥師、四大天王、十八善神を安置しましたが、今は伽藍荒廢して寺號を失ひ、僅に彌勒佛一尊を殘して、後世彌勒寺と號しまた、願主公忠及び檢校散位平何某郡補使正六位上紀朝臣等の連印の證文今尚當寺に在ります。

飯盛山

是も當驛の東にありますが、其形容飯を盛つたやうですからその名に呼れたのです、此邊第一の高山です、昔は山上に飯盛寺があつて、役行者の開基です、今は只舊礎を殘すのみです、峰中記には、飯盛寺は本尊釋迦、藥師、とあり、又元仁五年四月の證文に云はく、飯盛寺嶺の堺、東は作佛房谷を限り、西は孝良下を限り、南は七曲を限り、北は白樫の尾を限る云々とあり、又正和四年十一月當莊の領主平宗繁寺田寄附の證文があります、宗繁は北條高時の家族五大院右衛門と號して、高時の嫡男邦時の母は此宗繁の妹です、深日驛より粟村驛まで、五哩餘、此間に

孝子村

があります、此處が即ち孝子峠孝子の墜道のある所です、當村は戸數百拾五戸、人口六百六拾五人、此村の孝子峠より二三十間ばかり下に

橘逸勢父子墓

があります、弘仁九年七月庚申逸勢は罪に依て伊豆に流されましたが、其途中で八月の甲戌、遠江國板築驛で死去しました、然るに其女父の流罪を悲み、監送の官兵の目を忍んで、晝は止り夜は行いて之に從ひましたが、父の死を悲むこと甚しく、屍を假に其驛に葬り、其側に廬を結ん

で屍を守つて去らず、遂に落髪して尼になり、自ら妙冲と號し、曉夜讀經追善に明し暮すこと十年一日の如し、行旅過者之を見て涙を流すくらゐでありましたが、朝廷でも其女の孝心を感し、且は逸勢の罪の寃なる事も判つたので、十年の後、嘉祥三年五月壬辰、正五位下を追贈し詔を遠江國に下して、本郷に歸り葬ることを許されたので、妙冲尼は歡んで自ら父の屍を負ふて京に歸り、時の人に孝女と稱へられた事は三代實錄にも出てれり、又逸勢の墓は京都姉小路北堀川東にありますから、妙冲尼が遠江から京まで父の屍を負ふて來たのは確實ですが、此邊まで來たといふ傳へはないことのやうに思はれます、併し此二基の墳墓で薔くより逸勢妙冲尼といふ口碑が殘り、地名をも孝子と喚でゐるからは、何か緣り所があるかも知れません、世の學者の說を開きたいものです、又泉州誌には、峯中記の說を採て、此兩墓を役行者母子の墓のやうにしたゝめてありますから、參考の爲め左に掲げます、峯中記に曰く孝子の多輪南北に報恩の澤あり、般若の塔は行者の慈母の墓なり、北に孔雀の嶽あり、云々と本文を引て又其考を添へてあります、余按ずるに孝子村は役行者孝の爲に收めらるゝの地か、日本靈異記上卷に云く、藤原の宮に御

宇天皇の世、葛木の峯一語主の大神之を讒して曰く、役優婆塞謀叛すと天皇使を遣して之を收むるところ、驗力に因て輙く取捕る可らず、其母を收めとる所、優婆塞母を免れしめんが爲め、故に出來つて捕へらる、即之を伊豆の島に流す(原文漢文なれど分り易らん爲め和譯しました)

高山寺

是は上孝子村にあります、役行者の開基、本尊十一面觀世音、峯中記に永仁六年九月二十一日行者の佛具を堀出す、又弘安十年三鈷鐃鉢を堀出す、今高山寺に在り、大門に般若尾あり、次に閼伽井ありと記してあるところを見ますと、前の孝子の墓は、役行者母子の墓だといふ說もまんざら據ろのないとも云へません、又

下莊村

も其間にあります、戸數二百八十六戸、人口千九百〇三人の大村です、之を經て

和歌山北口停車場

に達します、深日より此間五哩餘、驛より驛の里程は、隧道のある爲め此所が一番長うございます、停車場は野崎村大字福島にあります――是より和歌山まで五六丁――案内者が線路を跋渉した時は、孝子隧道大工事中で、之より先へ進むこと出來ず、よんどころ無く谷川を經て紀州へ這入りましたから、其順路に依て御案内いたしません。

谷川村

土佐日記に「とらうの時ばかりにぬしまといふ所をすぎてたなかはといふ所をわたる」と書いてある、このたなかばは此村です、谷川鍊瓦株式會社があります。

谷川湊

は昔此地の領主は桑山法印、慶長年中始めて港を堀て渡海の船に便りを與へたのです、法印曾て祿を太閤秀吉に受け、恩惠を蒙りましたので、其報謝の爲め、港の西の丘に祠廟を建て、豊國山と呼びましたが、秀頼公十二歳の時、自ら豊國大明神の五字を書いて法印に賜はりました、今は理智院にありますから、詳しい事は理智院の所で御案内いたしません、此湊は桑山法印の堀初めた時から數多の年累り、土砂が上つて埋れたので、今は其處を古湊と云ひ、其後北の方に新湊を作つて、諸國の船こゝに入船し、遊女屋なども所々に見にて、三絃の聲濱風に響き、なかなか繁昌の湊です、

谷川船渠

同所に船渠設置の計畫があります、資本金額五百萬圓にして、之が首唱者は豫備海軍大主計石原勇五郎氏で、其贊助者は池田治一、戸口龜太郎大澤平次郎氏等です、明治二十八年の末の頃より工學士佐藤成敎氏が、屢々實地に就て海陸實測を遂げ、岩盤の深淺を調査した上で、船渠を設置すること甚だ容易だといふ鑑定をしたといふことです、其他に肝付海軍大佐、實地を視察して、之も有望なることを首唱者に語つたといふことです。

觀音崎

谷川の濱の右にあります、小さな堂に觀音を安置してあります、此尾崎より和泉の國の浦々、西は須磨明石南は淡路島など見にて、極めて絶景の地です。

寶珠山光明寺理智院

谷川村にあります、宗旨は眞言、天平年中聖武帝の本願でありまして、開基は行基菩薩です、本尊不動明王(弘法大師の作、秀吉公朝鮮征伐の時海路の安穩を祈つたので、船玉の本尊とも云ひます、又腹内に不動尊長一尺一寸の像が籠めてある、是も同作です)、脇壇に(聖觀音を安置してあります、是は行基の作です)、秀吉公像(本堂の奥の社内に安置してあります、堅八寸許り横九寸ばかりの小像ですが、面貌隆準龍顏極めて非凡、威風凜々四邊を拂ひ、人をして想はず尊敬の念を興さしめます、前にも申す通り、始めは豐國山祠廟の神体であつたのを、元祿年中の火災の後當寺に移したのです、即ち當山も桑山法印が再興の地です、寺の傳へでは、太閤五十七歳即ち朝鮮征伐の時、此港に船がいりした緣故に依り、木像を彫刻して當寺に納めたと云ひますが、夫は誤りです、桑山法印は

太閤の恩に報ゆる爲め、大阪寺町の一桑山珊瑚寺にも、同寸同作の太閤の像が寄附して今に現存しております、容貌恰好少しも違ひはありません、併し同寺でも太閤五十七歳の影といふ説はあります、傍に辨財天の像が安置してあります、又高麗犬の古物が置てありますが、上古の作と見にて、甚だ奇雅です、寺の傳へでは曾呂利新左衛門と豐國廟へ寄附したものだといふ説があります、恐く附會の説でせう)、流木觀世音(天明五年五月十八日當所の海濱に長一丈亘り弐尺餘の材木が流れ寄つたので、浦人が薪にしやうと思つて、斧を以て打かけた途端、眩暈つて悶絶しました、夫から怖れて其木に網をつけ沖の方へ流してやりますと、又二三日を經て元の所へ流れ寄りましたので、浦人いよ〳〵恐れまして、海濱へ引揚げ、註迷を引き不淨を拂つて置きますと、遠近の村里より大勢の人が參詣して、觀音の靈木が此濱に上らせたまふと告るものがあつたから、夫で參詣に來たと、燈明を捧げる者もあれば、供物を供へる者もあつて、いろ〳〵の願ひ事をするに、靈驗が立所にあるので、其事を言傳へ聞傳へて、日に增し參詣人が群集するので、此理智院の本堂へ移し、此木の片面を彫て觀音の像を作り、其彫拔いたあとで厨支をしつらひ、

夫に納めて安置して乃ち流木觀世音と稱したのです)

鳳樹山金剛院興善寺

理智院の隣りです、宗旨は天台、創めは文德帝の本願であつて、仁壽年中慈覺大師の開基です、佛殿は中尊大日如來、左藥師如來、右釋迦如來(俱に慈覺大師の作)、額は興善寺(黃檗悅山筆)、二重閣の間に掛けてあります)、不動堂(不動尊、千手觀音、元三大師を安置してあります)、龍王社(池の中にあります、鎭守藏王權現、熊野權現、神明、愛宕山王、八幡、御靈等が祭つてあります)、石燈籠堂の前にあります、施主沙彌宗實と勒けてあります、莊嚴善寺、正平二十一年九月廿八日造る、此宗實は大納言宗實、南朝の功臣です)、櫻門(四天王を前後の扉の中に安置してあります、額鳳樹山普照獨湛筆)、當寺は元龜天正の兵燹に罹つて、伽藍及び記錄等、悉く燒失ひましたから、其由來を詳にする事は出來ませんが、幸ひに諸佛の像を蓮池に投込だので火災を免れました、近來專海といふ住侶が本堂を建立して、火災を免れた諸尊を安置したのです。

二宿觀音

是は谷川村を少し離れた西畑の佐瀨川村にあります、寺の記錄に依りますと、明鏡山二の宿の觀音は、役優婆塞此峯を廻つて、大悲の像を彫刻したく思へど、心に叶ふ良材が無つたが、たま〳〵紀伊國海士部郡の海濱で、靈木一株を得、自ら作つたところの像だといふ事です、又總て葛城峰中の靈區を法華二十八品に表されましたが、此地は即ち方便品に擬して、第二の宿と定めたといふ事です。

小島住吉社

是は谷川村のつゝき小島村の岩上にあります、此所の產土神です、此所は渡海の船撫りであつて、家居岸に立併んで數十軒あります、谷川より二十町ばかり、行く道は多く海濱を傳ふて行くのですから、奇石怪岩ところ〳〵に、或は横はり、或は聳ち、路次も景色面白く、又小池谷の內の三の谷といふ所には、和泉式部の鏡石だの鐵漿壺だのといふ名所があります、此小島は和泉國の南極で、紀州大河村まで纔か六町足らずです、

加田港の粟島明神まで、一里です、何處やら相模の江の島の趣があつて、頗る絶景です。

木本峠

案内者は此峠を一谷川より一里半一越して紀州へ這入り、加田の港へ一泊して、翌朝粟島明神今は加太神社といふへ参拜いたしましたから、紀州は加田の港から御案内いたしませう、木本峠の頂上から和歌山を望んだところは、城あり、町あり、行儀好く區畫したる田圃あり、長き松原あり、河あり、海あり、寺あり、社あり、實にあらゆる風物を一眸の内に集めて、言語に絶した景色です、是を和泉國の名殘りとして、紀伊國へ移りません。

南海鐵道旅客案内上巻 終

明治三十二年六月十九日印刷
明治三十二年六月廿二日發行

版權所有

編述者 大阪市東區北濱三町目六拾一番邸 宇田川文海
編述兼發行者 大阪市南區難波新地六番町 南海鐵道株式會社
右代表者 大阪市東區神崎町百三番邸 今井情
印刷者 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎
印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三光社
寫眞版印刷 東京市京橋區築地南本郷町六番地 原田印刷所

南海鐵道旅客案内上卷正誤

上卷 七十三ページ Station ハ Station ノ誤
仝 百四十四ページ Qalm ハ palm ノ誤
仝 仝 ページ Temqle ハ Temple ノ誤
仝 百五十ページ Kaiko ハ Aguoki ト訂正
仝 百六十一ページ Moju ハ Modsu ノ誤
仝 百九十ページ Thepine ハ The pine トスベシ
仝 二百三ページ Twomiles ハ Two miles トスベシ
仝 二百十一ページ Shinoda mori ノ間ニ no ヲ入ル可シ
仝 仝 ページ Otsu ハ Ōtsu ノ誤
仝 二百三十五ページ Kishiwadun ノ n ハ除ク可シ
仝 二百六十八ページ Miele ハ Mile ノ誤
仝 仝 ページ Brom ハ From ノ誤
仝 二百八十一ページ Statoin ハ Station ノ誤
仝 二百九十九ページ Temqle ハ Temple ノ誤
仝 三百十一ページ Buddhistdevotee ハ Buddhist Devotee ト二語ニスベシ
仝 三百二十三ページ Fukei ハ Fuke ト改メベシ
仝 仝 ページ Crose ハ Close ノ誤